

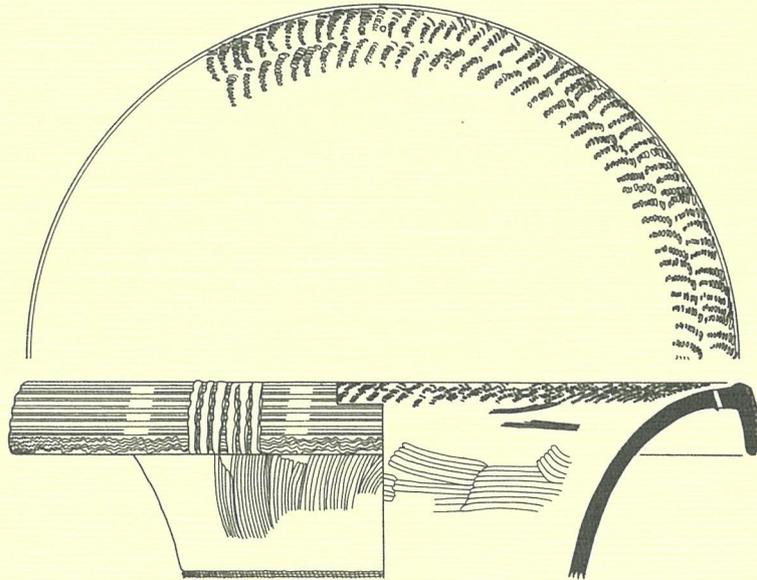
(財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第32集

大阪府茨木市所在

東 奈 良 遺 跡

— 茨木市東奈良1丁目府営茨木東奈良住宅建替に伴う
発掘調査報告書 (1996年度・1997年度) —

(弥生時代集落跡と中世水田跡の調査)



1998年3月

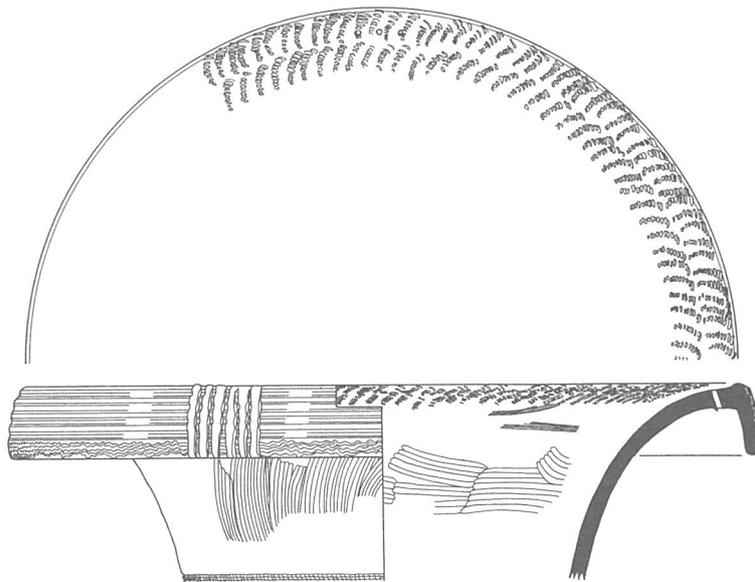
財団法人 大阪府文化財調査研究センター

大阪府茨木市所在

東 奈 良 遺 跡

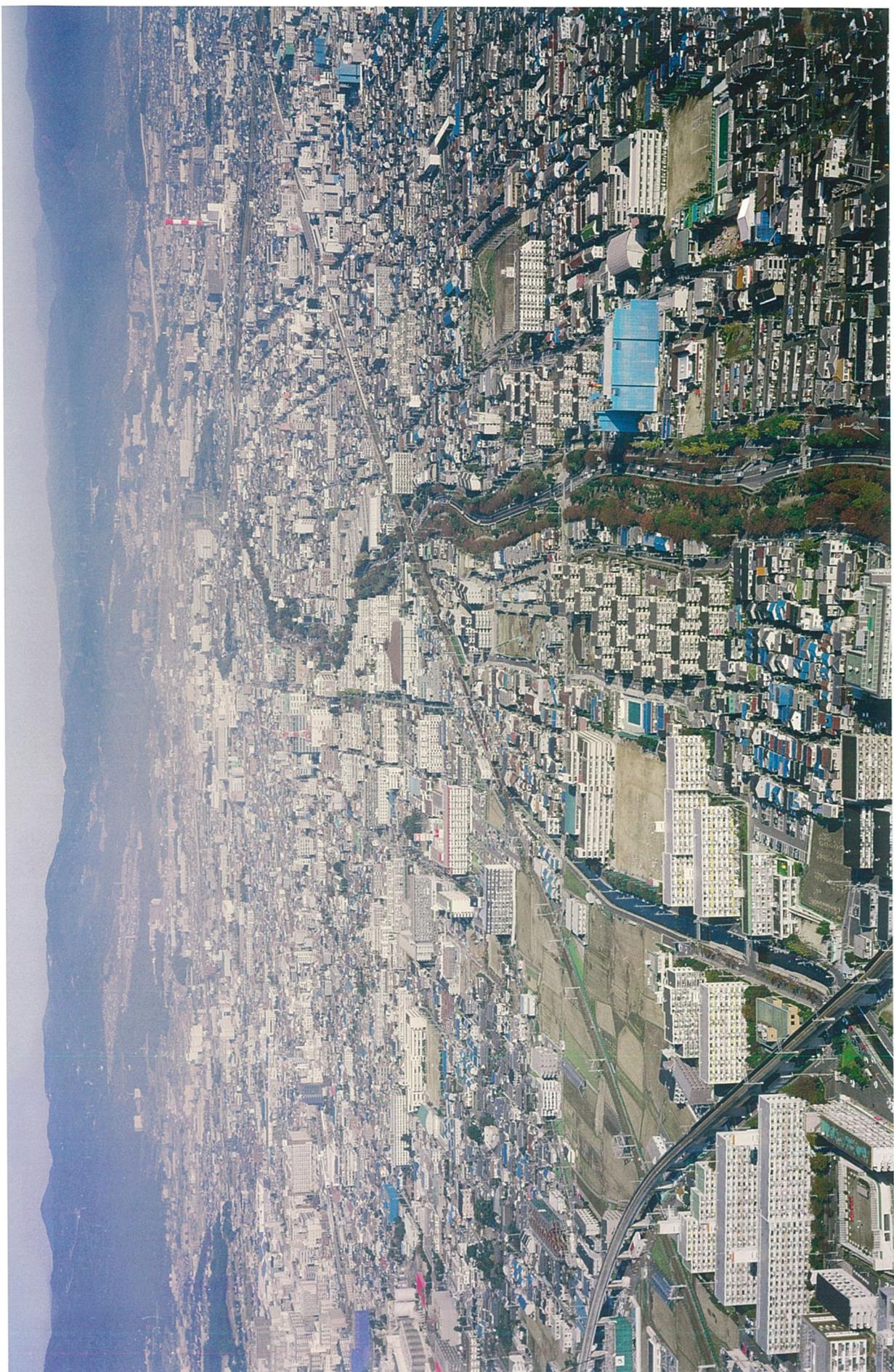
— 茨木市東奈良1丁目府営茨木東奈良住宅建替に伴う
発掘調査報告書 (1996年度・1997年度) —

(弥生時代集落跡と中世水田跡の調査)



1998年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター



巻頭カラー1 東奈良遺跡 調査地周辺 航空写真(南より)



a 東奈良遺跡 調査地近景 航空写真 (南より)



b 1Aトレンチ 弥生I遺構面 西半部 (南より)



a 2Aトレンチ 弥生I遺構面 西半部(南より)



b 2Aトレンチ 弥生I遺構面 東半部(北より)



a 2Aトレンチ 弥生Ⅱ遺構面 東半部（南西より）



3Aトレンチ Ⅲ-2層出土 銅鐸形土製品 (b 内面 c 外面)

序 文

東奈良遺跡は大阪府の北部、茨木市に位置する南北1500m、東西800mに及ぶ大遺跡です。昭和45年に水路の改修工事で大量の弥生土器が発見されて以来、マンション建設などの大規模開発に伴って調査が継続して行われてきました。

東奈良遺跡の名を全国的に有名にしたのが、銅鐸・銅戈・勾玉の鋳型の発見です。なかでも東奈良遺跡出土の銅鐸の鋳型をめぐっては、香川県我拝師山鐸と大阪府桜塚原田神社鐸が同一の鋳型で、また別の鋳型からは兵庫県気比第三号鐸が作られていることがすでに明らかになっています。鋳型の出土から東奈良遺跡は、青銅器などの工房を持った弥生時代の有数の集落遺跡として知られています。

この後、茨木市教育委員会によって調査が随時行われてきました。平成に入ってから、大阪府営住宅の建て替えに伴い、遺跡の北東部の調査に着手しています。今回の調査区に隣接した地域で大阪府教育委員会、(財)大阪府埋蔵文化財協会の調査では、中世の水田や畑、弥生時代の方形周溝墓や集落が検出されました。

平成8年度に始まった今回の調査では、中世の水田跡の下層に弥生時代の集落や集落を取り囲む環濠の可能性のある大溝などの遺構が多数検出されました。また銅鐸を忠実にまねた銅鐸形土製品も発見されました。これらの遺構・遺物は従来の資料とともに、当地域の歴史にとどまらず、日本の古代史を解明してゆく上でかけがえのない貴重な資料となるものです。

最後になりましたが、本調査を実施するにあたって、大阪府教育委員会、大阪府建築部住宅建設課、茨木市教育委員会、地元自治会など関係者各位に多くのご支援とご協力を賜り、深く感謝しております。今後とも当センターの事業に関して、各位の変わらぬご理解とご支援をお願い申し上げます。

平成10年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理事長 坪井清足

例 言

1. 本書は大阪府茨木市東奈良に所在する府営東奈良住宅の建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府建築部住宅建設課の委託を受けて、財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施した。1996年度は発掘調査を行い、1997年度は発掘調査と併行して整理作業を行った。
3. 発掘調査及び整理作業は大阪府教育委員会の指導の下、1996年度は財団法人大阪府文化財調査研究センター調査部長井藤徹、調整課長中西靖人、北部調査事務所所長玉井功、係長小野久隆の下に担当主査入江正則、技師川瀬貴子が発掘調査を行い、1997年度は調査部長井藤徹、調整課長中西靖人、北部調査事務所所長玉井功、係長西口陽一の下に、主査入江正則、専門調査員松田留美が担当した。
4. 遺構写真は入江と川瀬が、遺物写真は主査平井貞子が撮影した。
5. 自然科学的分析は次の機関に委託した。
花粉・珪藻・プラントオパール分析 パリノ・サーヴェイ 株式会社
プラントオパール分析 株式会社 古環境研究所
胎土分析 株式会社 第四紀地質研究所
石材鑑定は京都教育大学井本信廣氏にお願いした。
また胎土分析に関して当センター中部調査事務所所長赤木克視氏、南部調査事務所技師秋山浩三氏に協力を得た。
6. 発掘調査及び整理作業で以下の方々のご教示を賜った。記して謝意を表したい。(敬称略)
大阪大学 都出 比呂志
大阪府教育委員会 堀江 門也、松岡 良憲、奥 和之、阿部 幸一、三木 弘
茨木市教育委員会 奥井 哲秀、濱野 俊一
守山市教育委員会 伴野 幸一
7. 発掘調査及び整理作業では次の調査補助員の方々の援助を得た。
恵良大蔵、遠藤祐輔、大島美希、大西邦明、奥田直美、奥田純一、兼島美帆、北風孝起、黒田優美、高馬覚、古藤浩美、伊達憲一、田中正子、谷口倫子、佃愉佳、津田春子、中田麻矢、中村美也、二宮栄子、日高圭吾、兵頭功、藤江冬人、前田千津子、松岡聖美、丸山雅裕、水足歩、八十千里、山林祐子、山本命
8. 主要な遺構に関する詳細な数値や埋土、層位などは、遺構一覧表に取りまとめたので本文中に記さなかった。巻末の遺構一覧表を参照してほしい。
9. 掲載した遺物に関する法量、胎土、色調、調整なども遺物一覧表に掲載したので、本文中には記さなかった。巻末の遺物一覧表を参照してほしい。
10. 本調査に関わる遺物、写真、カラースライド、実測図等の資料は財団法人大阪府文化財調査研究センター北部調査事務所にて保管している。広く利用されることを希望している。
11. 本書の執筆編集は1996年度を入江が、1997年度を松田が行った。

凡 例

1. 掲載した遺構平面図、断面図の縮小率はそれぞれ挿図にスケールとともに表記している。
2. 断面図に表記した海拔は東京湾平均海面（T.P.）を使用している。
3. 発掘調査に関わる位置表示、地区割りは国土座標の第Ⅵ系を使用している。
4. 遺物実測図の縮尺は土器が1/4、土器拓本は1/3、1/4、石器、石製品は2/3、金属器、土製品は1/2、木製品及び未製品は1/2、1/3、1/4である。それぞれ縮尺を図面に表記している。
5. 土器では断面をすべて黒塗りとして、断面で土器の種類を区別しなかった。従って土器の種類及び器種、時代は巻末の遺物一覧表を参照してほしい。
6. 参考文献は本文末尾に掲載している。
7. 土層、土器の色調は小山正忠、竹原秀雄編『新版 標準土色帖』19版 1997年1月 日本色研事業株式会社に準拠した。

本 文 目 次

序文

例言

凡例

第1章 調査に至る経過	1
第2章 調査の方法と既往の調査	1
第1節 調査の方法	1
第2節 東奈良遺跡の既往の調査	3
第3章 位置と環境	5
第1節 歴史的環境	5
第4章 調査の成果	8
第1節 基本層序	8
1 V層	8
2 IV層	8
3 III層	11
4 II層	11
5 I層	11
第2節 自然地形	12
第3節 検出した遺構（1996年度調査）	12
1 弥生時代以前	12
(1) 開析谷	12
2 弥生時代	14
(1) 弥生時代中期	14
(2) 1Aトレンチ	15
1) 掘立柱建物	15

2) ピット	19
3) 溝	19
4) 土坑	24
(3) 2 A トレンチ	26
1) V層上面の遺構 弥生 I	28
2) IV層上面の遺構 弥生 II	30
3) 掘立柱建物	30
4) V層上面 弥生 I の掘立柱建物	30
5) IV層上面 弥生 II の掘立柱建物	35
6) ピット	41
7) 土坑	41
8) 溝	49
9) 風倒木痕	50
(4) 3 A トレンチ	50
1) 溝	51
2) ピット	54
3) 土坑	54
(5) 4 A トレンチ	54
1) 溝	54
2) 土坑	56
3) ピット	56
4) 風倒木痕	56
(6) 5 A トレンチ	56
1) 土坑	56
2) ピット	60
(7) 弥生時代後期	61
3 古墳時代	62
(1) 1 A トレンチ	62
(2) 2 A トレンチ	62
(3) 3 A トレンチ	63
(4) 4 A トレンチ、5 A トレンチ	63
4 古代	64
(1) 1 A トレンチ	64
(2) 2 A トレンチ	64
(3) 3 A トレンチ	64
(4) 4 A トレンチ	64
(5) 5 A トレンチ	64
5 中世	64

(1) III層	64
1) III-2層堆積層	64
2) III-1層堆積層	65
6 中世 I	65
(1) 1 A トレンチ	65
(2) 2 A トレンチ	66
(3) 3 A トレンチ	67
(4) 4 A トレンチ	68
(5) 5 A トレンチ	70
7 中世 II	70
(1) 1 A トレンチ	70
1) 中世 II-1	70
2) 中世 II-2	71
(2) 2 A トレンチ	72
1) II-2層上面の遺構	72
(3) 3 A トレンチ	72
(4) 4 A トレンチ	73
(5) 5 A トレンチ	73
8 中世 III-1、中世 III-2	74
(1) 2 A トレンチ	74
1) II-1層中の遺構 中世 III-1	74
2) II-1層上面の遺構 中世 III-2	75
(2) 3 A トレンチ	75
1) II-1層上面の遺構 中世 III-2	76
(3) 5 A トレンチ	76
1) II-1層中の遺構 中世 III-1	76
2) II-1層上面の遺構 中世 III-2	76
9 近世	77
(1) 3 A トレンチ	77
(2) 5 A トレンチ	77
第4節 出土した遺物 (1996年度調査)	77
1 土器	77
(1) 遺構出土遺物	77
1) 1 A トレンチ 遺構出土遺物	77
2) 2 A トレンチ 遺構出土遺物	80
(2) 各層出土遺物	96
1) IV層 出土遺物	98
2) III-2層 出土遺物	105

3)	遺構、Ⅳ層、Ⅲ-2層、出土遺物 拓本	109
4)	Ⅳ層、Ⅲ層 出土遺物	110
5)	Ⅲ-1層 出土遺物	112
6)	Ⅲ層、Ⅱ-2層 出土遺物	112
7)	Ⅱ-1層、Ⅰ層 出土遺物	114
2	石製品等	114
(1)	石庖丁	114
(2)	石斧類	115
(3)	敲石、砥石	118
(4)	石鏃、石剣、その他	120
3	金属器	122
4	土製品	122
5	木製品	125
	第5節 検出した遺構・遺物(1997年度調査)	126
1	1 B トレンチ検出遺構	126
(1)	弥生時代	126
1)	風倒木痕	126
2)	溝	126
3)	ピット	126
(2)	中世Ⅰ	126
1)	水田跡	126
2)	溝	126
(3)	中世Ⅱ	126
1)	道路状遺構	128
2)	畝溝	128
(4)	1 B トレンチ 出土遺物	129
2	2 B トレンチ検出遺構	131
(1)	弥生時代	131
1)	溝	131
2)	開析谷2073	131
(2)	中世Ⅰ	131
1)	水田跡	131
2)	溝	131
(3)	中世Ⅱ	133
1)	水田跡	133
(4)	2 B トレンチ 出土遺物	133
3	3 B トレンチ 検出遺構	135
(1)	弥生時代	135

(2) 中世 I	135
1) 水田跡	135
(3) 中世 II	135
1) 水田跡	135
2) 溝	135
(4) 3 B トレンチ 出土遺物	135
4 4 B トレンチ 検出遺構	139
(1) 弥生時代	139
1) 風倒木痕	139
2) 落ち込み	139
(2) 中世 I	140
5 小結	140
第5章 まとめ	142
付章1 東奈良遺跡の古環境復元 パリノ・サーヴェイ株式会社	173
付章2 大阪府東奈良遺跡におけるプラントオパール分析 株式会社 古環境研究所	193
付章3 東奈良遺跡出土土器胎土分析 株式会社 第四紀地質研究所	197
報告書抄録	

挿 図 目 次

挿図1 調査区と地区割り	2
挿図2 東奈良遺跡の既往の調査区位置図	4
挿図3 東奈良遺跡の位置	5
挿図4 周辺の歴史的環境	6
挿図5 基本層序断面図	9・10
挿図6 3 A トレンチ 開析谷断ち割り断面図	13
挿図7 開析谷範囲図	14
挿図8 1 A トレンチ V層上面 弥生 I 遺構 平面図	16
挿図9 1 A トレンチ V層上面 弥生 I 建物 1、2 平面・断面図	17
挿図10 1 A トレンチ V層上面 弥生 I 建物 3、4 平面・断面図	18
挿図11 1 A トレンチ V層上面 弥生 I 建物 5、6 柵 1 平面・断面図	20
挿図12 1 A トレンチ V層上面 弥生 I ピット 平面・断面図	21
挿図13 1 A トレンチ V層上面 弥生 I 土坑 溝 平面・断面図	22
挿図14 1 A トレンチ V層上面 弥生 I 土坑 平面・断面図	23
挿図15 1 A トレンチ V層上面 弥生 I 溝1258、土坑 平面・断面図	25
挿図16 2 A トレンチ V層上面 弥生 I 遺構 平面図	27
挿図17 2 A トレンチ IV層上面 弥生 II 遺構 平面図	28
挿図18 2 A トレンチ V層上面 弥生 I 建物 7、8 平面・断面図	29
挿図19 2 A トレンチ V層上面 弥生 I 建物 9、10 平面・断面図	31

挿図20	2 A トレンチ	V層上面	弥生 I	建物11、12	平面・断面図	33
挿図21	2 A トレンチ	V層上面	弥生 I	建物13、14	平面・断面図	34
挿図22	2 A トレンチ	V層上面	弥生 I	建物15、16	平面・断面図	36
挿図23	2 A トレンチ	IV層上面	弥生 II	建物17、18	平面・断面図	37
挿図24	2 A トレンチ	IV層上面	弥生 II	建物19、20	平面・断面図	38
挿図25	2 A トレンチ	IV層上面	弥生 II	建物21、22	平面・断面図	39
挿図26	2 A トレンチ	V、IV層上面	弥生 I・II	ピット	平面・断面図	40
挿図27	2 A トレンチ	V層上面	弥生 I	ピット内遺物出土状況	平面・断面図	42
挿図28	2 A トレンチ	V、IV層上面	弥生 I・II	土坑 溝	平面・断面図	44
挿図29	2 A トレンチ	V、IV層上面	弥生 I・II	土坑	平面・断面図	45
挿図30	2 A トレンチ	V、IV層上面	弥生 I・II	土坑	平面・断面図	46
挿図31	2 A トレンチ	V層上面	弥生 I	土坑 風倒木痕	平面・断面図	47
挿図32	2 A トレンチ	V層上面	弥生 I・II	土坑 溝	平面・断面図	48
挿図33	3 A トレンチ	V層上面	弥生 I	溝	平面・断面図	51
挿図34	3 A トレンチ	V層上面	弥生 I	ピット 土坑	平面・断面図	53
挿図35	4 A トレンチ	V層上面	弥生 I	溝	平面・断面図	55
挿図36	4 A トレンチ	V層上面	弥生 I	土坑	平面・断面図	57
挿図37	4 A トレンチ	V層上面	弥生 I	ピット	平面・断面図	58
挿図38	4 A トレンチ	V層上面	弥生 I	土坑 風倒木痕	平面・断面図	59
挿図39	5 A トレンチ	V層上面	弥生 I	遺構	平面図	60
挿図40	5 A トレンチ	V層上面	弥生 I	土坑 ピット	平面・断面図	61
挿図41	5 A トレンチ	V層上面	弥生 I	ピット	平面・断面図	62
挿図42	3 A トレンチ	IV層上面		平面図	63	
挿図43	1 A トレンチ	III-1層上面	中世 I	遺構	平面図	65
挿図44	2 A トレンチ	III-1層上面	中世 I	遺構	平面・断面図	66
挿図45	3 A トレンチ	III-1層上面	中世 I	遺構	平面・断面図	66
挿図46	4 A トレンチ	III-1層上面	中世 I	遺構	平面図	67
挿図47	5 A トレンチ	III-1層上面	中世 I	遺構	略図	67
挿図48	1 A トレンチ	II-2層中	中世 II-1	遺構	平面・断面図	68
挿図49	1 A トレンチ	II-2層上面	中世 II-2	遺構	平面・断面図	69
挿図50	2 A トレンチ	II-2層上面	II-1層中	中世 II・III-1	遺構 平面図	70
挿図51	3 A トレンチ	II-2層上面	中世 II	遺構	平面・断面図	71
挿図52	4 A トレンチ	II-2層上面	中世 II	遺構	平面図	73
挿図53	5 A トレンチ	II-2層上面	中世 II	遺構	平面図	73
挿図54	2 A トレンチ	II-1層上面	中世 III-2	遺構	平面図	74
挿図55	3 A トレンチ	II-1層上面	中世 III-2	遺構	平面図	74
挿図56	5 A トレンチ	II-1層中	中世 III-1	遺構	平面図	75
挿図57	5 A トレンチ	II-1層上面	中世 III-2	遺構	平面図	75

挿図58	5 Aトレンチ	I層中 近世 遺構 平面図	76
挿図59	1 Aトレンチ	土坑 溝 ピット出土 弥生土器 青磁 実測図	78
挿図60	1 Aトレンチ	土坑 溝 ピット出土 各層 弥生土器 実測図	79
挿図61	2 Aトレンチ	ピット出土 弥生土器 壺 実測図	81
挿図62	2 Aトレンチ	ピット出土 弥生土器 土師器 甕 実測図	82
挿図63	2 Aトレンチ	ピット出土 弥生土器 鉢 高杯 実測図	83
挿図64	2 Aトレンチ	ピット出土 弥生土器 実測図	84
挿図65	2 Aトレンチ	土坑 溝 ピット出土 弥生土器 土師器 黒色土器 実測図	85
挿図66	2 Aトレンチ	土坑1171出土 弥生土器 実測図(1)	88
挿図67	2 Aトレンチ	土坑1171出土 弥生土器 実測図(2)	89
挿図68	2 Aトレンチ	溝781、823、824、825出土 弥生土器 須恵器 実測図	90
挿図69	2 Aトレンチ	溝968出土 弥生土器 実測図	91
挿図70	2 Aトレンチ	土坑 溝 出土 弥生土器 実測図	92
挿図71	2 Aトレンチ	ピット出土 弥生土器 実測図	92
挿図72	2 Aトレンチ	溝 落込出土 弥生土器 実測図	93
挿図73	2 Aトレンチ	土坑出土 弥生土器 実測図	94
挿図74	1 Aトレンチ	IV層出土 弥生土器 実測図	95
挿図75	1 Aトレンチ	IV層出土 弥生土器 須恵器 瓦器 実測図	96
挿図76	1 Aトレンチ	IV層出土 弥生土器 実測図	96
挿図77	2 Aトレンチ	IV層 III-2層出土 弥生土器 実測図	97
挿図78	2 Aトレンチ	IV層出土 弥生土器 須恵器 実測図	98
挿図79	2 Aトレンチ	IV層出土 弥生土器 実測図	99
挿図80	3 Aトレンチ	IV層出土 弥生土器 実測図	100
挿図81	5 Aトレンチ	IV層出土 弥生土器 実測図	100
挿図82	1 Aトレンチ	III-2層出土 弥生土器 実測図	101
挿図83	1 Aトレンチ	III-2層出土 須恵器 土師器 黒色土器 瓦器 実測図	102
挿図84	1 Aトレンチ	III-2層出土 弥生土器 実測図	102
挿図85	2 Aトレンチ	IV層 III-2層出土 弥生土器 須恵器 土師器 実測図	103
挿図86	2 Aトレンチ	III-2層出土 弥生土器 実測図	104
挿図87	2 Aトレンチ	III-2層出土 弥生土器 須恵器 実測図	105
挿図88	3 A・4 A・5 Aトレンチ	III-2層出土 弥生土器 須恵器 土師器 黒色土器 実測図	106
挿図89	2 A・3 Aトレンチ	溝 IV層 III-2層出土 弥生土器 実測図	107
挿図90	2 Aトレンチ	IV III層出土 弥生土器 実測図	108
挿図91	1 A・2 A・3 A・4 Aトレンチ	IV層 III層 III-1層 III-1・2層 出土 弥生土器 須恵器 黒色土器 土師器 瓦器 実測図	110
挿図92	2 Aトレンチ	III-1層出土 弥生土器 実測図	110
挿図93	1 A・3 A・4 A・5 Aトレンチ	III層 II-2層出土 須恵器 土師器 瓦器	

	実測図	111
挿図94	1 A・3 A・4 Aトレンチ II-1層 I層出土 須恵器 土師器 瓦器 瓦質土器 青磁 実測図	111
挿図95	1 A・2 A・5 Aトレンチ出土 石庖丁 石庖丁未製品 実測図	113
挿図96	2 A・5 Aトレンチ出土 太型蛤刃石斧 実測図	115
挿図97	1 A・2 Aトレンチ出土 太型蛤刃石斧 柱状片刃石斧 柱状両刃石斧 扁平片刃 石斧 実測図	116
挿図98	1 A・2 A・3 Aトレンチ出土 敲石 砥石 実測図	117
挿図99	1 A・2 Aトレンチ出土 サヌカイト剥片 サヌカイト石核 石鏃 石鏃未製品 角錐形石器 磨製石剣 投弾 実測図	119
挿図100	1 A・2 A・3 A・4 Aトレンチ出土 鉄鎌 鉄釘 刀子状鉄製品 用途不明鉄製品 実測図	121
挿図101	1 A・2 A・3 Aトレンチ出土 用途不明土製品 土製紡錘車 土製紡錘車未製品 銅鐸形土製品 実測図	123
挿図102	2 A・3 Aトレンチ出土 板状木製品 しゃもじ状木製品 えぶり未製品 実測図	124
挿図103	1 Aトレンチ出土 下駄 実測図	125
挿図104	1 Bトレンチ V層上面 平面・断面図	127
挿図105	1 Bトレンチ II-2層・III-1層上面 平面・断面図	128
挿図106	1 Bトレンチ 出土 土器 実測図	129
挿図107	2 Bトレンチ V層上面 平面・断面図	130
挿図108	2 Bトレンチ II-2層・III-1層上面 平面・断面図	132
挿図109	2 Bトレンチ 出土 土器・石器実測図	133
挿図110	3 Bトレンチ V層上面 平面・断面図	134
挿図111	3 Bトレンチ II-2層・III-1層上面 平面・断面図	136
挿図112	3 Bトレンチ 出土 土器・木器・漆器実測図	137
挿図113	3 Bトレンチ 出土 砥石 実測図	138
挿図114	4 Bトレンチ V層上面 平面・断面図	139
挿図115	2 Aトレンチ 弥生II居住域内部を区画する溝	142

表 目 次

表 1	A地区 遺構一欄表	146～149
表 2	A地区 掘立柱建物一覧表	150・151
表 3	A地区 出土石器・金属器・土製品・木器一覧表	150・151
表 4	A地区 出土土器一覧表	152～167
表 5	B地区 出土土器一覧表	168・169
表 6	B地区 出土石器・木器一覧表	168・169
表 7	B地区 遺構一覧表	170

写真図版目次

図版1 A地区 遺構 壁面

- a 3 Aトレンチ 南側壁面 I～III層
- b 4 Aトレンチ 南側壁面 I～III層
- c 3 Aトレンチ 南側壁面 IV、V層
- d 2 Aトレンチ 東側壁面 IV、V層 黒色粘土層が見える

図版2 A地区 堆積層基本層序と弥生時代遺構

- a 2 Aトレンチ 南側壁面 IV、V層 遺構断面
- b 3 Aトレンチ 断ち割り断面 下層の黒色粘土層が見える
- c 1 Aトレンチ 西半部 柱穴群と溝1258(南東より)
- d 1 Aトレンチ 東半部 土坑や風倒木痕が見える。

図版3 A地区 弥生時代 遺構

- a 1 Aトレンチ 溝1258 全景(南より)
- b 1 Aトレンチ 溝1258 全景(西より)
- c 1 Aトレンチ ピット1291 ピット内の柱根遺存状況
- d 1 Aトレンチ ピット1293 ピット内の柱根遺存状況

図版4 A地区 弥生時代 遺構

- a 1 Aトレンチ 溝1258の内側に検出した土坑群(南より)
- b 1 Aトレンチ ピット1291断面
- c 1 Aトレンチ 溝1258断面
- d 1 Aトレンチ 土坑1259断面
- e 1 Aトレンチ 土坑1263断面

図版5 A地区 弥生時代 遺構

- a 2 Aトレンチ 弥生I 西半部(南より)
- b 2 Aトレンチ 弥生I 東半部(北より)

図版6 A地区 弥生時代 遺構

- a 2 Aトレンチ 弥生I 西半部(南より)
- b 2 Aトレンチ 弥生I 東半部(北より)
- c 2 Aトレンチ 弥生I 東半部(北より)
- d 2 Aトレンチ 弥生I 東半部(南より)

図版7 A地区 弥生時代 遺構

- a 2 Aトレンチ 東半部 弥生II 全景(北より)
- b 2 Aトレンチ 東半部 弥生II 全景(南より)

図版8 A地区 弥生時代 遺構

- a 2 Aトレンチ 弥生II 東半部(北より)
- b 2 Aトレンチ 弥生II 東半部(南より)
- c 2 Aトレンチ 弥生II 中央部(南より)
- d 2 Aトレンチ 弥生II 中央部(北より)

図版9 A地区 弥生時代 遺構

- a 2 Aトレンチ 弥生II 中央部(南より)
- b 2 Aトレンチ 弥生II 東半部(北より)

c 2 Aトレンチ 弥生II ピット447 断面

d 2 Aトレンチ 弥生I ピット747 断面

図版10 A地区 弥生時代 遺構

a 2 Aトレンチ 弥生II ピット380 断面

b 2 Aトレンチ 弥生II 土坑371 断面

c 2 Aトレンチ 弥生II 溝374 断面

d 2 Aトレンチ 弥生II 土坑372 断面

e 2 Aトレンチ 弥生I 土坑1077 断面

f 2 Aトレンチ 弥生II 土坑163 断面

図版11 A地区 弥生時代 遺構

a 2 Aトレンチ 弥生II ピット232 遺物出土状況

b 2 Aトレンチ 弥生II 土坑379 断面

c 2 Aトレンチ 弥生I 土坑968 断面

d 2 Aトレンチ 弥生I ピット1172 遺物出土状況

e 2 Aトレンチ 弥生I ピット1172 遺物出土状況

図版12 A地区 弥生時代 遺構

a 3 Aトレンチ 東半部 (南より)

b 3 Aトレンチ 溝935(東より)

c 3 Aトレンチ 溝944, 溝946(西より)

d 3 Aトレンチ 溝944, 溝946(東より)

図版13 A地区 弥生時代 遺構

a 2 Aトレンチ 弥生I ピット621 断面

b 3 Aトレンチ 溝944 西側断面全景(西より)

c 3 Aトレンチ 溝944 南壁部分(北より)

d 3 Aトレンチ 溝944 西側断面南半部(西より)

e 3 Aトレンチ 溝944 西側断面北半部(西より)

図版14 A地区 弥生時代 遺構

a 4 Aトレンチ 東半部(南より)

b 4 Aトレンチ 東半部(北より)

c 4 Aトレンチ 西半部(南より)

d 4 Aトレンチ 西半部(北より)

図版15 A地区 弥生時代 遺構

a 4 Aトレンチ 溝1653断面(西より)

b 4 Aトレンチ 風倒木痕1649(東より)

c 4 Aトレンチ 溝1652断面(西より) 矢板際に溝の堆積層が落ち込む。

d 5 Aトレンチ 全景(東より)

e 5 Aトレンチ 土坑56 断面(北より)

図版16 A地区 古代 遺構

a 3 Aトレンチ III-2層上面(北より)

- b 3 A トレンチ V層上面に残るIV・III-2層の混在状況
- c 1 A トレンチ III-1層中に検出した下駄
- d 5 A トレンチ III-2層とIV層の混在状況

図版17 A地区 中世 遺構

- a 1 A トレンチ 中世I 全景(南より)
- b 3 A トレンチ 中世II 畦42, 43
- c 3 A トレンチ 中世II 畦43 断面c c'
- d 3 A トレンチ 中世II 畦43 断面b b'
- e 3 A トレンチ 中世II 全景(クレーン撮影)

図版18 A地区 中世 遺構

- a 2 A トレンチ 中世I 全景 畦74が見えている(クレーン撮影)
- b 2 A トレンチ 中世I 全景(南より)
- c 2 A トレンチ 中世I 畦74
- d 2 A トレンチ 中世I 畦74 断面

図版19 A地区 中世 遺構

- a 3 A トレンチ 中世I 全景(クレーン撮影)
- b 3 A トレンチ 中世I 畦71, 72, 73と足跡(南東より)
- c 2 A トレンチ 中世I 水田面に残る鋤使用痕
- d 3 A トレンチ 中世I 畦71, 72と足跡(南より)

図版20 A地区 中世 遺構

- a 4 A トレンチ 中世I 全景(クレーン撮影)
- b 4 A トレンチ 中世I (東より)
- c 4 A トレンチ 中世I (西より)
- d 5 A トレンチ 中世II (東より)

図版21 A地区 中世 遺構

- a 1 A トレンチ 中世II-1 全景(クレーン撮影)
- b 1 A トレンチ 中世II-1 (西側の溝群)
- c 1 A トレンチ 中世II-1 (東側の溝群)

図版22 A地区 中世 遺構

- a 1 A トレンチ 中世II-2 全景(クレーン撮影)
- b 2 A トレンチ 中世II-2、中世III-1 全景(クレーン撮影)
- c 1 A トレンチ 中世II-2 溝群

図版23 A地区 中世 遺構

- a 2 A トレンチ 中世II-2 溝47と人や牛の足跡群
- b 2 A トレンチ 人と牛の足跡
- c 2 A トレンチ 人と牛の足跡
- d 2 A トレンチ 中世II-2 畦49(東半部)

図版24 A地区 中世 遺構

- a 4 A トレンチ 中世II 全景(クレーン撮影)
- b 4 A トレンチ 中世II 東半部(南より)
- c 2 A トレンチ 水田面に見られる牛の足跡

- d 5 A トレンチ 中世III-1 溝群(東より)

図版25 A地区 中世 遺構

- a 3 A トレンチ 中世III-2 溝と畦(北西より)
- b 3 A トレンチ 中世III-2 溝35, 37
- c 5 A トレンチ 中世III-2 全景(東より)
- d 2 A トレンチ 人の足跡

図版26 A地区 中世・近世 遺構

- a 2 A トレンチ 中世III-2 足跡群と畦の痕跡 西半部(南より)
- b 2 A トレンチ 中世III-2 足跡群 東半部(北より)
- c 3 A トレンチ 近世 全景(南より)
- d 5 A トレンチ 近世 全景 畦(東より)

図版27 A地区 弥生時代・古墳時代・中世 遺物

- a 2 A トレンチ 弥生土器 高杯
- b 2 A トレンチ 古墳時代 甕
- c 2 A トレンチ 弥生土器 ミニチュア甕
- d 2 A トレンチ 弥生土器 高杯
- e 2 A トレンチ 弥生土器 ミニチュア甕
- f 1 A トレンチ 土師器 小皿
- g 2 A トレンチ 弥生土器 ミニチュア鉢
- h 1 A トレンチ 瓦器 椀
- i 2 A トレンチ 弥生土器 壺
- j 2 A トレンチ 弥生土器 甕

図版28 A地区 弥生時代 遺物

- a 2 A トレンチ 弥生土器 壺
- b 2 A トレンチ 弥生土器 鉢
- c 2 A トレンチ 弥生土器 鉢
- d 2 A トレンチ 弥生土器 壺
- e 2 A トレンチ 土坑1171出土 弥生土器 壺・甕・鉢・高杯

図版29 A地区 弥生時代 遺物

- a 2 A トレンチ 土坑1171出土 弥生土器 甕・器台・脚部
- b 1 A・2 A トレンチ 土坑 ピット出土 壺・甕

図版30 A地区 弥生時代・古代 遺物

- a 1 A・2 A トレンチ 土坑 溝出土 弥生土器 壺・甕・鉢・高杯
- b 2 A トレンチ 土坑 溝出土 弥生土器 壺・甕・近江甕・鉢・高杯・須恵器坏

図版31 A地区 弥生時代 遺物

- a 1 A・2 A トレンチ 溝 土坑出土 弥生土器 壺・甕・鉢・高杯

- b 2 A トレンチ ピット 土坑出土 弥生土器 壺口縁部外面

図版32 A地区 弥生時代 遺物

- a 2 A トレンチ ピット 土坑出土 弥生土器 壺口縁部内面

b 2 A トレンチ ピット出土 弥生土器 壺・鉢・高杯

図版33 A地区 弥生時代 遺物

a 1 A・2 A トレンチ ピット 溝出土 弥生土器 甕・高杯・蓋

b 1 A・2 A トレンチ ピット 溝出土 弥生土器 壺・鉢・高杯

図版34 A地区 弥生時代・古代 遺物

a 1 A・2 A トレンチ 溝 IV層 III-2 III-1,2層出土 弥生土器 壺・甕 土師器 甕

b 1 A・2 A トレンチ IV層 III-2層 III-1,2層出土 弥生土器 高杯・器台脚部

図版35 A地区 弥生時代・古代・中世 遺物

a 1 A・2 A・3 A・5 A トレンチ IV III-2層出土 弥生土器 壺・近江甕・鉢・高杯・台形土器

b 1 A トレンチ III-2層 III-1層出土 須恵器 杯蓋、黒色土器碗、瓦器碗、土師器碗、皿

図版36 A地区 弥生時代・中世 遺物

a 1 A トレンチ II-2層 II-1層出土 須恵器 こね鉢 土師器 小皿

b 2 A トレンチ 土坑・ピット出土 弥生土器 波状文 直線文

図版37 A地区 弥生時代 遺物

a 2 A・3 A トレンチ IV層 III-2層 III-1層出土 弥生土器 波状文

b 1 A・2 A・3 A トレンチ IV層 III-2層 III-1層出土 弥生土器 波状文

図版38 A地区 弥生時代 遺物

a 2 A トレンチ ピット 土坑出土 弥生土器 斜格子文

b 2 A・3 A トレンチ 溝 III-2層 III-1層出土 弥生土器 斜格子文

図版39 A地区 弥生時代 遺物

a 2 A トレンチ IV層出土 弥生土器 斜格子文

b 1 A・2 A・3 A トレンチ IV層 III-2層 III、II層出土 弥生土器 扇状文

図版40 A地区 弥生時代 遺物

a 1 A・2 A トレンチ IV層、III-2層出土 弥生土器 圧痕文突起等

b 1 A・2 A トレンチ 土坑出土 弥生土器 簾状文

図版41 A地区 弥生時代 遺物

a 1 A・2 A トレンチ IV層 III-2層出土 弥生土器 簾状文 円形浮文

b 2 A トレンチ ピット748出土 弥生土器 流水文

図版42 A地区 弥生時代 遺物

a 1 A・2 A トレンチ出土 弥生土器 水差し形土器把手・ミニチュア土器・坏形土器・脚台・不明土製品・土製紡錘車・土製紡錘車未製品

b 1 A・2 A・5 A トレンチ出土 扁平片刃石斧・柱状両刃石斧・柱状片刃石斧・太型蛤刃石斧

図版43 A地区 弥生時代 遺物

a 1 A・2 A・5 A トレンチ出土 石庖丁・石庖丁未製品

b 1 A・2 A トレンチ出土 磨製石剣・石鏃・石鏃未製品・角錐形石器・サヌカイト剝片・サヌカイト石核

図版44 A地区 弥生時代 遺物

a 1 A・2 A・3 A トレンチ出土 砥石・投弾・敲石

b 2 A トレンチ出土 紅簾片岩石材

図版45 A地区 中世 遺物

a 1 A トレンチ 溝1178 II-1層出土 青磁碗、土師器皿、瓦器碗

b 1 A トレンチ III-1層出土 下駄

図版46 A地区 弥生時代・中世 遺物 木製品

a 3 A トレンチ III-2層出土 板状木製品

b 2 A トレンチ 土坑1171出土 えぶり未製品

c 2 A トレンチ 土坑1171出土 しゃもじ状木製品

図版47 A地区 中世 遺物 金属

a 1 A・4 A トレンチ III-2層 II-2層出土 鉄鎌

b 1 A・2 A・3 A トレンチ IV層 III-2層 I層出土 刀子状鉄製品・用途不明鉄製品・鉄釘

図版48 B地区 堆積基本層序

a 1 B トレンチ 東側壁面 II～IV層

b 2 B トレンチ 西側壁面 II～IV層

c 3 B トレンチ 西側壁面 II～IV層

d 4 B トレンチ 西側壁面 II～IV層

図版49 B地区 弥生時代 遺構

a 1 B トレンチ V層上面 全景（西より）

b 1 B トレンチ V層上面 溝2064 断面（南より）

c 1 B トレンチ V層上面 風倒木痕2055 断面（東より）

d 2 B トレンチ V層上面 全景（北より）

図版50 B地区 弥生時代 遺構

a 2 B トレンチ V層上面 溝2040（南東より）

b 2 B トレンチ V層上面 溝2040 断面（北西より）

c 2 B トレンチ V層上面 溝2041（北より）

d 2 B トレンチ V層上面 開析谷の断ち割り断面（西より）

図版51 B地区 弥生時代 遺構

a 3 B トレンチ V層上面 巨大な立木の根（北より）

b 3 B トレンチ V層上面 立木の根の拡大（南より）

- c 3 Bトレンチ V層上面 開析谷の断ち割り断面（西より）
- d 4 Bトレンチ V層上面 全景（北より）

図版52 B地区 弥生時代 遺構

- a 4 Bトレンチ V層上面 西側壁面の風倒木痕2068（東より）
- b 4 Bトレンチ V層上面 西側壁面の風倒木痕2069（東より）
- c 4 Bトレンチ IV層上面に残る偶蹄目類の蹄跡（南より）
- d 4 Bトレンチ IV層上面に残る偶蹄目類の蹄跡（西より）

図版53 B地区 弥生時代 遺構

- a 1 Bトレンチ IV層上面 全景（南より）
- b 2 Bトレンチ IV層上面 全景（北より）
- c 3 Bトレンチ IV層上面 全景（北より）
- d 4 Bトレンチ IV-3層上面 全景（北西より）

図版54 B地区 弥生時代・古代 遺構

- a 4 Bトレンチ IV-2層上面 全景（北より）
- b 4 Bトレンチ IV-2層上面 斑模様拡大
- c 4 Bトレンチ IV-1層上面 全景（北より）
- d 4 Bトレンチ III-2層上面 全景（北より）

図版55 B地区 古代 遺構

- a 1 Bトレンチ 東側壁面 IV層とIII-2層が入り乱れた状況（西より）
- b 4 Bトレンチ 西側壁面 IV層とIII-2層が入り乱れた状況（東より）
- c 1 Bトレンチ 風倒木痕頂部に残る墨流しのような状況
- d 1 Bトレンチ 風倒木痕頂部に残る墨流しのような状況
- e 1 Bトレンチ 風倒木痕頂部に残る墨流しのような状況

図版56 B地区 古代 遺構

- a 1 Bトレンチ III-2層上面 全景（南より）
- b 2 Bトレンチ III-2層上面 全景（北より）
- c 3 Bトレンチ III-2層上面 全景（北より）
- d 3 Bトレンチ III-2層上面 拡大（東より）

図版57 B地区 中世 遺構

- a 1 Bトレンチ III-1層上面 全景（南より）
- b 1 Bトレンチ III-1層上面 溝2049～2052（西より）
- c 1 Bトレンチ III-1層上面 畦畔2053断面（北より）
- d 2 Bトレンチ III-1層上面 全景（北より）

図版58 B地区 中世 遺構

- a 2 Bトレンチ III-1層上面 溝2034（北より）
- b 2 Bトレンチ III-1層上面 畦畔2035（西より）
- c 3 Bトレンチ III-1層上面 畦畔2016（西より）
- d 3 Bトレンチ III-1層上面の段差（北より）

図版59 B地区 中世 遺構

- a 3 Bトレンチ III-1層上面 全景（北より）

- b 3 Bトレンチ III-1層上面 人と偶蹄目類の足跡
- c 3 Bトレンチ III-1層上面 人の足跡
- d 4 Bトレンチ III-1層上面 全景（北より）

図版60 B地区 中世 遺構

- a 1 Bトレンチ II-2層上面 全景（南より）
- b 2 Bトレンチ II-2層上面 全景（北より）
- c 2 Bトレンチ II-2層上面 溝2023 断面（東より）
- d 2 Bトレンチ II-2層上面 溝2024 断面（東より）
- e 2 Bトレンチ II-2層上面 溝2026 断面（東より）

図版61 B地区 中世 遺構

- a 3 Bトレンチ II-2層上面 全景（北より）
- b 3 Bトレンチ II-2層上面 人と偶蹄目類の足跡
- c 3 Bトレンチ II-2層上面 畦畔2001 断面（西より）
- d 3 Bトレンチ II-2層上面 畦畔2008 断面（西より）
- e 3 Bトレンチ II-2層上面 鋤溝（北より）

図版62 B地区 遺物

- a 3 Bトレンチ IV層出土 縄文土器
- b 1 Bトレンチ IV層出土 弥生土器
- c 1 Bトレンチ III・IV層出土 弥生土器

図版63 B地区 遺物

- a 2 B・3 Bトレンチ III層出土 土器
- b 3 Bトレンチ II層出土 白磁碗
- c 2 B・3 Bトレンチ II層・III層出土 砥石

図版64 B地区 遺物

- a 3 Bトレンチ III層出土 曲物底板（表面）
- b 3 Bトレンチ III層出土 曲物底板（裏面）
- c 3 Bトレンチ III層出土 円板
- d 3 Bトレンチ II層出土 漆器碗（表面）
- e 3 Bトレンチ II層出土 漆器碗（裏面）

第1章 調査に至る経過

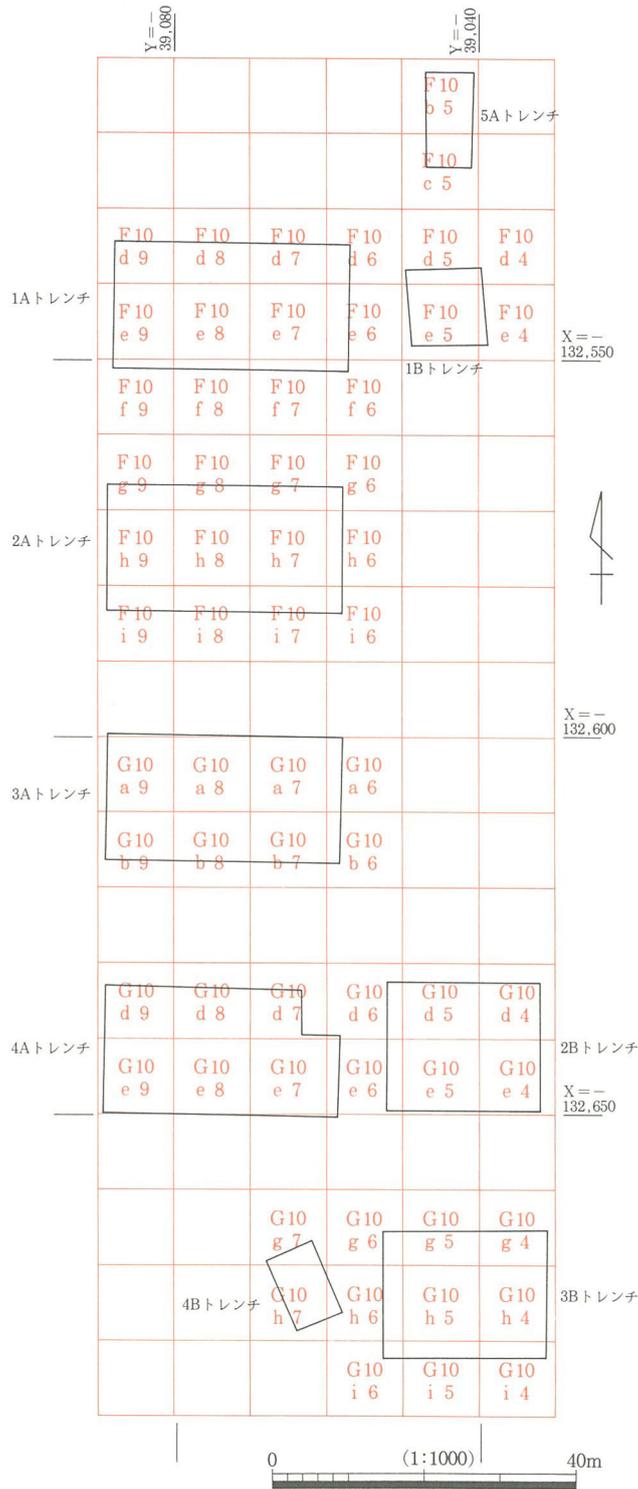
茨木市東奈良1丁目、2丁目、玉櫛1丁目、2丁目周辺には大阪府営住宅が数多く建てられている。近年各区画ごとに木造建物から鉄筋コンクリート建物へ建て替え工事が進められてきた。東奈良小学校以北の府営茨木東奈良住宅の建て替え部分の調査は、これまで1994年度に1棟の範囲で行った。そして1995年度には2棟の範囲を調査した。1996年度は今回の報告書の中のA地区で建物4棟と北側の防火水槽の範囲の調査を行った。1997年度は今回の報告書のB地区にあたり建物2棟と受水槽と防火水槽の範囲の調査を行った。挿図2は府営茨木東奈良住宅内の埋蔵文化財調査を実施した箇所をスクリーンで示し、調査年度は挿図右側に記している。今回報告するのは府営茨木東奈良住宅に伴う建て替えの最後の2カ年の調査範囲である。

第2章 調査の方法と既往の調査

第1節 調査の方法

調査に使用した地区割りは旧センターの遺跡調査基本マニュアルに則っている。これに従って今回のA、B調査区が100m四方の広さを持つ第3区画のG10、F10地区に入り、10m四方の第4区画は挿図1のように割り振られる。さらにトレンチや遺構の位置表示は第VI座標系を使用して、遺構図の外周に表示している。また標高は東京湾平均海面を使用して、挿図内に本来T.P. プラスマイナスを付けて表示するところを省略して掲載している。方位は座標北を使用して真北から $0^{\circ} 15' 39''$ 東へ振り、磁北から $6^{\circ} 30'$ 西に振っている。調査は調査区の四周を鋼矢板で取り囲む作業から着手した。次にこの中を地表面から約1.7m付近までバックホーを使用した機械掘削で順次掘り下げて除去した。除去した堆積層の上層は府営住宅建設時の整地層であり下層は近世に堆積したと思われる洪水堆積層である。機械掘削終了面は後に述べる基本層序のII層付近に相当している。従って調査は中世遺構面から開始した。機械掘削面以下約1.2mの深さまで調査を行いつつベルトコンベアを使用して人力掘削で掘り下げた。機械掘削終了後に矢板際に深さ50～60cmの側溝を掘り下げた。この側溝の断面を観察して土層の変化に注意しつつ、1層除去するごとに下層の遺構面を面的に精査して遺構の有無を確認しながら順次掘り下げた。矢板が四周を取り囲んでいるので、すべての堆積層を除去すると、堆積土層が分からなくなるため矢板の一方か二方に土層観察用の土の壁を残した。この土壁を精査し写真、壁面図を作製して、層序と遺構面の関係を理解した。地表面からの壁面図はA地区の2A、3AトレンチとB地区の各トレンチで作製した。また1996年度後半期に調査した1A、4Aトレンチでは人力掘削部分の壁面図を作製した。

調査した各トレンチの位置はA地区は北から順に5Aトレンチから1Aトレンチ、2Aトレンチ、3Aトレンチ、4Aトレンチがほぼ南北方向に並ぶ。B地区は1Bトレンチが1Aトレンチの東側に、2Bトレンチは4Aトレンチの東側に3Bトレンチは4Aトレンチの南東側に位置している。4Bトレンチは斜めを向いて4Aトレンチの南側に位置している。



挿図 1 調査区と地区割り

は約500m²である。5 A トレンチは小さくて南北約13m、東西約7 mを測る。調査面積は約90m²である。A地区の調査面積は約2100m²である。B地区は1 B トレンチが南北約10m、東西約10mを測り、調査面積は約100m²である。

2 B トレンチの大きさは南北約17m、東西約19mを測る。調査面積は約330m²である。3 B トレンチの大きさは南北約17m、東西約21mを測る。調査面積は約350m²である。4 B トレンチは斜め方向であるが、長辺が約10m、短辺は約7 mを測る。調査面積は約70m²を測る。B地区の調査面積は約850m²である。

遺構番号の与え方は発掘調査した順に1から通しで個々の遺構に番号を与えている。その番号の前に遺構の種類を示す文字を組合わせている。たとえば掘立柱建物やピット、土坑、溝、畦、水田などである。

第2節 東奈良遺跡の既往の調査（挿図2，巻頭カラー2）

東奈良遺跡の調査は古くは1970年代に始まっている。そもそもこの遺跡の発見のきっかけは今回の調査地西側200m付近を南北に流れている防領川の改修工事で掘削された土砂の中から、中学生が銅鏃を発見したことである。これを契機として大阪府教育委員会文化財保護課が調査を幾たびか実施してきた。その後阪急南茨木駅周辺の再開発事業の一環として高層マンション建設計画が持ち上がった。このため東奈良遺跡調査会が設立されて、マンション建設予定地の大規模な調査を行う事となった。これとは別に阪急南茨木駅の東側500m付近に位置する民間マンション建設予定地で、埋蔵文化財を調査中に銅鐸の鋳型が発見された。この発見によって東奈良遺跡は一躍有名となった。その後茨木市教育委員会が道路建設や学校建設、マンション建設、鉄道建設に伴って幾つかの地点で調査を行い数多くの調査成果が明らかにされてきた。阪急南茨木駅の北東側では、環濠で取り囲まれた弥生時代前期の建物群が検出され、また南茨木駅の周辺から土壙墓群や大溝などが検出されて、駅周辺が東奈良遺跡の最も中心的な部分と推測されている。また中心地域から離れたところに方形周溝墓群が幾つか分散して営まれていた事も明らかになっている。また遺跡の範囲の東側には低湿地が広がっていた事も確認されて、ここに水田が営まれていたと推測されている。今回の調査地点は遺跡分布地図（挿図4）の東奈良遺跡の範囲の北東の端に近い位置で、黒丸印で示している。この付近ではこれまでに挿図2に示したように、1993年度に財団法人大阪府埋蔵文化財協会が府営住宅1棟分を調査した地点で、弥生時代の掘立柱建物や土坑が検出されているし、1994年度には同協会が府営住宅2棟分を調査した箇所、主体部に木棺を埋葬していた方形周溝墓などが調査された。周溝内から多数の土器片が出土したが、墳丘の盛り土は全く残存していなかった。また方形周溝墓のすぐ北側に掘立柱建物群からなる集落が営まれていた事が明らかになった。すなわち集落と墓域が近接して存在していた事が明らかにされた。1995年度に広域下水道工事のシールド工法の立坑部分の調査を大阪府教育委員会が実施している。ここでも方形周溝墓の一部分や掘立柱建物が検出されている。また少し遡るが1989年度に大阪府教育委員会が今回の調査地点の南側約200m付近で、東奈良小学校の東側を調査している。この調査では方形周溝墓が24基検出されて、弥生時代前期Ⅰ様式から後期Ⅴ様式までの長期間方形周溝墓が作られ続けていた事が明らかになっている。この調査地点の東側の試掘調査では遺構が確認されていない事から、24基の方形周溝墓群が東奈良遺跡の東端に位置していることが確認されている。今回の調査地点の近くで実施された調査成果を総合すると、どの調査地点においても下層から黒色の包含層が認められ、その下に弥生時代の遺構面が確認されている。上層には中世の条里制水田が検出され、近世には砂層を中心とした堆積層を示している。各調査地点とも非常に似た堆積層序を示す事が明らかになっている。

茨木市教育委員会は近年遺跡内の各地点で調査を幾つか実施しており、その調査においても同様なことが明らかにされている。しかし東奈良遺跡は東西約800m、南北約1500mの広大な遺跡と考えられており、東奈良遺跡の全体の様相をつかむまでに至っていないのが現状である。



挿図2 東奈良遺跡の既往の調査区位置図

第3章 位置と環境

第1節 歴史的環境（巻頭カラー1，挿図1，4）

東奈良遺跡は千里丘陵や北摂山系から流れ出た幾つかの河川に挟まれている。当遺跡の東側に最近まで旧茨木川が流れていた。この川は現在はさくら通りとして両側に緑地帯を持った道路となっている。この川の上流は北摂山系の余野、佐保や鉢伏山から流出して、平野部に出て中河原付近で勝尾寺川と合流して南に流れ、東奈良遺跡の東側を流れて中世以降に沖積平野を形成している。茨木川の東側には北摂山系の京都府亀岡市に源流を持つ安威川が茨木川と平行しながら南に流れて広大な沖積平野を形成している。当遺跡の西には大正川が千里丘陵から東に流れ出て当遺跡西端で流れを南に変えている。

現在の東奈良遺跡の東側部分は茨木川が形成した沖積層の下に深く埋没してしまっているが、弥生時代にさかのぼれば、東奈良遺跡周辺の状況は全く異なっていて、当遺跡周辺には沖積層が全く堆積していない状況が窺える。東奈良遺跡周辺では千里丘陵から続く洪積層が南に向かって緩やかに低くなる地形を見せて、この中に幾つか高まりが存在していた。東奈良遺跡が立地

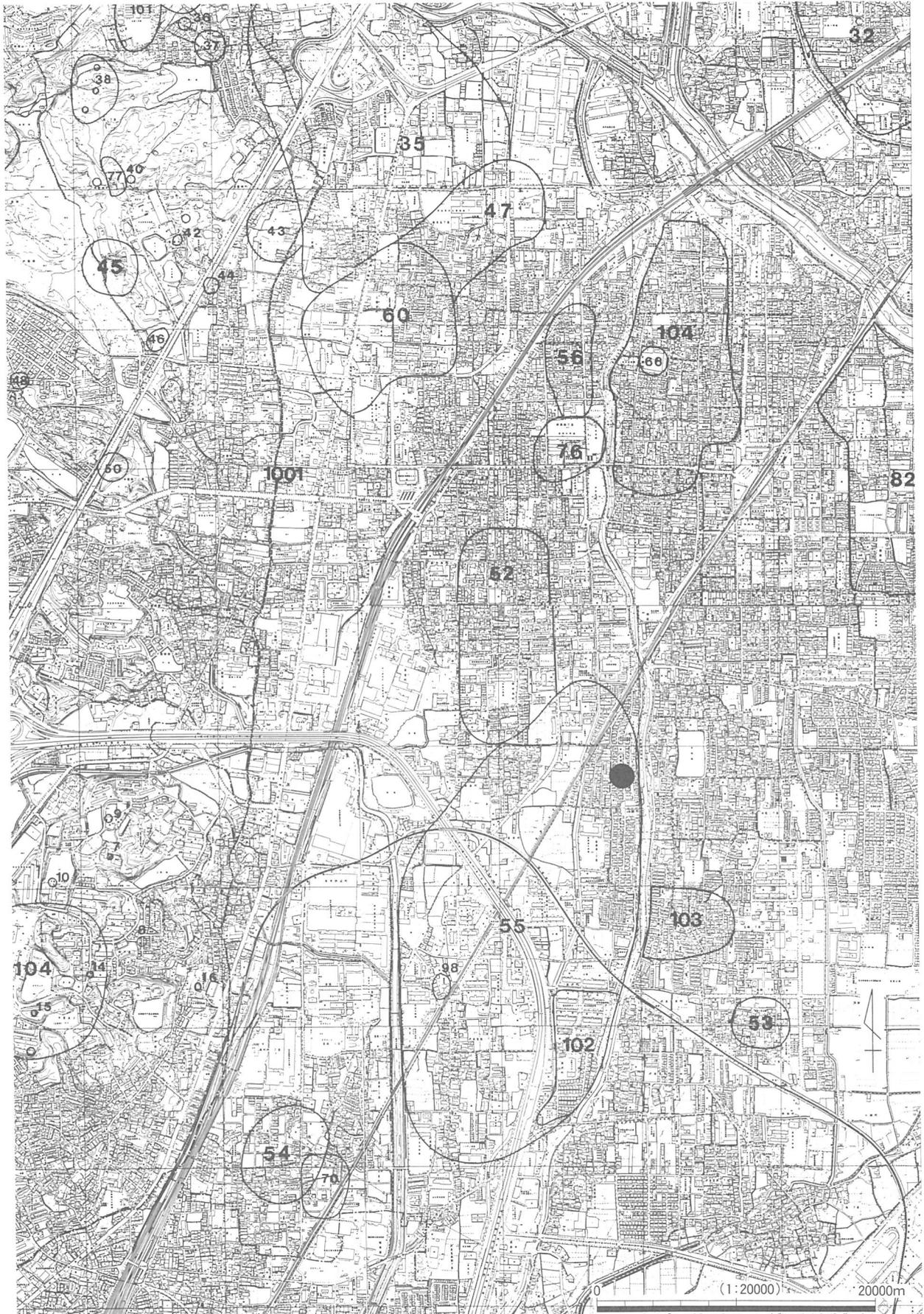


挿図3 東奈良遺跡の位置

しているのはこのような高まりの一つである。弥生時代の元茨木川や元大正川は東奈良遺跡の立地する高まりを避けつつ低湿地に流れ込んでいたようである。すなわち弥生時代の東奈良遺跡は中小河川に挟まれ、低湿地に面した遺跡であったようである。そして東奈良の中心的居住域を取り囲むようにして、周辺の洪積層上の高まりに小さな居住域が幾つか存在していたようである。今回調査した居住域もそのうちの一つである。これらの小さな居住域群と東奈良の中心的居住域は有機的関係を結び、一方ではこれらの小さな居住域相互でも有機的関係を取り結んで、これらの複合関係を基礎にして東奈良遺跡は成立していたようである。

次に東奈良遺跡の周辺遺跡の出現時期は次の通りである。

弥生時代前期には耳原遺跡、東奈良遺跡、牟礼遺跡、目垣遺跡、郡遺跡、倍賀遺跡、新庄遺跡、高槻市柱本遺跡、安満遺跡などの遺跡が認められて、この地域には前期に存在している遺跡数が多い。中期に入ると新たに太田遺跡、中条遺跡、春日遺跡、宿之庄遺跡、高槻市郡家川西遺跡、天神山遺跡、古曽部芝谷遺跡などが出現する。この頃には平野部だけでなく丘陵上にも遺跡が出現している。後期にはさらに遺跡数が増加している。中条小学校遺跡、駅前遺跡、上中条遺跡、郡児童公園遺跡、上穂積遺跡、総持寺遺跡、安威遺跡などが新しく出現する。自然地形と河川の関係で見ると各流域にある微高地上にそれぞれの地域の中心的集落が出現して営まれていたようである。大正川と茨木川に挟まれた範囲に東



挿図4 周辺の歴史的環境

奈良遺跡と上流に郡遺跡がある。安威川と茨木川の間には耳原遺跡がある。安威川の東岸には総持寺遺跡、太田遺跡がある。東部摂津地域では拠点集落である東奈良遺跡と安満遺跡があり、その周囲には幾つかのいま述べた中小の遺跡が各時期に出現している。これらの遺跡は技術力や生産力などの違いから格差が生じていたようだ。そして両遺跡は文化的政治的技術的など様々な分野においてこの地域の弥生時代文化を推進する役割を担っていたようである。そして両遺跡は相互に密接な関係を持ちつつ、河内、山城、西部摂津地域の有力な遺跡と緊密な交流網を形成していた。周辺諸地域のこれらの有力な遺跡は相互に平和的な、時として戦闘はあったとしても基調は平和な、そして密接な交流が盛んにあって、躍動する弥生文化を華開かせる基礎となっていた。東奈良遺跡と安満遺跡は全国の数ある有力な集落の中でも特に抜きん出た地位を築いて、弥生文化の伝播の震源地としての機能を担っていたようである。

挿図4の遺跡名称一覧（*印は消滅した遺跡を示す）

吹田市

- | | | | |
|----------------|------------|------------|-----------|
| 7 松下電気保健センター古墳 | 8 新芦屋古墳* | 9 青葉丘遺跡* | 14 須恵器散布地 |
| 15 古墳推定地 | 16 新芦屋瓦窯跡* | 18 陶棺片出土地* | 104 新芦屋遺跡 |

茨木市

- | | | | |
|-----------|-----------|-------------|------------|
| 32 総持寺遺跡 | 35 郡遺跡 | 36 郡神社古墳 | 37 郡児童公園遺跡 |
| 38 郡山古墳群 | 40 上穂積山古墳 | 42 上穂積神社西古墳 | 43 穂積廃寺跡 |
| 44 見付山古墳* | 45 弁天山遺跡 | 46 見付山遺跡 | 47 倍賀遺跡 |
| 48 松沢池北遺跡 | 50 上寺山遺跡 | 52 中条小学校遺跡 | 53 西方浄土寺跡 |
| 54 常楽寺跡 | 55 東奈良遺跡 | 56 上中条遺跡 | 60 春日遺跡 |
| 66 茨木城跡 | 70 三宅城跡 | 76 駅前遺跡 | 77 上穂積山遺跡 |
| 82 牟礼遺跡 | 98 蓮花寺 | 101 郡山城跡 | 102 沢良宜城跡 |
| 103 玉櫛遺跡 | 104 茨木遺跡 | 1001 三島街道 | |

●印は今回報告する東奈良遺跡の調査地点である。

第4章 調査の成果

第1節 基本層序（挿図5，図版1－a b c d、2－a b、48－a b c d）

東奈良遺跡は堆積層を大きく分層するとV層、IV層、III層、II層、I層の5つに分かれる。さらにこの各層は小さく幾つかに分層できる。III-1層、III-2層、II-1層、II-2層等である。そして実際の断面図ではIII-1層やII-2層をさらに幾つか細かく分層している。

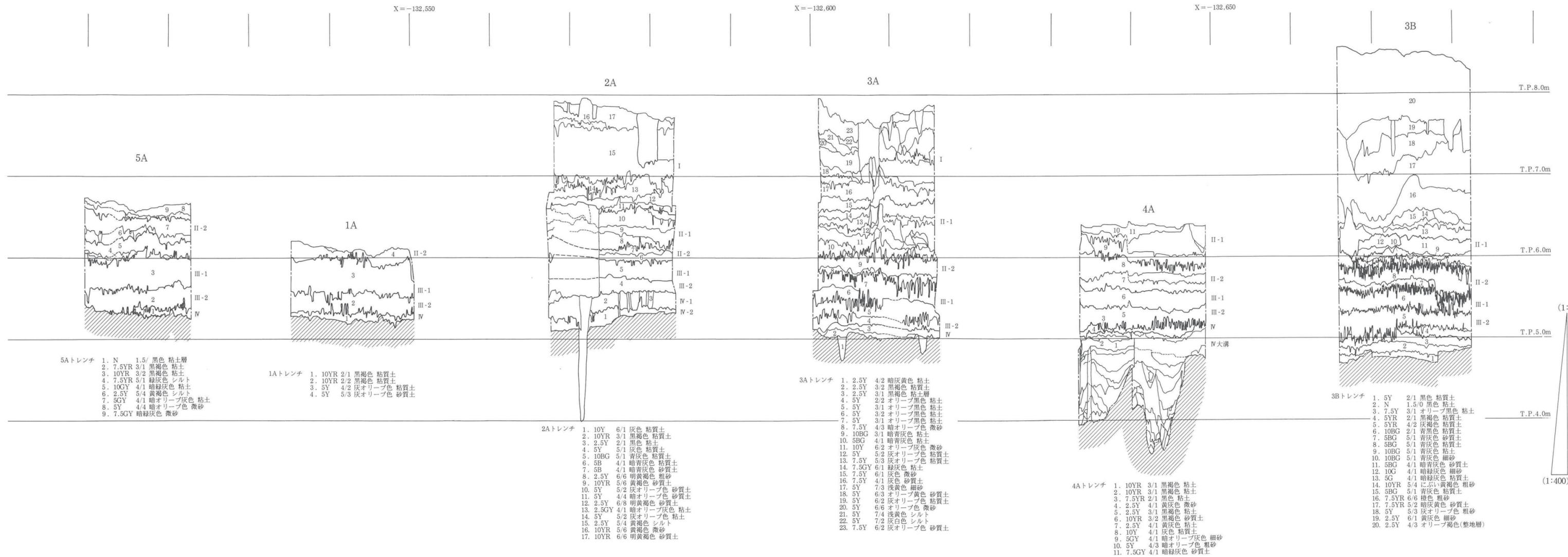
各層のおおよその厚さと土質などの詳細な説明は以下の通りである。

1 V層（挿図5 図版1－c d、2－a）

この層は白青色砂質土層、灰白色粘質土層などを示す。場所によって微妙に土質が違っている。白青色砂質土層は洪積層で下位段丘層か中位段丘層と思われる。その上に灰白色粘質土が堆積している。灰白色粘質土層は厚さ30～40cmである。V層上面は弥生I遺構面である。V層の灰白色粘質土層上部には黄灰色を示した火山灰の2次堆積と思われるブロックが数多く見られる（付章参照）。V層は基本的に土器は含まないが旧石器を含んでいる可能性が考えられた。この点をふまえた調査は弥生時代遺構面の下層で行ったが遺構遺物とも検出できず旧石器時代について明らかにする事ができなかった。

2 IV層（挿図5、図版1－c d、2－a、48－a b c d）

この層は黒色粘土層、黒色粘質土層で、弥生時代頃に形成された堆積層である。1Aトレンチ、2Aトレンチでは集落の上層に堆積した包含層を示している。このIV層上面に弥生II遺構面がある。一方B地区にあるIV層は湿地状堆積層で、形成過程が違っている。弥生時代集落が営まれた2Aトレンチは弥生I遺構面の上面にIV層の包含層が発達して厚い箇所でも20cm堆積しているが同じ2Aトレンチでも東側は厚く、西側は薄くIV層が見られない。弥生時代の遺構は2Aトレンチ全体に広がっている。集落域を覆うように包含層が厚く全体的に堆積していない。すなわち集落域の中も厚く包含層を堆積する箇所と全く堆積しない箇所がある。また他トレンチの1AトレンチIV層は黒色粘質土を示して厚さも薄い。また3Aトレンチ、4AトレンチはIV層が堆積しないか5cm未満を測る。従ってIII-2層を除去するとIV層が無い箇所もあってV層が部分的に直接見えている。土器の出土量とIV層の厚さは比較的相関している。このことからIV層は基本的に削られる事なく残っていると考えている。しかし2Aトレンチ西側に包含層が堆積していない箇所の存在に付いては説明ができない。この箇所は後世に削り取り作業があった可能性も考えている。この他にはIV層が見られない範囲でV層上面にIV層を鋤取った痕跡は3Aトレンチ以外には認められなかった。IV層上面の遺物検出状況から判断すると、IV層上面は弥生時代以降平安時代頃まで基本的に地表面であった可能性がある。このIV層上面から出土した遺物と踏み込まれてIV層中に入ったかと思われる遺物は平安時代頃まで断続的な時期を示している。一方2Bトレンチ、3Bトレンチ、4BトレンチではIV層が3層に分層できた。堆積状況が良く分かる4Bトレンチでは上層から黒色粘土層、灰白色粘土層、そして最下層に黒褐色粘土層が堆積している。これらはA地区のIV層と土質が違って、湿地に堆積した層である。このB地区のIV層中から出土した遺物は縄文時代晩期船橋式の深鉢形土器、弥生時代中期の壺の底部らしい遺物である。B地区のIV層もおおよそ弥生時代に堆積したと考えている。



挿図5 基本層序断面図

3 III層 (挿図5, 図版1-a b, 48-a b c d)

この層は茶灰色粘土層、灰茶色粘土層の湿地状堆積層である。この層はIII-2層とIII-1層に分けられる。IV層堆積以後に調査地周辺の茨木川の流路変更に伴う後背湿地化などがあったようだ。この2つの層は調査地周辺が水没した環境下の堆積層と考えられる。すなわちIV層の置かれていた乾いた環境から大きな環境の変動あった事が考えられる。そして河川によって運ばれてきた非常に細かな堆積層がIII層である。III層の堆積は非常に緩やかな状況で、葦などの水生植物が繁茂する水辺の環境であった事を推測させる。繁茂していた植物遺体を含む有機物層によって堆積層の色調が茶色がかっている。この茶色の色調の違い、すなわち有機物の含有量の違いによってIII-2層とIII-1層が分けられる。III-1層は茶色がIII-2層より薄くなっている。河川の堆積速度が増したか、水位が上昇して水生植物の生育しにくい環境になったかなどの若干の環境の変化があったことを物語っている。下層のIII-2層の茶灰色粘土層は有機物を多く含んでいる。層厚は10~40cmを測る。上層のIII-1層の灰茶色粘土層は有機物含有量が少ない。層厚は60~40cmを測る。堆積層中から黒色土器等が出土している。平安時代頃に堆積したと考えられる。III-1層上面は中世Iの水田面として使用されている。(註1)

4 II層 (挿図5, 図版1-a b, 48-a b c d)

II層は灰緑色粘質土層、緑灰色粘質土層などである。間層に灰白色砂層、灰緑色シルト層等の流水堆積層が見られる。このII層もII-2層とII-1層に分かれる。II-2層上面が中世IIの水田面である。両層の色調はほとんど変わらず、砂層が2つの層の間に堆積しているので分離できた。II層の厚さは70~50cmを測る。II-1層上面も中世III-2の水田面として使用されていた。これらの層の間にも部分的に砂が覆った水田面を検出している。水田面は砂層ではっきりと分離できて、調査区全域に広がった砂層を被われた水田面を中心に調査した。従って砂層を被らずシルト層や粘土層を被った水田面は分離が難しいので調査時に判別できた範囲のみ調査を行った。これらは随時狭い範囲で確認できた。中世II-2や中世II-1と名付けた水田面の調査はこのような調査である。調査を行ったすべての水田面は牛や人の足跡が非常に多く認められて凸凹が著しい。II層から出土した遺物は瓦器碗、土師器小皿等で鎌倉時代後期頃が考えられる。

5 I層 (挿図5, 図版1-a b)

黄灰色砂層や灰白色砂層などの流水堆積層が厚く約1.5mから1.8m堆積している。この堆積層中にも溝らしい窪みが断面から観察できる。I層にも幾時期か数面の水田が営まれていたようだ。しかしI層の時期は砂層の堆積が非常に著しい。これらの水田は営んでいたとしても砂層を被って幾たびも廃絶した事があったようだ。この堆積層は機械掘削で大半を除去したため詳しい事は分からないが、出土した遺物の中に染付等の近世の遺物が少量見られる事から、近世に入る時期のようである。

各層位のおおよその年代観は先にも記したが、再度まとめるとこのようになろうか。

V層が最上層の一部を除き、基本的に洪積層で旧石器を含む可能性のある堆積層である。

IV層は有機物を多量に含んで黒色を示した堆積層である。土質は粘質土から粘土まで場所によって違っている。堆積層は弥生時代に形成された層と考えている。この層の上面は弥生時代以降平安時代頃の遺物が出土している。

III層は黒色土器が多く、少量であるが瓦器碗を出土している。古代末から中世初頭が考えられよう。

II層は瓦器碗の器高が低くなり高台が退化した形態のものが出土している。中世中頃が考えられよう。

I層は染付が出土していることから近世に入って堆積しているようだ。

第2節 自然地形（挿図5）

弥生時代のV層上面の高低差を調べてゆくと、おおよその弥生時代の東奈良遺跡周辺の自然地形が復元できたので、当遺跡を理解する上で参考になるかも知れないので少し述べる。

今回の調査区周辺は基本的に北西側が高く、南東側が低い。挿図5で示すように5Aトレンチが高く、3Bトレンチが低くなっている。千里丘陵から大阪平野に洪積層が潜り込んでゆく地形を反映している。一つのトレンチ内でも相当の高さの違いがある。例えば1Aトレンチではトレンチの西端と東端では約30cm近くの高さの違いが見られた。今述べた基本的な地形の傾斜の中で2Aトレンチが周囲に比較して少し高まった地形の上に位置している。ここに掘立柱建物で構成される集落が営まれていた。集落が見られる1Aトレンチでも高い箇所には掘立柱建物群があって、低くなる東側ではピット等が減少する。そして遺物出土量も減少する。調査区南東側の地形的に低いB地区は弥生時代の湿地状堆積層が堆積している。すなわち淀川の形成した後背湿地が東側に広がっていた環境だったようだ。3Aトレンチでは埋没している幅約20m、深さ約1.3mの大きな谷が発見された。この埋没谷は弥生時代中期以前に大半は埋没している。弥生時代当時は現状の地表面からは窺えないような起伏を持った地形であった事が判明した。

第3節 検出した遺構（1996年度調査）

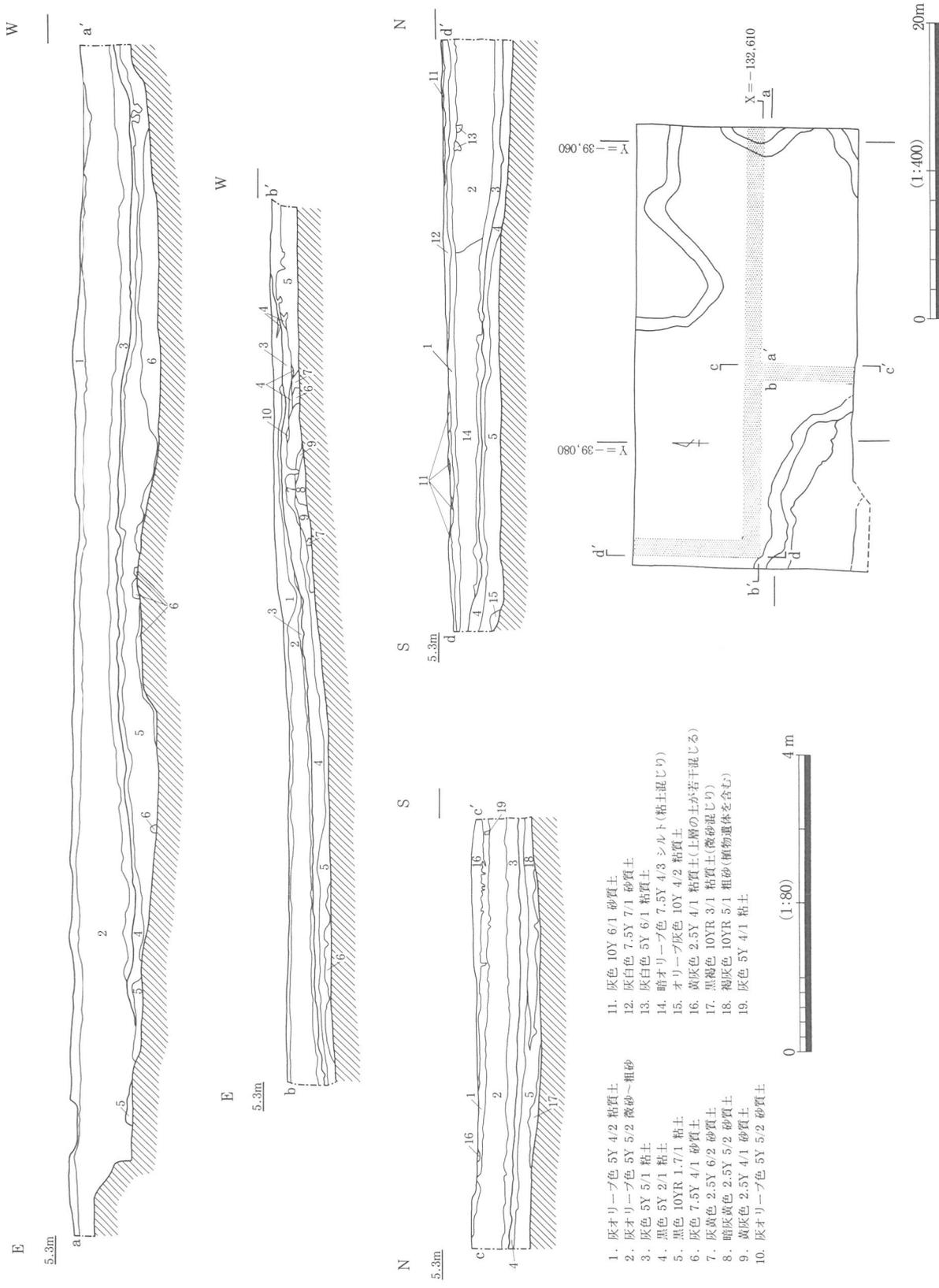
1 弥生時代以前

東奈良遺跡の今回の調査範囲内で、弥生時代以前に属するかと思われる遺物は非常にわずかである。遺物では1点縄文時代に属するか或いは弥生時代とも考えられる角錐状石器が出土している。（挿図99-6）この石器の表面は灰色を示して表面の風化の度合いが進んでいる。従ってこの風化の度合いからは弥生時代より古い時期かと推定された。通常の弥生時代の石器であればサヌカイトの打ち欠いた部分の割れ目は黒青色を示す。この石器の出土により弥生時代の下層に古い文化層の存在が考えられた。弥生時代の調査が終了した後下層の遺構・遺物の存在を確認する意味の調査を行った。下層からより古い文化層の存在を確認することはできなかった。

また遺構ではないが弥生時代の遺構分布に影響を及ぼしている自然地形の一つである埋没谷を1条調査した。

（1）開析谷（挿図5，6，7、図版2-b、50-d、51-c）

この谷は南側から3Bトレンチの全体、2Bトレンチの北東隅の小さな範囲を除く部分、3Aトレンチは北東隅の一部以外に位置する。推定の幅が20m前後、深さは1.3m前後を測る比較的浅い谷である。谷の位置はこれまでの調査結果を総合すると挿図7のような形になるようだ。3Aトレンチの西側から入って次第に向きを南に変えている。そして南を向いているようだ。谷の堆積層は最下層に砂層、中層に黒色粘土層、上層に緑灰色粘土層である。黒色粘土層は3Aトレンチ、2Bトレンチ、3Bトレンチから同様な堆積状況で検出されている。堆積層中層は黒色粘土層と緑灰色粘土層が互層をなしている。この層の中で下部の黒色粘土層が厚く40cmを測る。次第に堆積が進むと黒色粘土層の厚さは薄くなるとともに灰色粘土層は厚く堆積する（図版2-b、50-d、51-c）。黒色粘土層のプラントオパール分析を行うとクマザサの植物珪酸体が多量に検出されている。黒色粘土層が堆積していた谷はクマザ



挿図6 3Aトレンチ 開析谷断ち割り断面図

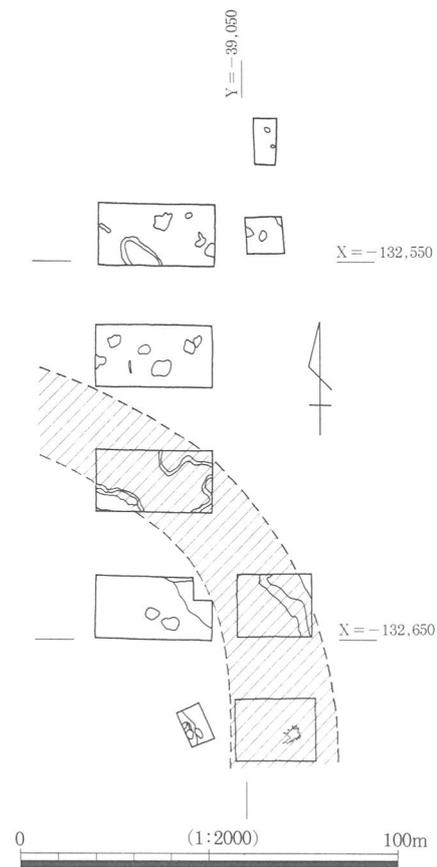
サが生い茂る景観であった事が明らかになった。この埋没谷から土器は全く出土しなかった。周辺に弥生時代人が居住する以前に埋没したようだ。弥生時代にはⅤ層上面として調査を行なった3 A トレンチの状況は、他のⅤ層が露出している箇所より少し窪んだ地形を示していたと推測される。この埋没谷上面の3 A トレンチでは弥生時代の遺構が非常に数少ない。検出された遺構は溝や土坑である。これらの開析谷上面は火山灰のブロックは見られない。

2 弥生時代

弥生時代はⅤ層上面とⅣ層上面に遺構を残している。Ⅴ層上面の遺構を弥生Ⅰと表し、Ⅳ層上面の遺構を弥生Ⅱと表している。Ⅴ層上面では弥生時代中期Ⅳ様式期の遺構と遺物が検出された。Ⅴ層上面とⅣ層上面と2面に分けて調査可能であったのは2 A トレンチだけである。他のA地区の他のトレンチではⅣ層が薄くて分層して調査できずⅤ層上面の遺構の調査とⅣ層上面の遺構調査が重複している。Ⅴ層上面で検出した遺構は弥生時代中期Ⅳ様式期の遺構がほとんどである。弥生時代前期の遺構、遺物は全く検出していない。一方弥生時代後期の遺構はわずかであるが検出しているし、また少量の遺物が出土している。

(1) 弥生時代中期

A地区全体の弥生時代遺構の分布は非常に偏っている。集落域とそうでない地域とは遺構分布状況は全く違っている。これは弥生時代人が意識的な集落域を設定していた事を推定させる。また集落域とⅣ層の厚さも比較的相関性を持っている。集落域の遺構が密集している範囲では、土器や石器等の遺物出土量もやはり非常に多くなる。すなわち集落域に遺構、遺物とも多く集中することが言える。集落域は1 A トレンチ西側と2 A トレンチ全体に広がっている。2 A トレンチ全体と1 A トレンチ西側が周辺に比較して高い。この小高い地形上に集落が営まれている。1 A トレンチ東側は低くなり、遺構は数少なくなっている。2 A トレンチ全体ではピットが約1200個近く検出され、掘立柱建物が数時期にも重複する集落域である。ここでA地区で最も多量の遺物を出土した。また集落域はあまりにもピット数が多く建物の復元には困難を極めた。そして調査では22棟の建物を復元した。そして今回報告する建物の復元案は多少問題を含んでいるかも知れない事を先に述べておく。なぜなら確実な建物がさほど多く復元できていないからである。そして柱が1本欠けていても建物として報告しているからである。完全な柱のそろった復元建物だけでは復元された建物の数少ない集落になってしまう。このような意味もあって柱が1本欠けた建物の復元案も問題を含んでいるとは感じつつも掲載している。このように無理をして報告しても検出したすべての柱掘り方は建物に復元できたわけではない。まだまだ多くの柱掘り方が残っている。



挿図7 開析谷範囲図

集落域を離れると遺構は激減する。遺構の種類も異なる。溝などの遺構や浅い遺構が大半を占める。3 A トレンチでは大溝が1条トレンチの南西隅を横切っている。この溝に沿って細い溝が1条流れている。また東側には屈曲した奇妙な溝が蛇行しつつ流れている。4 A トレンチでは東側に3 A トレンチで検出した大溝の続き部分と、全く違った別の大溝が2条検出された。ほかに土坑や風倒木痕が検出されている。5 A トレンチは小さな遺構が散在している。北東隅に見えている土坑状の遺構は、おそらく1995年度調査で検出した自然流路の南西川岸になるかと思われる。

V層上面の遺構は、風倒木痕が、中央部が周囲のV層上面より20~30cm高くV層から盛り上がった状態で検出している。III-2層段階から風倒木痕の頂部にあるV層灰白色粘質土が部分的に見えていた。従って風倒木痕の認められる範囲では、風倒木痕の高まりが残存している事から後世の削り取り作業や自然の削平はほとんどなかったと言えよう。しかし2 A トレンチ西側部分のIV層が堆積していなかった範囲では、削平を受けてIV層が残っていなかった可能性がある。

(2) 1 A トレンチ (挿図8、図版2-c d)

トレンチの東側が低くなる地形を示す。西側の高い箇所の海拔高は5.45mを測る。遺構はV層上面弥生Iで検出した。そしてIV層上面の遺構は検出できなかった。ピットはトレンチ南西側に集中している。ピット群に少し重なる位置のトレンチ南側中央にC字状に屈曲した溝1258がある。この溝1258に囲まれた内側には重なった土坑が3基ある。南西側ピット群は掘立柱建物を6棟復元している。それらのうちの幾つかは重複している。トレンチ東側に風倒木痕が2基大きな穴を窪ませている。トレンチ東側の遺構は埋土の色調も薄く深さも浅い傾向がある。トレンチ東側の遺構は遺物の出土量がトレンチ西側と比較して少ない。深い遺構は風倒木痕を除いて数少ない。集落域はトレンチ南西に限られていたが、ここに集落域を限るような柵列は見られないし、溝で区画したような痕跡も見られない。調査範囲内を見る限りでは開かれた集落であった可能性がある。1 A トレンチで出土した遺物はコンテナ10箱分である。

1) 掘立柱建物 (挿図8、図版2-c)

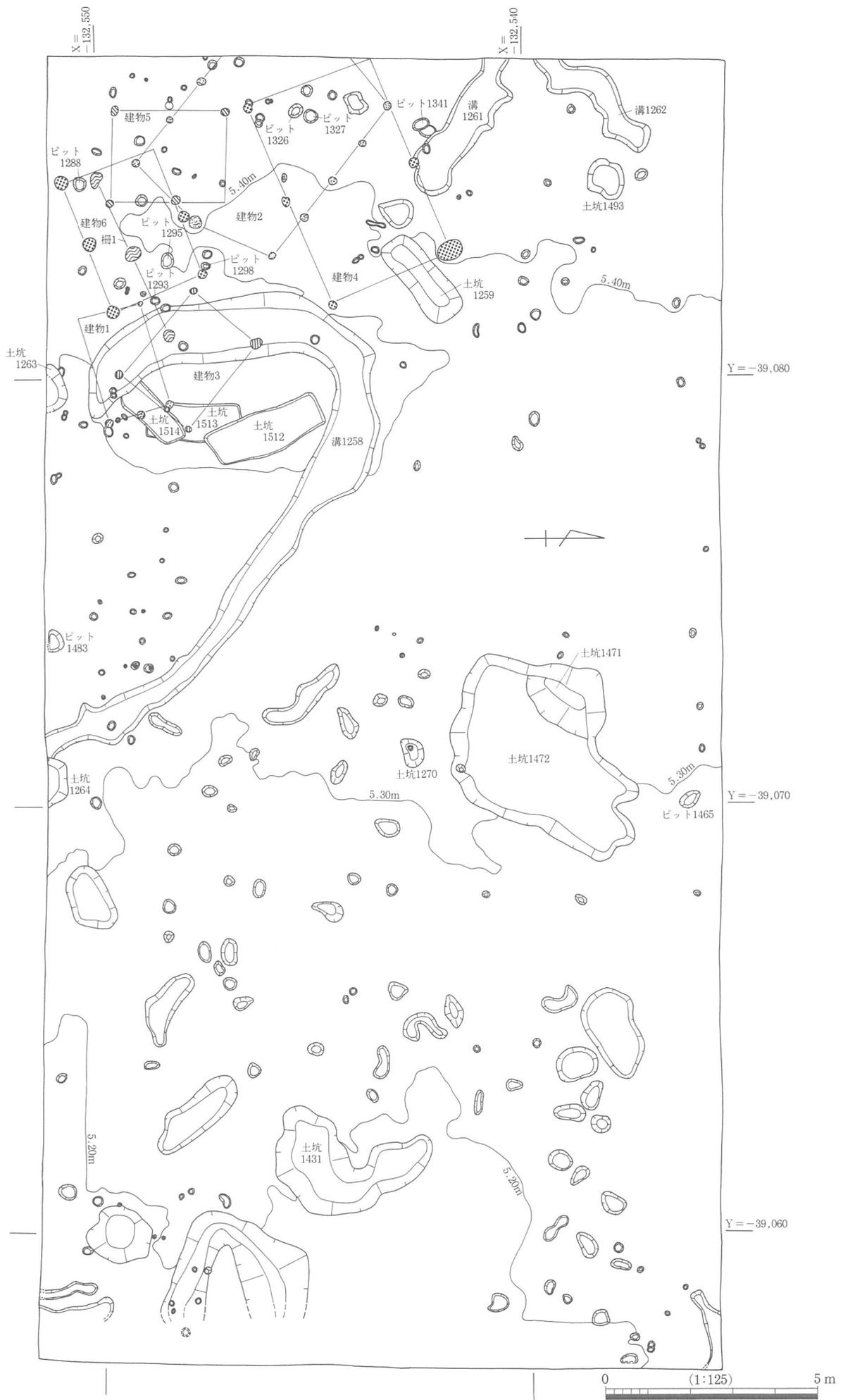
1 A トレンチの掘立柱建物はトレンチ南西隅に集中している。建物規模はあまり大きくない建物が多い。柱掘り方の形態も隅丸方形から不揃いの円形に近い形が多い。柱掘り方は小型のものが多い。遺物を出土した掘立柱建物やピットも数少ない。

建物1 (挿図9、図版2-c、3-b)

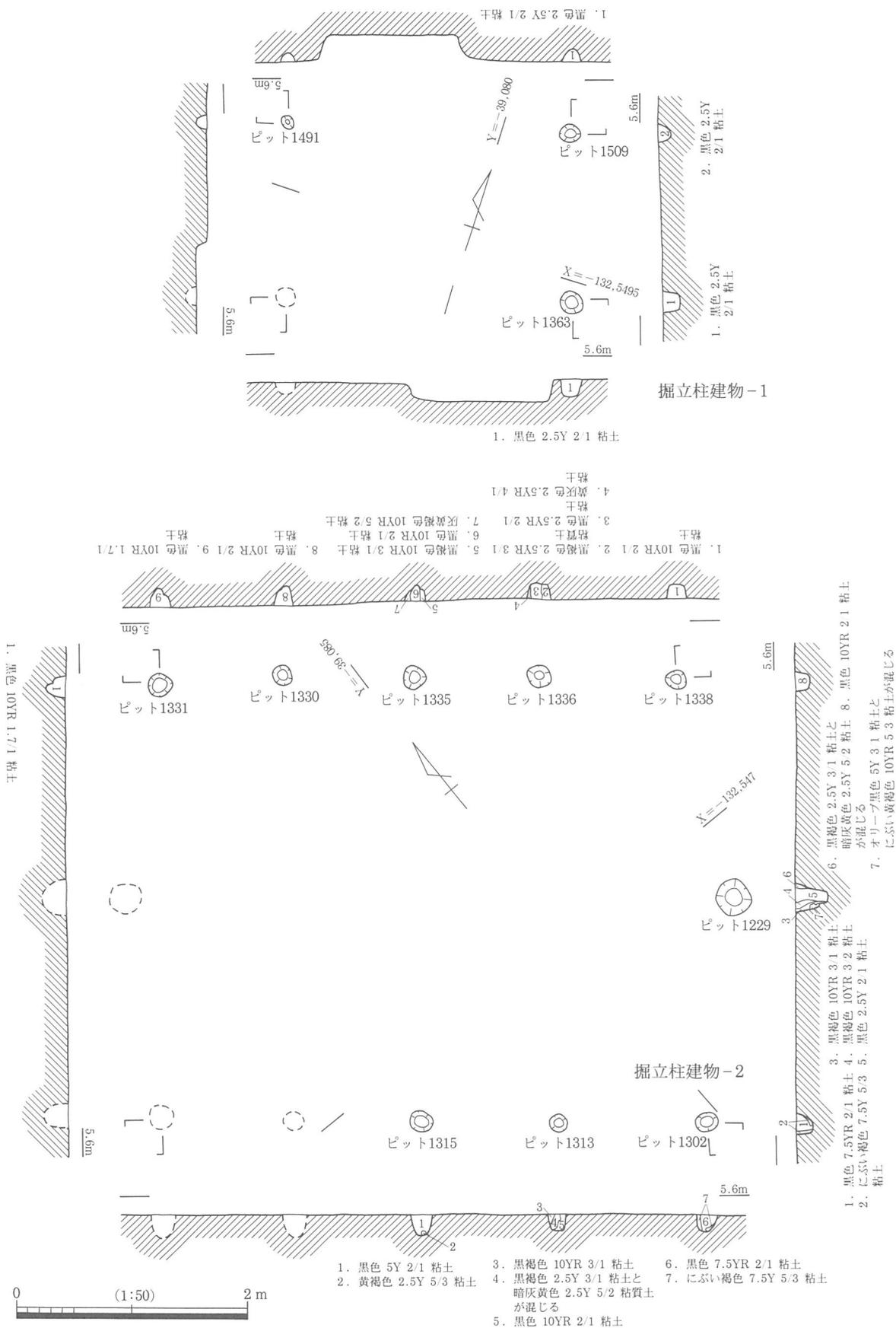
1 A トレンチ南西隅に位置して建物3、6と重複している。1間×1間の小さな建物である。あるいは主軸上にある2つのピットを建物を構成するピットとして考えていないが、この2つのピットを含んで建物として考える事も可能である。南側に延びる可能性がある。南西隅の柱は検出できなかった。柱掘り方は深くてしっかりしたものである。また埋土は黒色粘土層などである。柱掘り方の直径は小さく20cm前後を測る。主軸方位は東西方向である。建物の前後関係は柱掘り方が重複しないので分からない。遺構の標高は5.43mから5.44mである。

建物2 (挿図9、図版2-c)

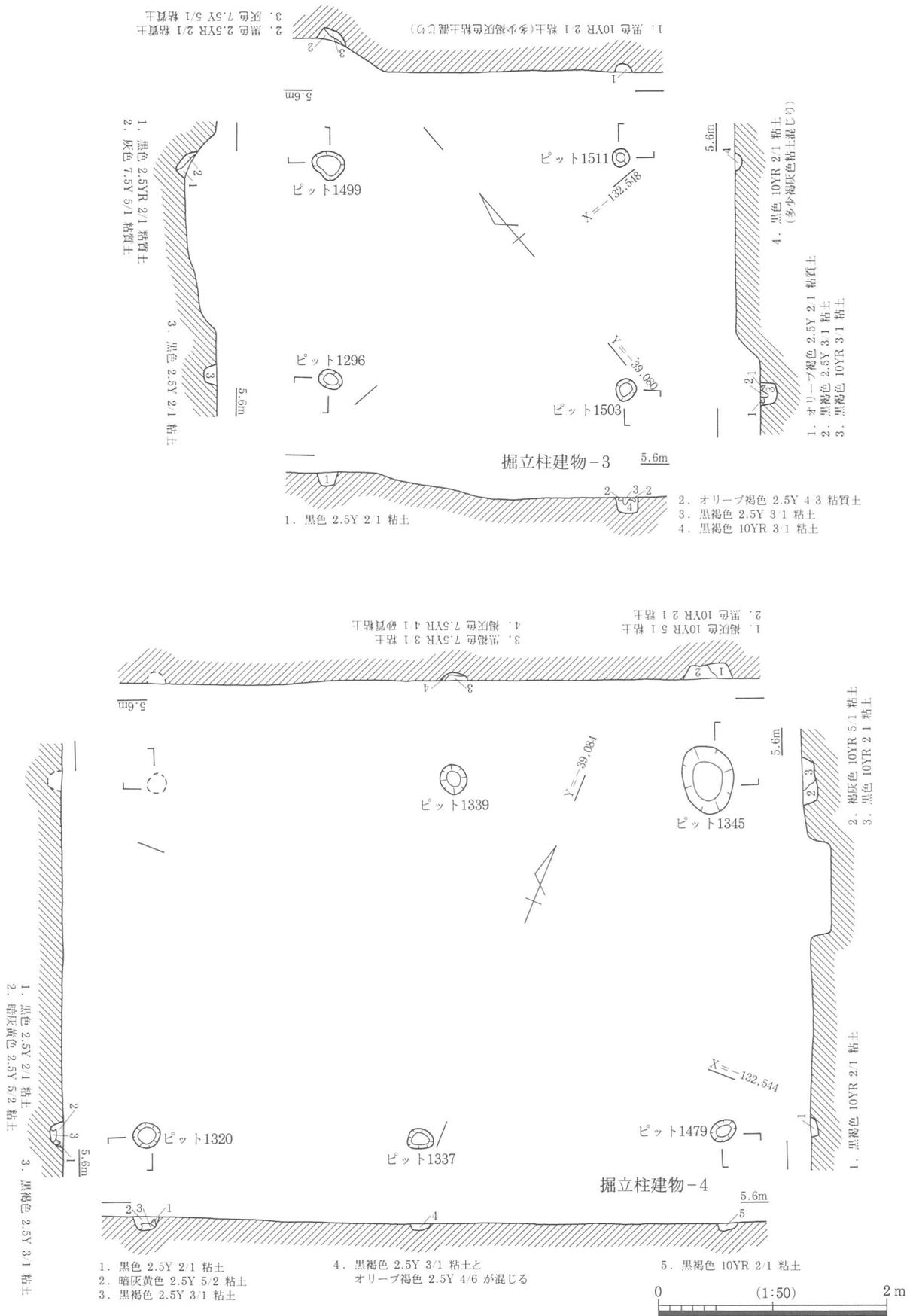
1 A トレンチ西端に位置している。建物は他の建物と違って主軸方向の棟持柱部分が突出した構造を採用している。棟を支える側柱の両端を結ぶ線と建物の主軸線を結んだ線が交差する箇所に柱掘り方が検出されないけれども棟持柱の柱掘り方は大きく深い。従って妻側の梁は突出した部分の柱で支える、主軸方向に突出した長六角形状の建物の構造として復元した。側柱は4間、梁行は2間である。建物の西



挿図8 1Aトレンチ V層上面 弥生I 遺構 平面図



挿図9 1Aトレンチ V層上面 弥生I 建物1、2 平面・断面図



挿図10 1Aトレンチ V層上面 弥生I 建物3、4 平面・断面図

側は調査区外になる。側柱は直径約30cmの柱穴が並んでいる。主軸方位は北西から南東方向である。建物4、建物5、建物6と重複するが前後関係は分からない。遺構の標高は5.40mから5.48mである。

建物3（挿図10、図版2-c、3-b）

1Aトレンチ南側に位置している。溝1258に先行して作られていた。ピット1499、ピット1503が溝1258の底から検出されている。1間×1間の建物である。建物2の主軸方位と非常に似た建物である。この建物の東側には建物は見られず、居住域の最も東端に位置している。遺構の標高は5.41mである。

建物4（挿図10、図版2-c）

この建物はトレンチ西端に位置している。1間×2間の建物である。主軸方位は建物6に非常に似ている。桁行きと梁行きの柱間寸法が少し長い建物である。建物2と重複するが前後関係は分からない。北西隅の柱のみ検出できなかった。遺構の標高は5.38mから5.46mである。

建物5（挿図11、図版2-c）

トレンチ南西隅に位置している。建物は2間×1間の建物で、主軸方位は南北に近い角度を示している。北東隅の柱のみ検出できなかった。柱掘り方は浅いもので20cmある。また柱掘り方埋土は黒色粘質土である。建物2、建物6、柵1と重複している。これらの建物と柱掘り方が重複しているものがないので前後関係は分からない。遺構の標高は5.42mから5.46mである。

建物6（挿図11、図版2-c）

トレンチ南西隅に位置している。主軸方位は次に述べる柵1と非常に似た方位を示している。建物の北西隅の柱掘り方のみ検出できなかった。建物2、建物5、柵1と重複している。柱掘り方が重複していないので建物の前後関係は分からない。南側の側柱の柱掘り方は大きく、建物の南側側柱と併行して並ぶ柵1も同様な大きさの柱掘り方を作っている。遺構の標高は5.40mから5.44mである。

柵1（挿図11、図版2-c）

トレンチ南西隅に位置して建物6と主軸方位が非常に似ている。建物3、建物5、建物6と重複している。単独の塀なのか建物の一部分だけトレンチ内に入っているのかは分からない。

2) ピット（挿図8、12、図版2-c d）

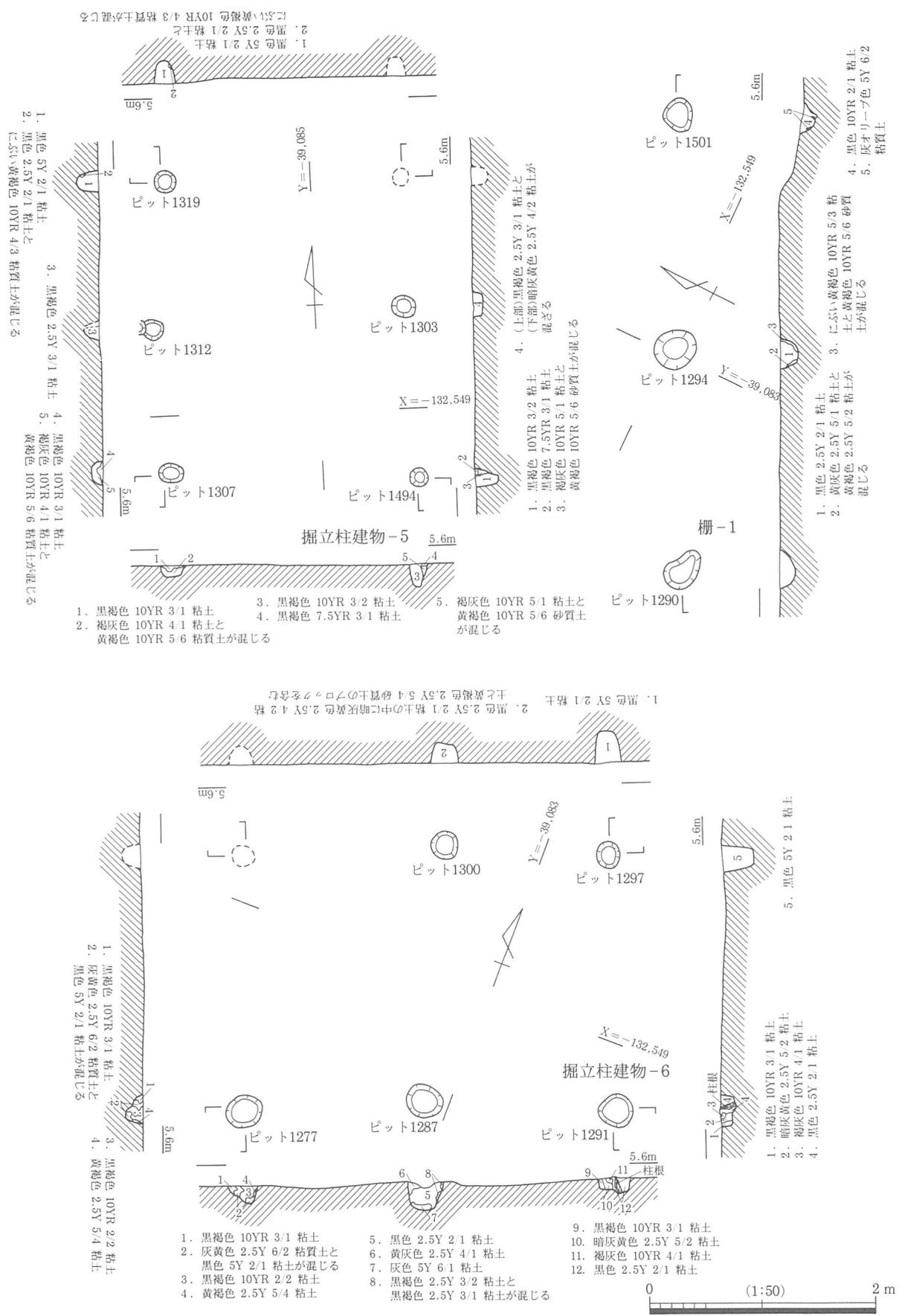
掘立柱建物を構成するピットや建物を復元できなかったピットがある。全体的に見ると南西側のピットは深く、埋土も黒色粘土層である。東側のピットは浅く埋土も茶灰色を示すものやもう少し薄い色調のものがある。挿図12に示す1Aトレンチのピット断面図も幾種類かに分類できそうである。

Aタイプ 埋土が黒色粘土である。掘り方径が深さが同じぐらいかあるいはもう少し深いものである。そして掘り方断面に柱痕を残しているか柱根が残っているものである。ピット1291（図版3-c、4-b）、ピット1293（図版3-d）、ピット1299、ピット1336、ピット1494がAタイプに属する。

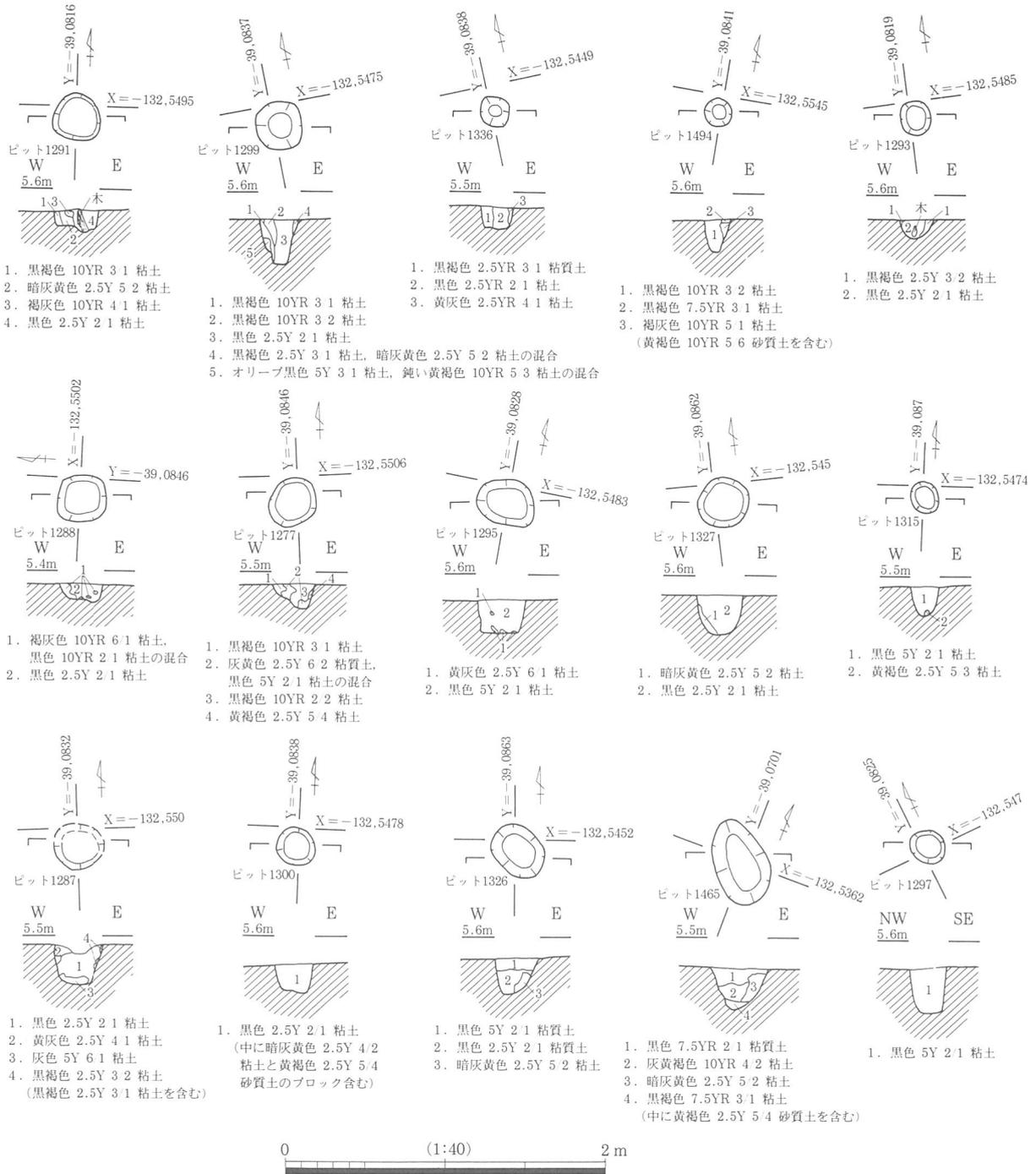
Bタイプ 埋土が黒色粘土である。掘り方の深さが掘り方径と同じかより深いものである。この掘り方内には柱痕が認められない。黒色粘土の中に薄い色調の土質のブロックが少量入る。ピット1277、ピット1288、ピット1295が相当する。掘り方は埋め戻されていることが分かる。

Cタイプ 埋土が黒色粘土と薄い色調の土が半々程度に混じったものである。深さは深いもので約30cm浅いもので20cmを測る。これらのピットも人為的に埋められていることを示す。このような種類のピットはピット1287、ピット1297、ピット1300、ピット1315、ピット1326、ピット1327、ピット1465などである。

3) 溝（挿図13、図版2-c）



挿図11 1Aトレンチ V層上面 弥生I 建物5、6 柵1 平面・断面図

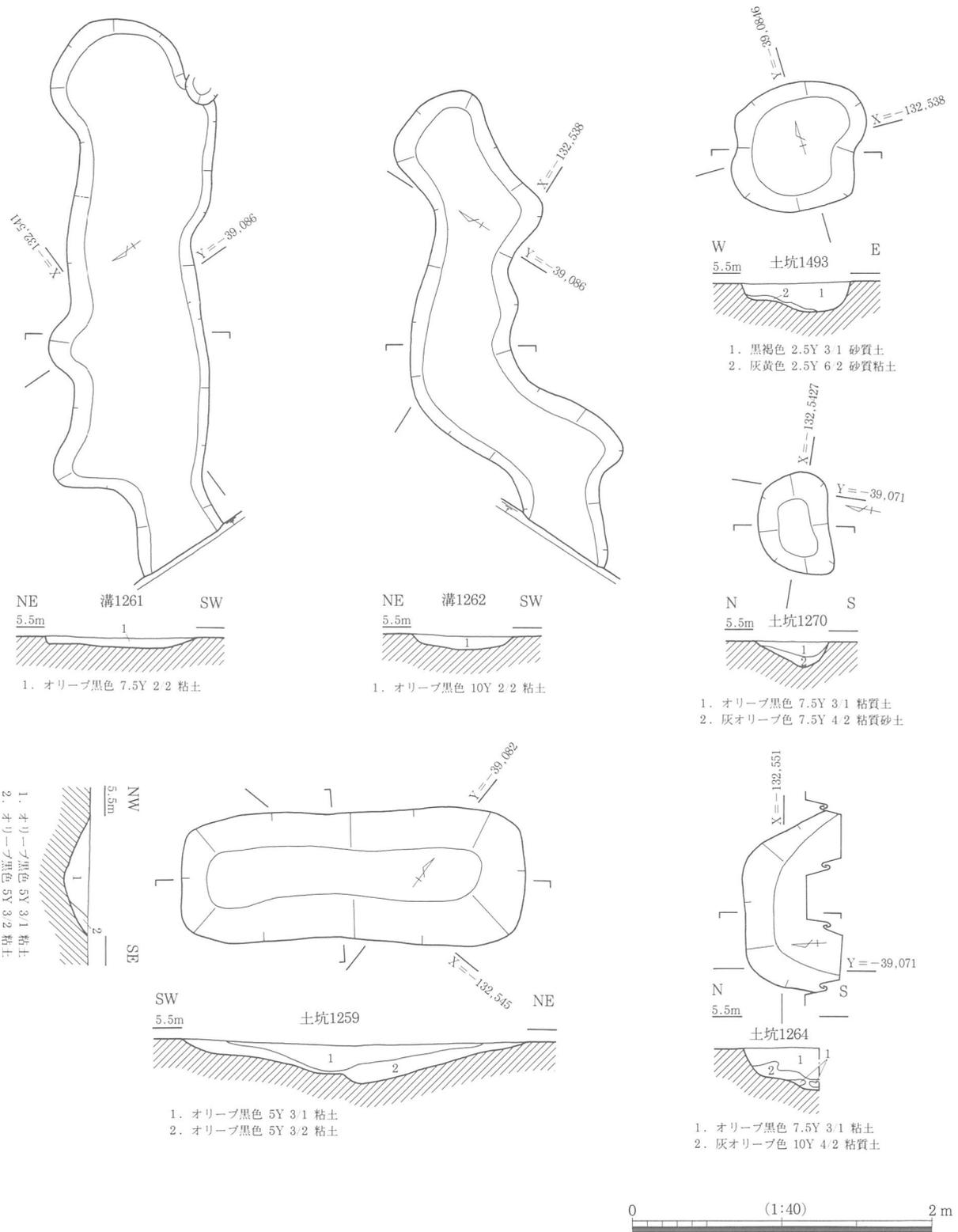


挿図12 1Aトレンチ V層上面 弥生I ピット 平面・断面図

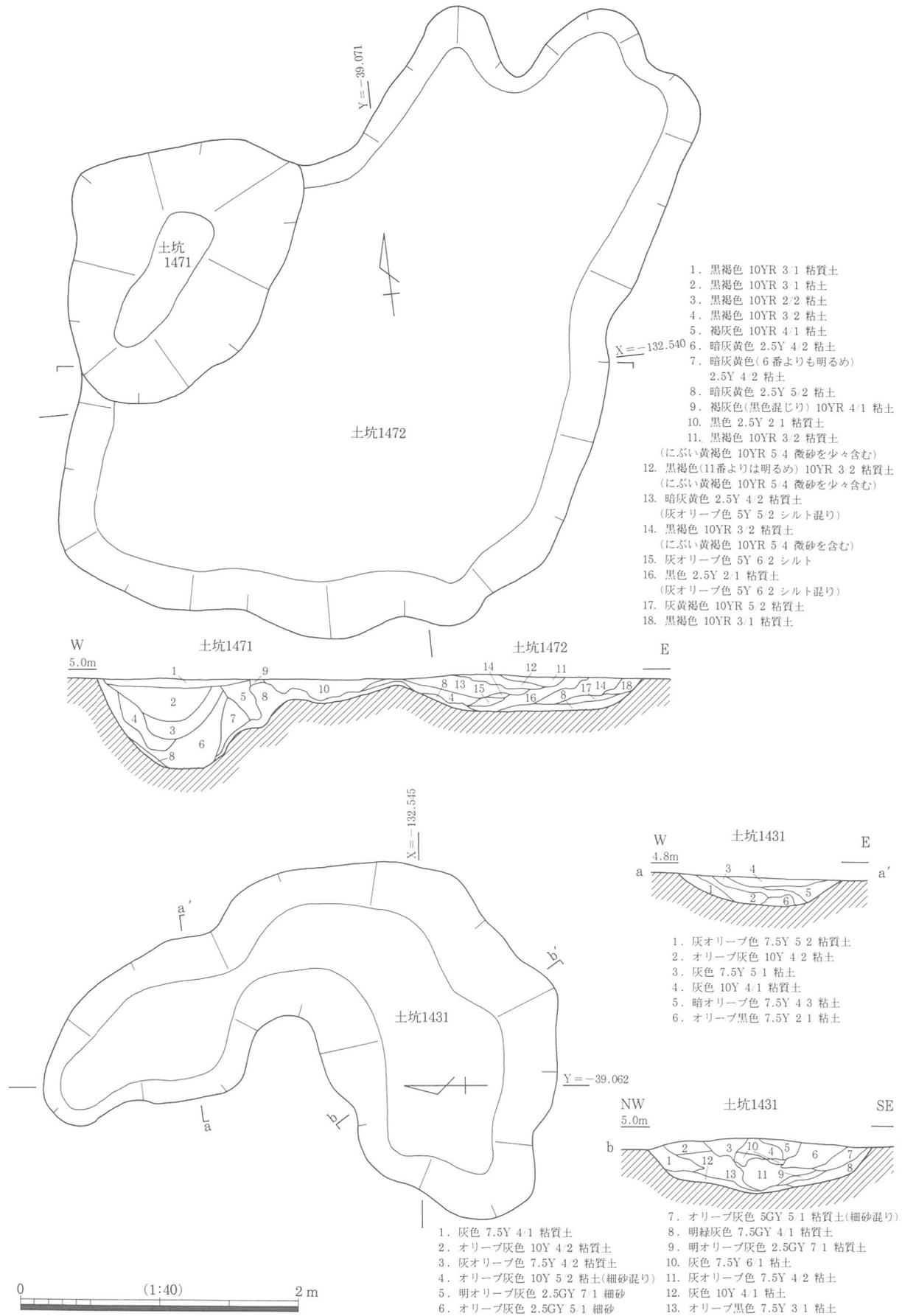
1Aトレンチの溝は3条検出した。トレンチ西端にお互いにおおよそ直角方向に延びている。
溝1258 (挿図8, 15、図版2-c、3-a b、4-c)

1Aトレンチ南側の中央より西側に位置している。掘立柱建物群の東端と一部分重なっている。掘立柱建物より後出で、溝の底からピットの柱掘り方が検出される。溝は東側を向いて見ると英字Cに似ている形である。溝の南東端はトレンチ南端より外側に続く。溝の南西端は南方向に折れているが、トレンチ南端まで延びていない。1m離れて南側矢板に接して土坑1263がある。この遺構は深さが約50cm近くあって周溝の続きと理解するには無理がある。また位置的にも溝の延びている方向と違っている。溝に囲まれた内側の西端付近に土坑が3基重なって検出した。溝1258が周溝としてこれらの土坑を取り囲

んでいると調査当初は理解していた。土坑3基は調査した結果主体部にならない可能性高い。このため溝1258と土坑3基を分離して報告している。溝は西側が深くそして幅広い。西端の南北方向に延びた部分で幅約3mを測り深さは約30cm近くある。しかし南東方向に延びる溝は浅く幅狭い。幅約1m深さ約6cmに浅くて狭くなる。土坑群と溝の西側との間に盛り土が厚さ約20cm認められた(挿図15)。溝の西



挿図13 1Aトレンチ V層上面 弥生I 土坑 溝 平面・断面図



挿図14 1Aトレンチ V層上面 弥生I 土坑 平面・断面図

側の掘立柱建物群の分布する区域ではこのような盛り土は認められない。溝1258に囲まれた中の西端部分に認められる堆積層である。溝1258の中の東側は盛り土が認められない。1 A トレンチで最も土器片が多量に出土したのは溝1258であり、それと溝1258に囲まれた内部である。溝の中から大量の土器片が小片となって出土している。周溝内埋土は西側の深い箇所では黒色粘土 黒褐色粘土、褐灰色粘土などを示し、東側の浅い箇所では黒色粘土 黒褐色粘土 暗灰黄色粘土などでやや色調が薄い堆積が多くなる。溝1258内側の溝内側の盛り土状の堆積は断面観察では南側断面、挿図15で上層に黒褐色粘土があり、その下に褐灰色粘土など薄い色調がある。この薄い色調も弥生時代遺構面の基盤層となる黄褐色火山灰ブロックを含んでいない。また色調の濃い粘土ブロックを含んでいる事から他から運んで盛り上げたと考えられる。また北側断面は黒色粘土などの暗い色調の粘土がブロックを含みつつ複雑に堆積している。やはり盛り上げた状況が推測される。何かの意図があって溝を屈曲させて掘り、土を盛り上げたようだ。

溝1261 (挿図8、13、図版2-c)

トレンチ西端から南東方向に延びている。溝はやや蛇行した形である。断面形状は浅くて壁面は緩やか傾斜して底部に至る。埋土も黒色に近い粘土である。溝1262と直交方向に延びる。

溝1262 (挿図8、13、図版2-c)

トレンチ西端から北東方向に屈曲しながら延びている。この溝も深さは浅く壁面は緩やかで底部に至る。黒色の埋土である。この溝と溝1261の東側にピットを検出したが建物として復元できなかった。

4) 土坑

このトレンチでは掘立柱建物の集落域に近接した位置で検出している。集落域の外側には土坑が散在する集落をとりかこんだ環状のベルト地帯が広がる。

土坑1259 (挿図8、13、図版2-c、4-d)

トレンチ西側において、溝1261と溝1258の間にある。形は隅丸長方形で土坑墓に見える。遺構は壁面が緩やかに下り曲線を描いて底部に至り、丸い底部である。この遺構は内部から副葬品と思われる土器が出土しない。断面観察は木棺などの痕跡が認められない。以上の理由から遺構は土坑と判断した。

土坑1263 (挿図8、図版4-e)

トレンチ中央南端において矢板に切られている。溝1258の南西端の延長上に位置する。検出した形状は隅丸長方形である。遺構の壁面は急な傾斜で底部に至る。遺構は溝1258と深さが異なっている。

土坑1264 (挿図8、13)

遺構はトレンチ南端中央にあり、矢板に切られている。遺構は溝1258を切っている。遺構の壁面は急傾斜を示し、底部は平らに近い。埋土は上層が黒色粘土で下層に少し薄い色調の粘土が堆積している。この堆積層の間に黒色粘土がブロック状に入っている。この遺構は人為的に埋め戻されている。

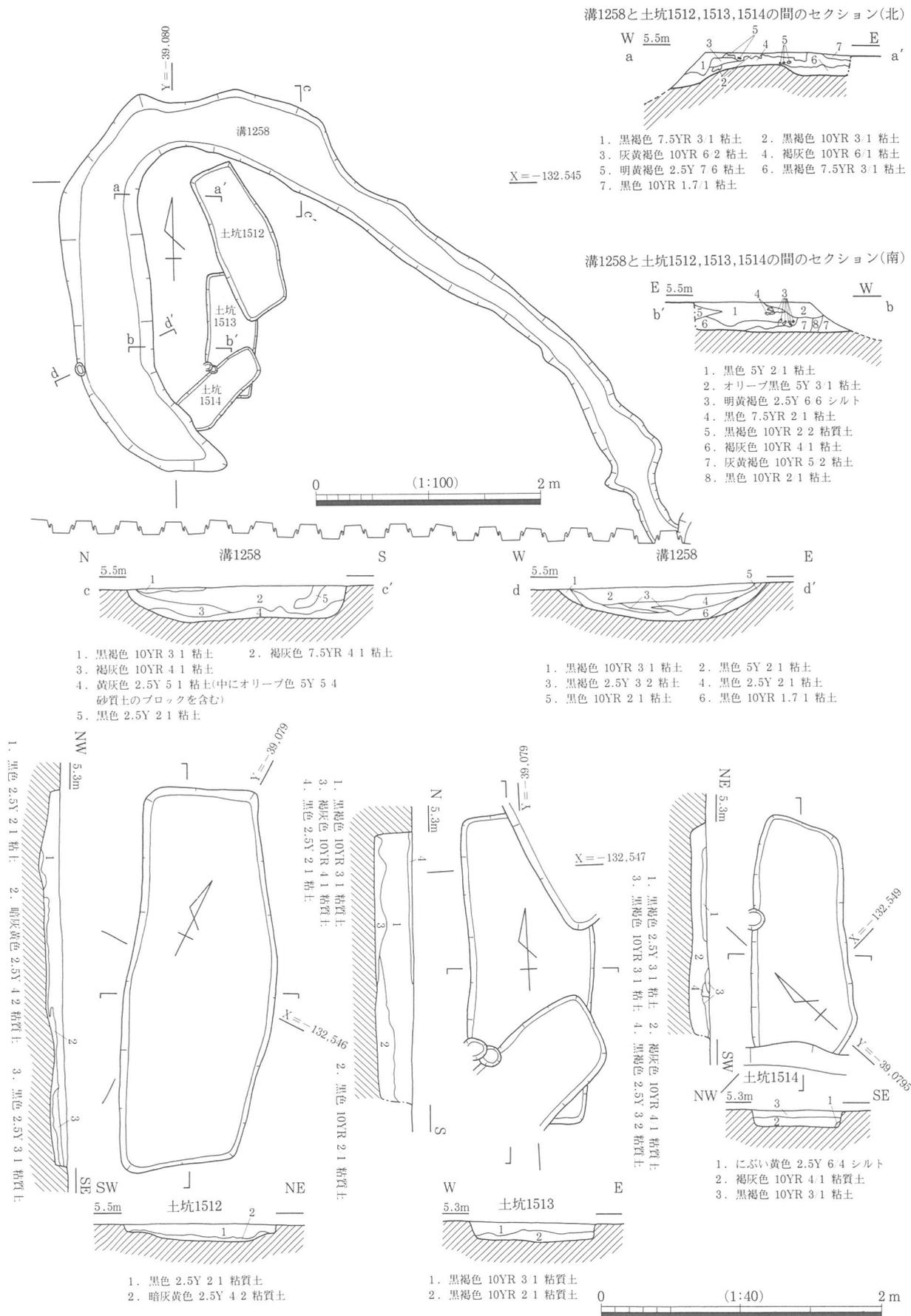
土坑1270 (挿図8、13、図版2-d)

トレンチ中央やや北寄りにおいて土坑1471、1472に近い位置にある。遺構は壁面が傾斜して底面に至る。遺構の中央底面が狭くて深い。埋土は上層に黒色粘土、下層に少し薄い色調の粘土が堆積している。

土坑1431 (挿図8、14、図版2-d)

トレンチ東側中央に位置している。形状は屈曲したU字が開いた形である。U字中央部分下層に黒色粘土層が下層に回り込んでいる可能性を考えて調査を行った。しかし遺構の断面では実際に下層にまで廻らずU字状に調査した。埋土は灰オリーブ色粘質土や灰色粘質土、オリーブ黒色粘質土である。

土坑1471 1472 (挿図8、14、図版2-d)



挿図15 1Aトレンチ V層上面 弥生I 溝1258、土坑 平面・断面図

トレンチ中央北側に位置している。北西側と南東側の2つの遺構が重複している。土坑1471は上層に黒褐色粘質土と下層に暗灰黄色粘質土が堆積している。また土坑1472は黒褐色粘質土、暗灰黄色粘質土、黒色粘土が交互に堆積している。深い部分が浅い部分の下層に廻って風倒木痕と理解して掘削したが、断面観察では黒褐色粘質土層が下層に廻っていなかった。この遺構は深い土坑と浅い土坑の2つの重なりと理解した。

土坑1493 (挿図8, 13、図版2-c)

トレンチ北西隅近くあって、溝1262の先端付近にある。遺構は壁面が急な傾斜を示し底部へ曲線を描いて至る。底部は凸凹している。

土坑1512 (挿図15、図版2-c、3-a、4-a)

この遺構は溝1258に三方を囲まれた内部で検出した土坑のうち最も北側に位置している。形状はややゆがんだ長方形形状である。遺構の壁面は垂直で、底部中央部が少し深く窪んでいる。埋土は上層が黒色粘土、下層は暗灰黄色粘質土である。この遺構は平面形が長方形形状で壁面が垂直なので墓坑を推測させるが、供献されたような土器の出土が見られない。また木棺の痕跡も認められない。これらの事から墓と考えるのは難しい。

土坑1513 (挿図15、図版2-c、3-a、4-a)

この遺構は溝1258に囲まれた中の3つ土坑のうち中央に位置する。土坑1512の南側に位置して、切られている。平面形は長方形形状で中央部が少し狭くなる。遺構の壁面は垂直である。底部はやや平坦である。土坑の埋土は上層に黒褐色粘質土、下層に黒色粘質土である。この遺構は供献されたような土器が出土していない。また木棺の痕跡も認められない。墓と理解するのは無理がありそうだ。

土坑1514 (挿図15、図版2-c、3-a、4-a)

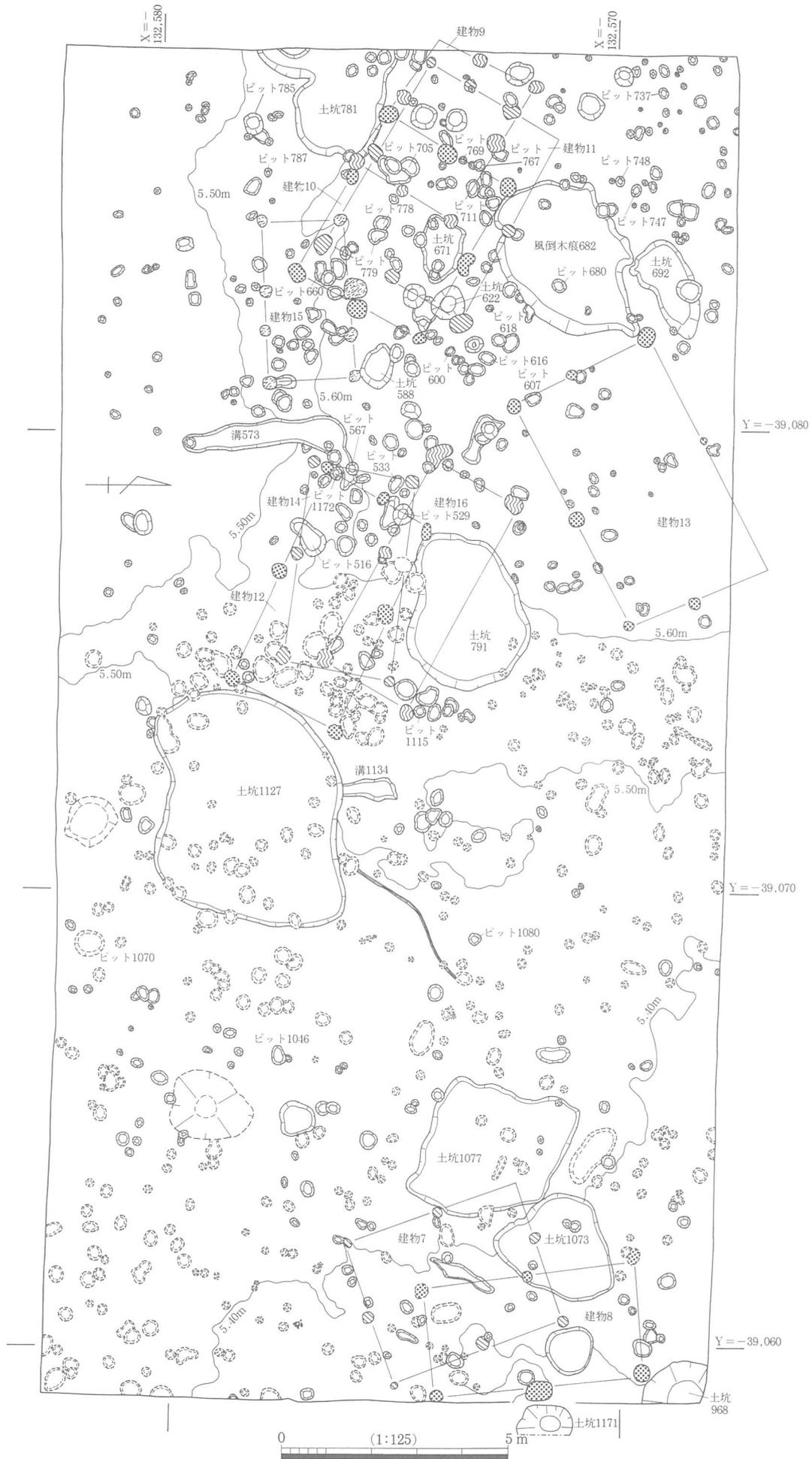
土坑は土坑1513の南側にあって上から切っている。遺構壁面は急角度で底部に落ち込んでいる。底部は平坦である。埋土は上層に黒褐色粘質土が、下層に黒灰色粘質土が堆積している。この遺構は供献されたような土器が検出されない。また遺構は堆積層に木棺の痕跡などが認められない。この遺構は墓として理解するのは難しい。

(3) 2A トレンチ (挿図16, 17)

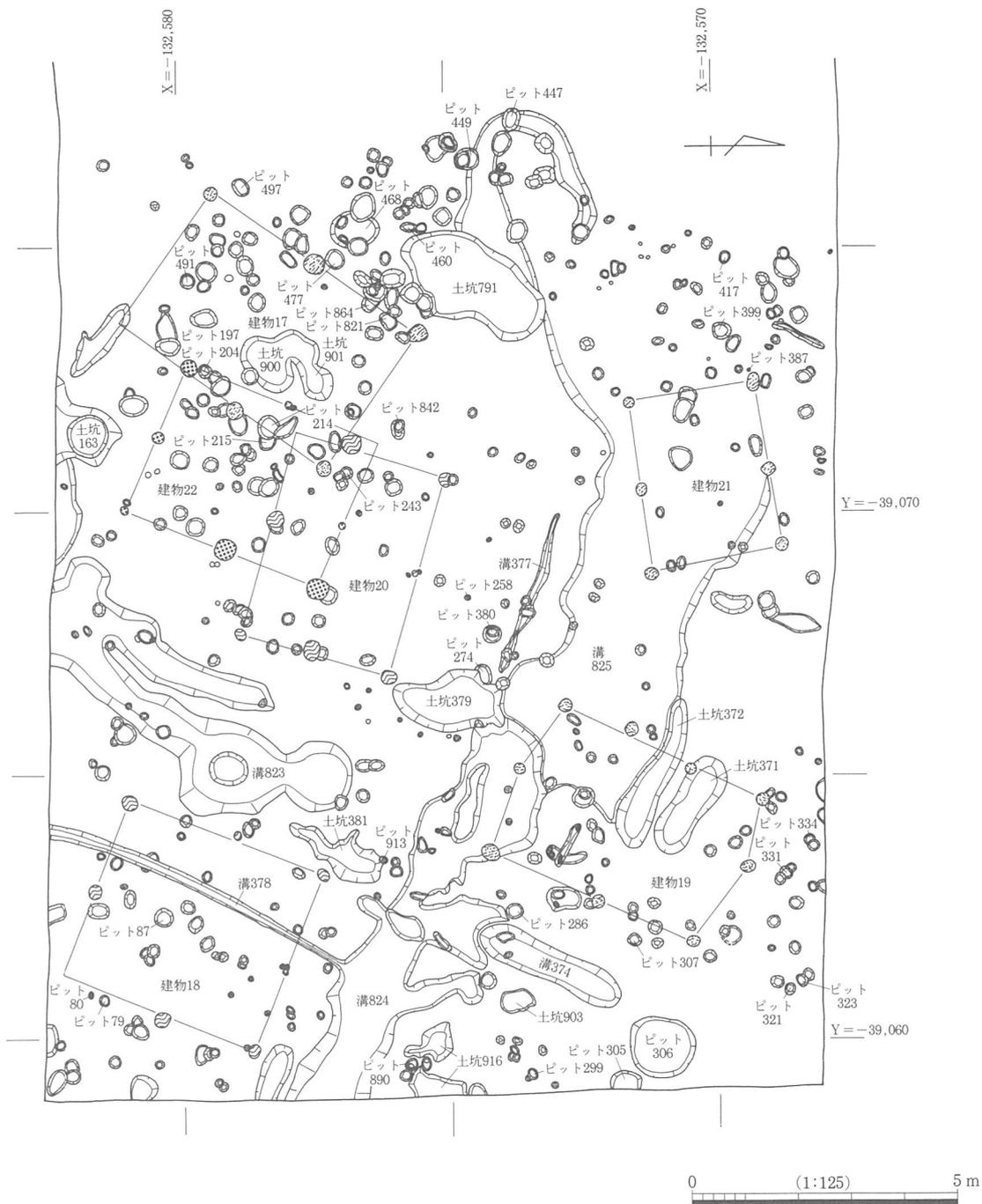
このトレンチでは集落域の東側約1/2はV層上面とIV層上面の2枚の遺構面を確認した。下層遺構面であるV層上面を弥生I、上層の遺構面であるIV層上面を弥生IIと表している。しかしトレンチの西側はIV層が堆積していない。トレンチ西側はV層上面を弥生Iと表している。トレンチ西側は弥生Iと弥生IIの2時期が重複している可能性が大きい。遺構平面図、遺物実測図、写真図版は弥生I、弥生IIを分離できるものは分けて掲載しているが、時には混在した形で掲載した部分もある。

このトレンチは掘立柱建物の柱掘り方が数多く1200個近くを調査した。このトレンチは掘立柱建物が密集した集落域と理解できよう。1A トレンチの南西隅にも掘立柱建物の集落域を調査している。この掘立柱建物群と繋がる集落と理解される。このトレンチ南西隅部分は少し低くなる。この部分はピットの分布数が減少する。ここは集落域からはずれていたようだ。

柱掘り方は弥生Iの遺構面、弥生IIの遺構面ごとに集中している箇所がある。弥生Iの中央付近や西側中央付近に柱掘り方が集中している。しかし検出した柱掘り方を組み合わせて長方形形状の建物を復元しようとしてもなかなか組み合わせがうまくゆかない。従って中には建物主軸部分が突出した六角形状



挿図16 2 Aトレンチ V層上面 弥生I 遺構 平面図

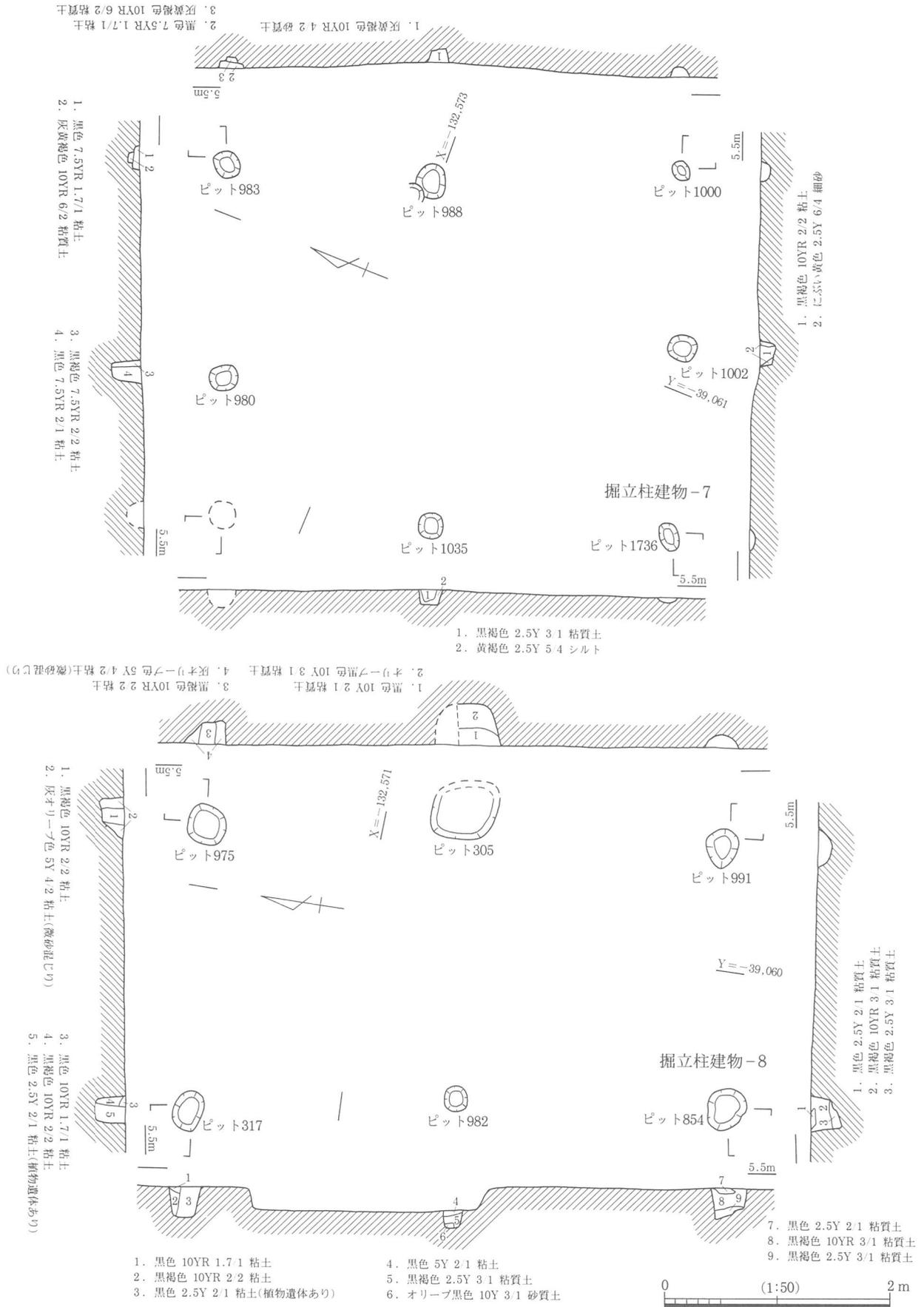


挿図17 2 Aトレンチ IV層上面 弥生II 遺構 平面図

の建物を復元した場合もある。しかしこれらを含めて復元しても、検出した柱掘り方が相当数建物に復元できずに残っている。建物の中には縦穴住居状の柱構造を採った多角形状の掘立柱建物も存在していた可能性も考えている。しかし復元案として示していない。柱掘り方が数多く集中した箇所はこのような構造で復元する例があるのかも知れない。

1) V層上面の遺構 弥生I (挿図16、図版5-a b)

弥生Iの東側は柱掘り方の検出状況は上層に比較するとやや数が少なく、掘立柱建物を復元している数も少ない。そして風倒木痕や土坑が認められる。弥生I西側では柱掘り方が密集して検出している。復元建物も比例して増えている。風倒木痕や土坑も検出している。弥生I西側が弥生IIの時期の遺構と



挿図18 2Aトレンチ V層上面 弥生I 建物7、8 平面・断面図

重なっているため、建物の相当数が弥生Ⅱの時期に作られていた事を示している。また1 A トレンチ同様に風倒木痕が幾つか検出されている。しかしこの風倒木痕は弥生時代中期遺構群と同時期なのかが問題となろう。しかし詳細に観察してゆくと弥生Ⅰ期の風倒木痕は埋もれた状態の上に弥生時代中期の遺構が掘り込んでいる。従って弥生時代に大木と集落が同時期に存在していたのではないようだ。また注目すべき事は集落域にも関わらず井戸は1基も検出できなかった。大型土坑や貯蔵穴らしいものは幾つか認められている。大量に土器を出土した遺構はトレンチ東端の土坑1171である。この遺構から大量の土器片と木製品が出土した。またこの遺構面では集落域内部を区画する溝、また集落域と外部を区画する溝なども検出できなかった。遺構の時代はほとんどが弥生時代中期であるが、ほんの数点少し新しい時期の遺物が出土している。

2) IV層上面の遺構 弥生Ⅱ (挿図17、図版7-a b)

IV層は2 A トレンチ東部のV層上面に堆積する厚さ約20cmの弥生時代包含層である。このIV層上面が弥生Ⅱ遺構面である。弥生Ⅱは掘立柱建物を数棟、溝を数条検出した。また土坑も幾つか検出した。弥生Ⅱでは検出された溝の方向とほぼ合致する主軸方位の掘立柱建物を数棟復元している。この弥生Ⅱは下層の弥生Ⅰより柱掘り方検出数も多く、柱掘り方が密集している箇所も認められる。掘立柱建物は建物17から建物22の6棟復元できた。

3) 掘立柱建物 (挿図16, 17)

2 A トレンチでは掘立柱建物が総数16棟復元し得た。しかし小さな建物が中心で大きな柱材を使用した建物は検出していない。最も大型の建物は2間×4間の規模である。建物は柱の本数は多いが柱間距離が接近していて床面積が狭い建物と柱数は少ないが柱間距離が離れていて床面積の大きな建物など様々な種類がある。このトレンチでは主軸上の両端の柱が突出した形の建物を復元している。柱掘り方が集中する箇所は数棟の建物が重複している。この箇所は同じ場所に継続して建て続けていたようである。最高4棟重複していることから継続年数を計算すると次のようになるだろうか。掘立柱建物の耐用年数は一般に伊勢神宮の遷宮年数の30年をそのまま使用している。この30年を通常の掘立柱建物の使用年数にも適用して耐用年数を30年と考えているが、これも批判的にとらえる必要がある。伊勢神宮は最も高価で良好な檜材を使用して耐用年数が30年である事から、弥生時代の通常の木材を使用している掘立柱建物はもう少し耐用年数が短いと思われる。長くて15年場合によっては10年程度も想定しなければならないのではなかろうか。そうすると仮に耐用年数15年とすると4棟重複しているので60年間、耐用年数が10年としても40年間この集落が継続していたと考えられ、おおよそ半世紀前後この集落が継続していたと推測される。

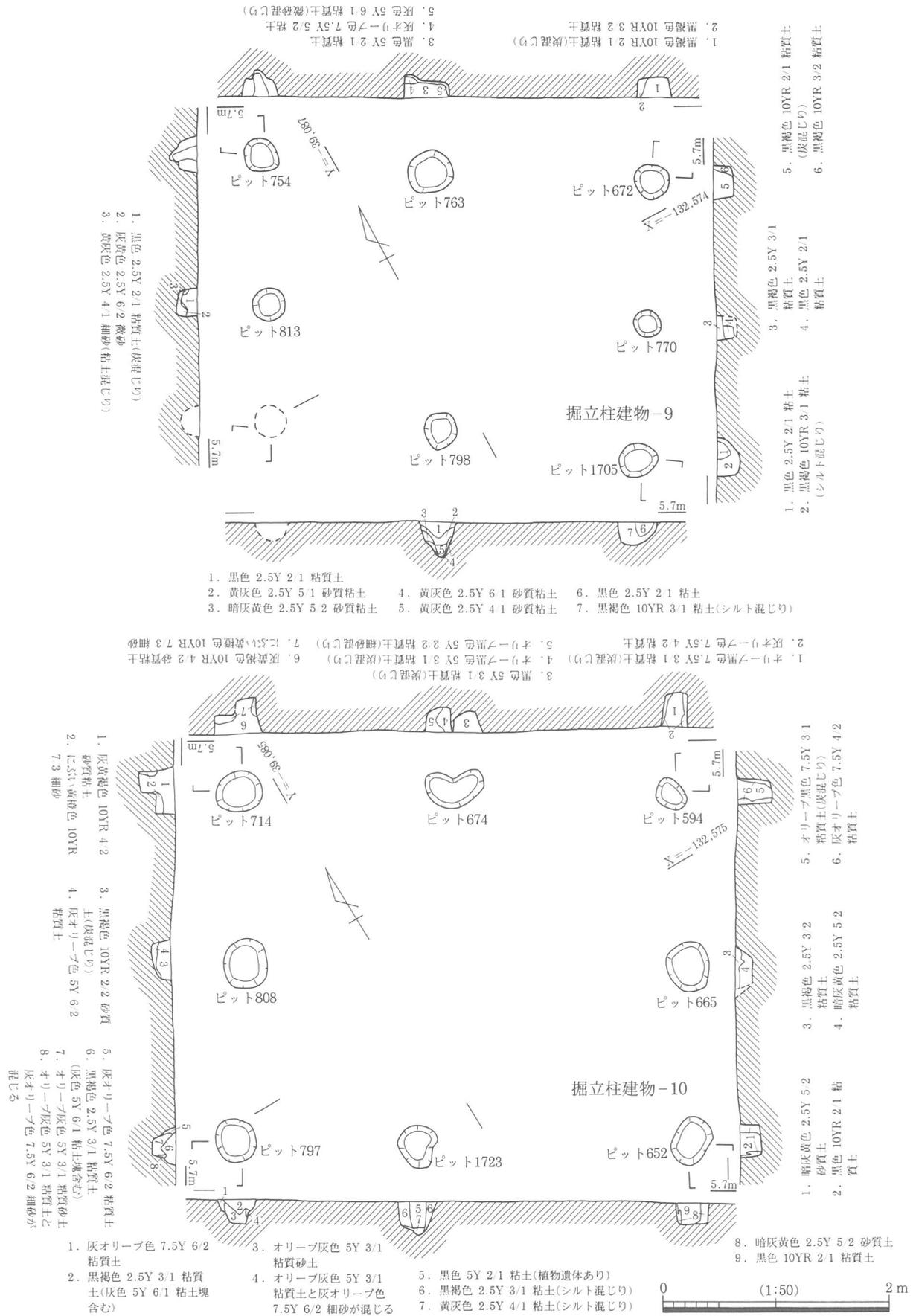
4) V層上面 弥生Ⅰの掘立柱建物

建物7 (挿図16, 18、図版5-b)

長方形の掘立柱建物である。トレンチ北東端に位置している。建物8と重複している。両建物は主軸方位が少し異なっている。建物規模は2間×2間である。主軸方位は南北方向を示し、北側が西に振っている。建物8との前後関係は遺構が切り合っていないので分からない。遺構の標高は5.30mから5.20mである。

建物8 (挿図16, 18、図版5-b)

長方形の掘立柱建物である。建物7と重複してトレンチ北東隅に位置している。主軸方位は南北方向に近い角度を示している。建物規模は2間×2間である。遺構の標高は5.30m前後を測る。



挿図19 2Aトレンチ V層上面 弥生I 建物9、10 平面・断面図

建物9（挿図16、19、図版5－a）

長方形の掘立柱建物である。トレンチ西端中央に位置している。主軸方位は東西方向を示し、西側を少し北に振っている。建物規模は2間×2間であるが主軸方向が長く梁は短い。標高は5.60m前後を測る高さに立地している。建物10、建物11と重複している。これら建物9、建物10、建物11の主軸方位は非常に近い値を示している。

建物10（挿図16、19、図版5－a）

長方形の掘立柱建物である。建物位置はトレンチ中央西端付近にある。主軸方位は先の建物9と非常に似ていて、東西方向を示して、西側を少し北に振っている。建物規模は2間×2間である。建物9、建物11と重複している。柱掘り方は建物9と建物11とも切り合っていないので前後関係は分からない。建物が立地している地盤の標高は5.60mから5.40mを測る。このトレンチ内では最も高い位置にこれらの建物9、建物10、建物11の3棟は建てられている。建物を構成しているピット714から須恵器が出土している。このピット714を使用して復元した建物10は問題があるが、一応掲載しておく。

建物11（挿図16、20、図版5－a）

長方形の掘立柱建物である。トレンチ西端中央に位置する。主軸方位は東西方向を示して、西側が少し北に振る。主軸をほぼ同じくする建物の中では最も床面積が大きい。側柱は2本であるが妻側は西側が3本、東側が2本の特異な構造を採る。建物が立地している標高は5.60mを測る。東側に建物15が主軸方位を違えて重複している。

建物12（挿図16、20、図版5－a、6－a）

長方形の掘立柱建物である。トレンチ中央西寄りに位置する。風倒木痕1127、風倒木痕791に挟まれている。ここでは建物12に重複する建物が2棟ある。建物14、建物16である。これらの建物の主軸方位はほぼ南東から北西方向を示して建物で少しずつ違っている。建物規模は1間×2間である。建物は東西方向が長く南北方向が短い。建物は標高5.60mから5.50mにある。建物は緩やかな傾斜に位置している。重複する建物は柱掘り方が切り合っておらず前後関係は分からない。

建物13（挿図16、21、図版5－a）

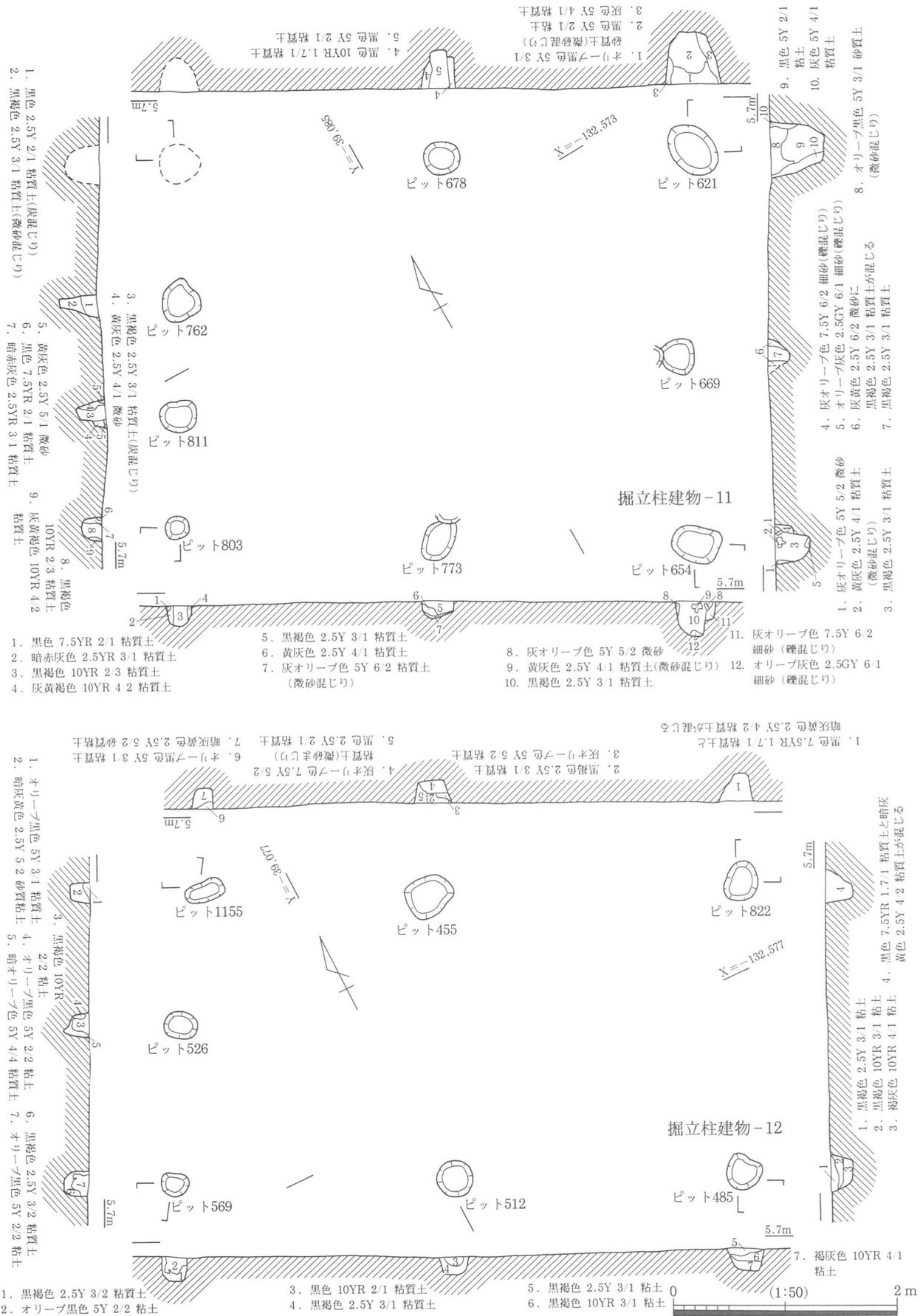
長方形の掘立柱建物である。トレンチ中央やや北端に位置している。この建物は単独で存在する。周囲には柱掘り方が少なく継続して建てられた痕跡は少ない。2間×1間の建物である。主軸方位は他の建物と違って南西から北東方向を示している。建物北東隅は矢板に重なって検出できない。建物の柱間寸法は長くて床面積は広い。建物が立地している標高は約5.60mを測る。

建物14（挿図16、21、図版5－a）

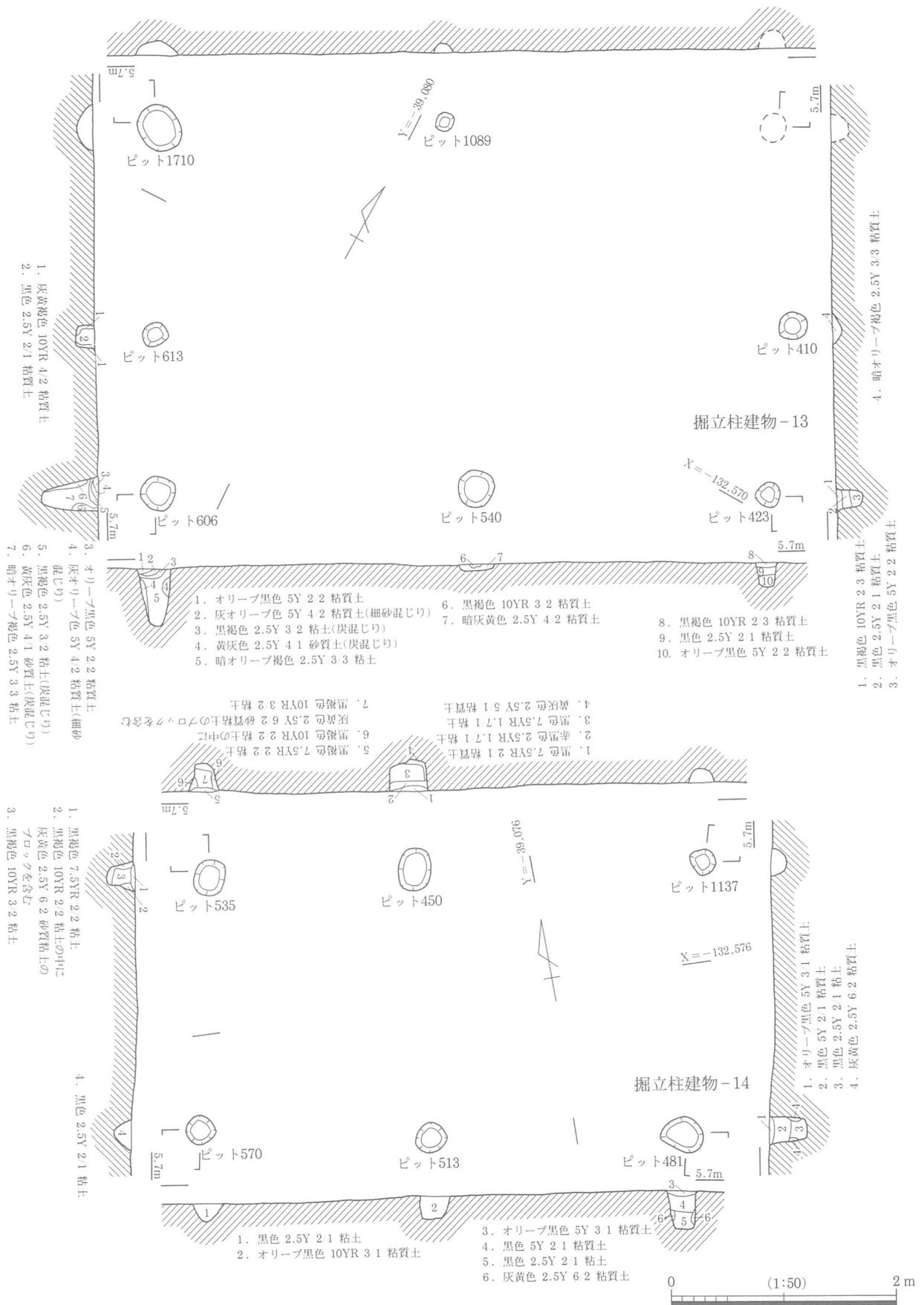
長方形の掘立柱建物である。トレンチ中央やや西よりに位置する。建物は風倒木痕1127、風倒木痕791に挟まれている。建物の規模は2間×1間である。建物は柱間寸法が短く床面積が狭い。建物の主軸は東西に近い方位を示している。建物は標高5.60mから5.50mに建てられている。建物は南東方向に下る傾斜面に位置している。

建物15（挿図16、22、図版5－a、6－a）

長方形の掘立柱建物である。建物はトレンチ西端中央付近にある。建物は溝573と土坑781の間に位置している。建物の規模は3間×1間である。建物は柱間寸法が短く床面積は狭い。建物の主軸方位はほぼ東西方向を示している。重複している建物は建物10、建物11である。これらの建物と建物15の主軸方位は違っている。建物は標高5.60mから5.55mに建てられている。建物は南側に傾斜した斜面に位置し



挿図20 2Aトレンチ V層上面 弥生I 建物11、12 平面・断面図



挿図21 2Aトレンチ V層上面 弥生I 建物13、14 平面・断面図

ている。

建物16（挿図16, 22、図版5-a、6-a）

長方形の掘立柱建物である。トレンチ中央やや西よりに位置している。建物の規模は2間×1間である。建物の主軸方位は東西方向を示して、西側が少し北に振った角度を示している。建物の柱間寸法は少し短い。建物の床面積はやや狭い。建物が立地している標高は5.60mから5.40mを測る。建物は東側に傾斜した斜面に建てられている。建物は建物12、建物14と重複している。

5) IV層上面 弥生IIの掘立柱建物

弥生IIの遺構面で6棟復元した。溝の方向か或いは直交方向を示す建物が多い。いずれの建物も小さな建物である。

建物17（挿図17, 23、図版7-a b、9-a）

長方形の掘立柱建物である。トレンチ中央南側に位置している。建物の主軸方位は北東から南西である。建物は1間×2間である。建物の南東隅の柱痕は溝926と重複して検出できなかった。建物が存在する標高は5.61mから5.54mを測る。建物は南側に傾斜した斜面に建てられている。建物は建物20、建物22と重複している。

建物18（挿図17, 23、図版7-a b、8-c d）

長方形の掘立柱建物である。トレンチ南東隅にある。建物は2間×2間である。建物の主軸方位は南北を示して、北側が少し東へ振っている。建物の南東隅の柱は検出できなかった。建物は柱間寸法が長い。建物の床面積は他の建物と比較して少し広い。建物の主軸方位は隣接する溝824の方向と平行し、他の溝と直交している。建物が立地している標高は5.60mから5.55mを測る。この建物は単独で建てられている。また建物の主軸方位と平行して西側に溝823がある。また建物17の主軸方位は建物を横切っている溝378とほぼ平行している。

建物19（挿図17, 24、図版7-a b、8-b、9-b）

長い六角形状の掘立柱建物である。建物はトレンチ北東側に位置している。建物は主軸上の棟持柱が側柱より突出した位置にある。南東側の側柱は2間、北西側の側柱は3間の構造を示している。建物の床面積は柱が多いにも関わらず広くない。建物は他の建物と重複せずに、単独で建っている。建物が建てられた標高は5.60mから5.55mを測る。建物は東側に傾斜した緩やかな斜面上に立地している。建物の主軸方位と平行して東側に溝374がある。建物の南側に溝824が重複している。

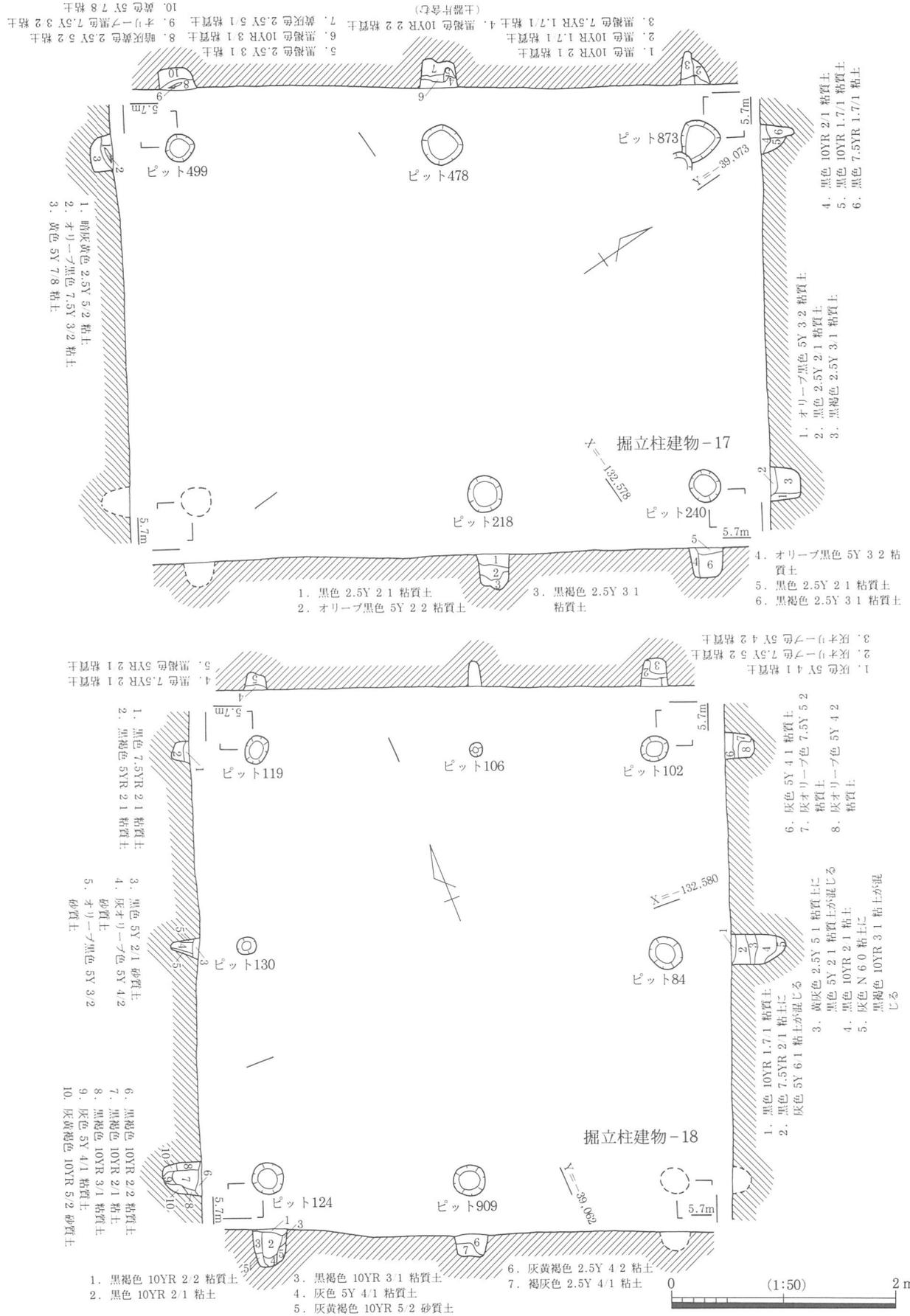
建物20（挿図17, 24、図版7-a b、8-c）

長方形の掘立柱建物である。建物はトレンチ中央南よりの南東に近い所にある。建物の主軸方位は東西方向を示して、東側が少し南に振っている。建物の西側の柱掘り方が検出できなかった。建物は2間×2間である。建物が建てられている標高は5.60m前後を測る。建物の東側に建物の主軸方位と直交した溝823がある。また建物北側に主軸方位と平行な溝377がある。建物は建物17、建物22と主軸方位が違うが重複している。

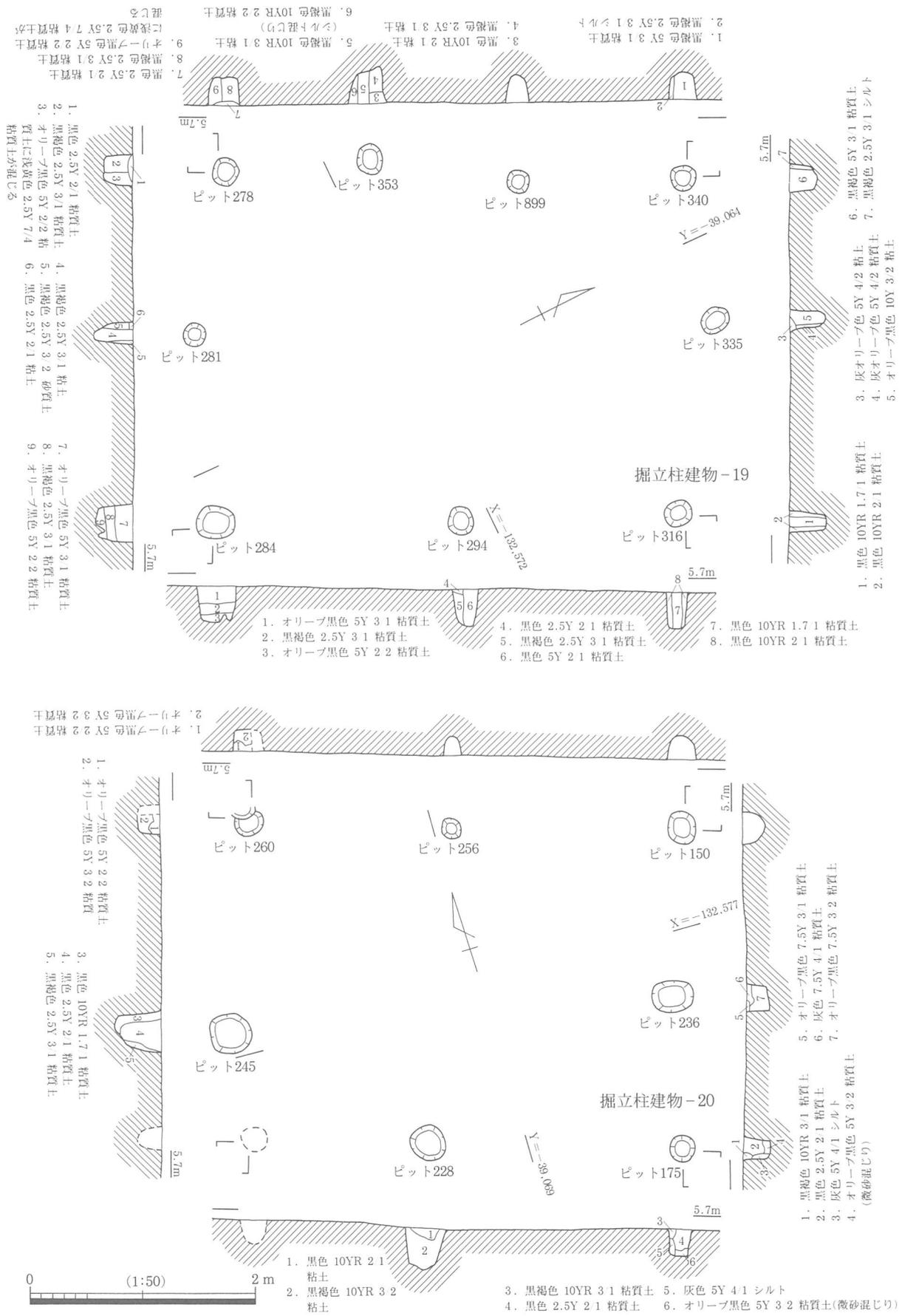
建物21（挿図17, 25、図版7-a b、8-c）

長方形の掘立柱建物である。建物はトレンチ北側中央にある。この建物は単独で建てられている。建物の規模は1間×2間である。建物の主軸方位はほぼ東西方向を示している。建物が位置する標高は5.60mから5.54mを測る。建物は北側に傾斜している斜面に建てられている。

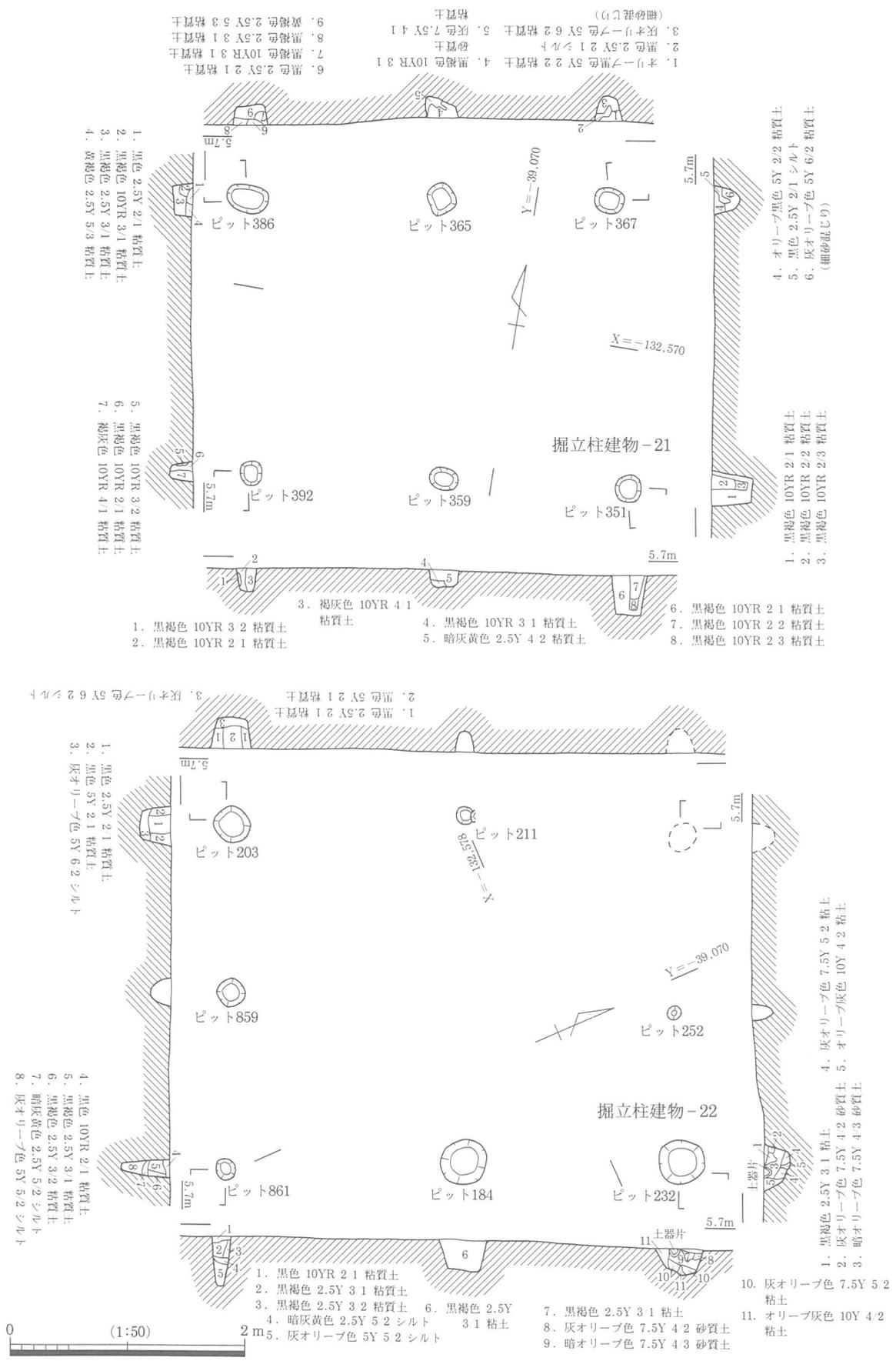
建物22（挿図17, 25、図版7-a b、9-b）



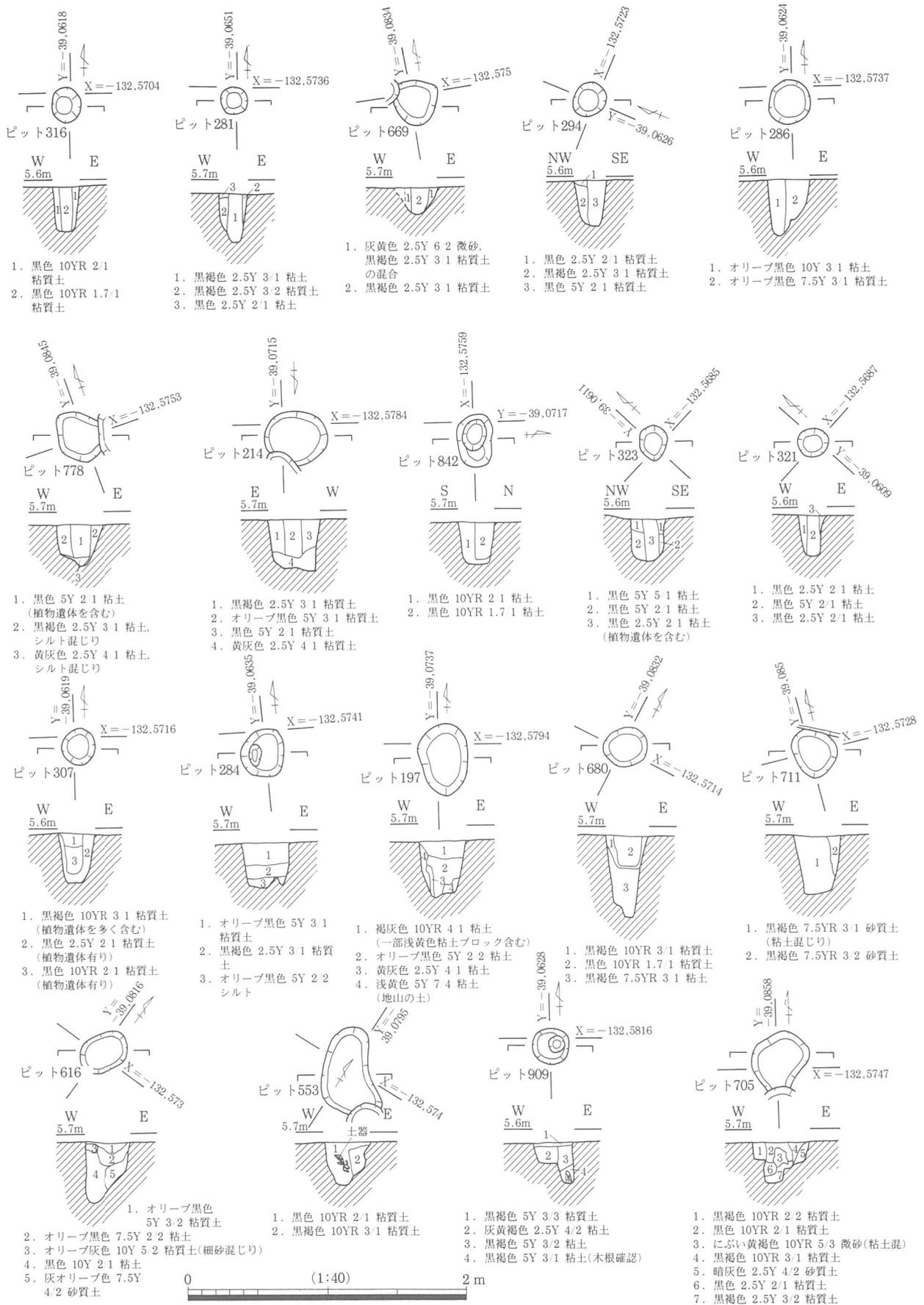
挿図23 2Aトレンチ IV層上面 弥生II 建物17、18 平面・断面図



挿図24 2Aトレンチ IV層上面 弥生II 建物19、20 平面・断面図



挿図25 2Aトレンチ IV層上面 弥生II 建物21、22 平面・断面図



挿図26 2Aトレンチ V、IV層上面 弥生I・II ピット 平面・断面図

長方形の掘立柱建物である。建物はトレンチ南側中央から南西に寄った所にある。建物の主軸方位は南北を示して、北側が少し東に振っている。建物の北西隅の柱痕は検出できなかった。建物は2間×2間の規模を示している。建物の立地する標高は5.62mから5.57mを測る。建物の東側に溝823があり、南側は土坑863で区切られている。建物は建物17と建物20と重複している。

6) ピット (挿図26)

2 A トレンチのピット群も 1 A トレンチ同様に 3 形態に分類した。

A タイプ^o は柱掘り方内に柱痕を残すものである。柱掘り方断面に柱痕跡が黒く残っている。柱部分の埋土は黒色粘土、黒褐色粘土が入っている。そして柱掘り方の深さは20cmから40cmを測る。深い柱掘り方がある。柱掘り方の直径は20cmから45cmを測る。大きな柱掘り方は認められない。柱掘り方断面の柱痕幅は10cmから20cm程度である。このことから検出した掘立柱建物の柱材は太くなくて、細い柱を使用していたことが推測できる。このような例を示すピットはピット214、ピット281、ピット286、ピット299、ピット307、ピット316、ピット321、ピット323、ピット380 (図版10-a)、ピット447 (図版9-c)、ピット474、ピット669、ピット778、ピット842などである。

B タイプは深い柱掘り方であるが柱痕は認められないもの。そして埋土には黒色粘土系が見られるピットである。このタイプは柱掘り方径の大きさが変わらず、大きな柱掘り方はAタイプ同様認められない。従ってAタイプ、Bタイプは1 A トレンチ、2 A トレンチの集落を構成する柱掘り方の一般的な大きさを示していると言えよう。このタイプはピット197、ピット284、ピット616、ピット680、ピット711である。

C タイプは柱掘り方内部で段を作って深くなるものである。埋土の色調は黒色か黒褐色粘土である。このタイプは深くなった部分に柱根を残すピットや土器片の集積を示すピットなどがある。このタイプはピット553、ピット705、ピット909、ピット1172などがある。

ピット553 (挿図27)

このピットは柱掘り方底部から土器が比較的まとまった形で出土している。この土器の出土状況はいろいろ考えられる。建物廃絶後に土器が柱穴を抜いた穴に意識的に入れられたものか、建物が廃絶して柱部分が腐食して穴があいた箇所に土器が偶然落ち込んだか、柱掘り方を掘り上げた段階で掘り方底部に土器が置かれたなど理由で出土したと考えられる。土器の出土状況は柱掘り方底部に土圧で壊れたような状態で出土している。

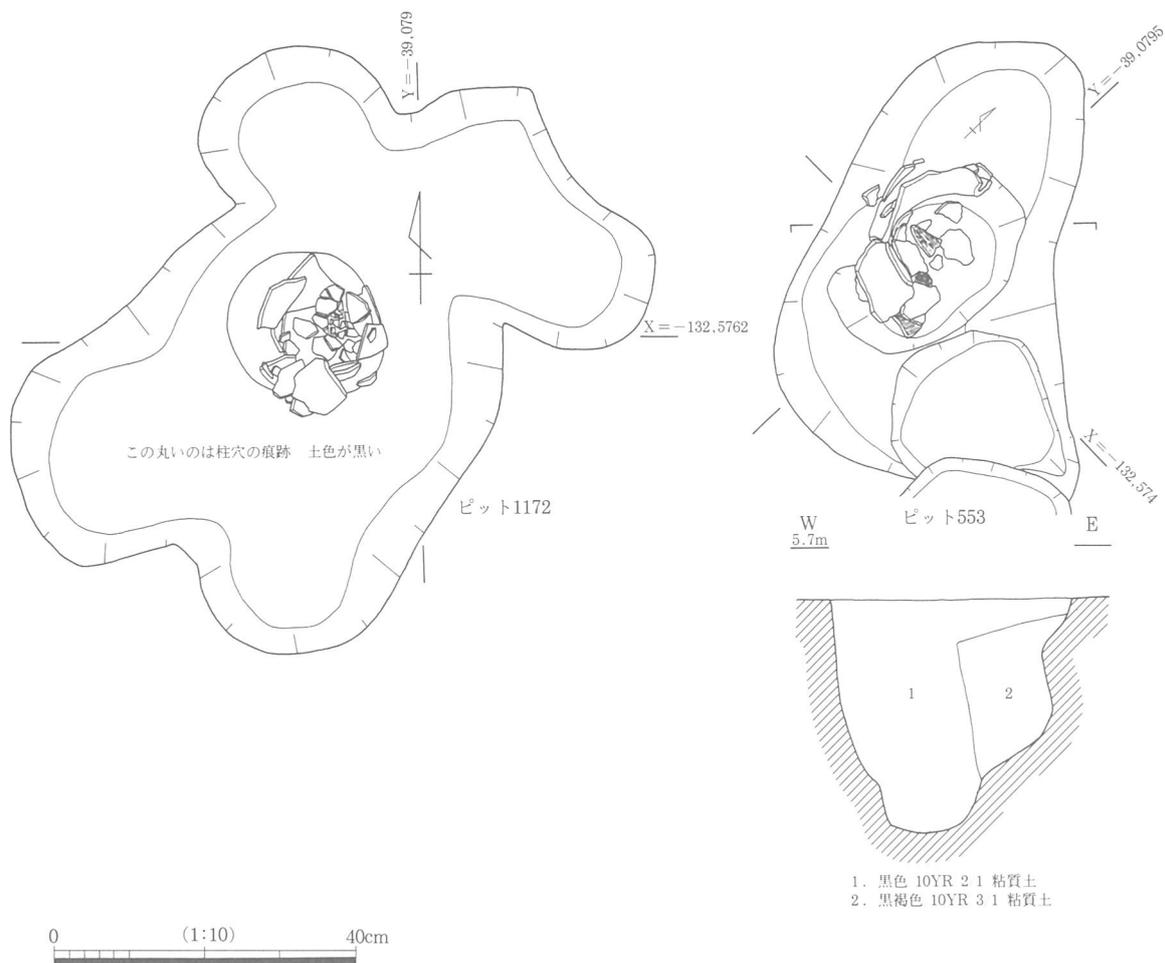
ピット1172 (挿図27、図版11-d e)

このピットの内部から土器片が出土している。土器は柱穴と思われる2段に窪んだ穴の内部から出土している。土器は土圧で壊れたような状態で割れ口が接合する形で出土した。柱根を埋める前に土器を入れて、その後に柱を建てたのか、あるいは柱を抜いた後に土器を入れたのかは分からない。周囲の大きな穴は柱掘り方が幾つか集合して大きな穴になっている。

ピット内部から出土している土器はピット1173にしてもピット553にしても柱痕中央部に底部を下にして出土している。この出土状況は柱痕が腐食した後に自然に土器が崩落したとして考えるには不自然である。柱掘り方を掘った直後に人為的に入れて、後で柱を立てたか、柱根を抜いた後から意識的に入れたのかであろう。いずれにしてもこれらの土器の出土状況には人為的な要素が認められよう。

7) 土坑

土坑は小型のものが多い。大型の土坑には風倒木痕が典型的な形で検出できなかった為に土坑の中に



挿図27 2 Aトレンチ V層上面 弥生I ピット内遺物出土状況 平面・断面図

含めたものがある。従ってこの場合は本来の土坑と形成過程が違って、異質な遺構として現れている。

V層上面 弥生Iの土坑

土坑588 (挿図16、29、図版5-a)

土坑はトレンチ西側中央付近に位置している。土坑の南側に建物15、北西側に建物10、建物11がある。遺構埋土は黒色粘質土、黒褐色粘質土、オリーブ黒色粘質土などである。遺構は隅丸形状で1辺のみ突出している。遺構は比較的深い。遺構は標高5.62m前後にある。

土坑622 (挿図16、29、図版5-a)

土坑はトレンチ西側中央付近に位置している。遺構の平面形は隅丸三角形形状である。遺構は深さが約45cmを測り深い形態を示す。遺構埋土は黒褐色粘質土、黒褐色粘土を示し、下層から層序を示して堆積している。遺構の標高は5.62m前後を測る。土坑は建物10、建物11と建物の東側部分で重複している。

土坑671 (挿図16、29、図版5-a)

土坑はトレンチ西側中央に位置している。土坑が埋没した後に幾つかのピットが埋土上面から掘り込まれて重複している。遺構の形態は各頂点が丸くなった二等辺三角形形状である。遺構の壁面は急な傾斜を示し底面は平坦である。遺構は標高5.62m前後に位置している。土坑は建物10、建物11の内側に位置して、建物9の北東隅の柱に切られている。

土坑692 (挿図16、29、図版5-a)

土坑はトレンチ北西隅に位置している。遺構は北東から南西方向に長い形状を示して東端は少し尖っている。そして直交方向は短く不定形を示す。土坑東側に建物13があり南側に土坑682がある。土坑の埋土は黒褐色粘質土、黒色粘土である。土坑の堆積層は下層から層序を示して堆積している。この遺構は標高5.60m付近の高さにある。

土坑781（挿図16, 28、図版5－a）

土坑はトレンチ西端中央付近に検出した。遺構の平面形は隅丸方形の部分と南西方向に延びる部分とからなる。この遺構は比較的深い遺構で深さ約40cmを測る。遺構の埋土は黒色粘質土、黒褐色粘質土などとともに、灰オリーブ粘質土がブロック状に混じっている。この土坑は人為的に埋められたと思われる。土坑は北東側に建物9、建物10、建物11が位置している。

土坑968（挿図16, 30、図版5－b、11－c）

土坑はトレンチ北東隅で検出した。遺構は一部分が調査範囲内に入る。土坑は壁面が急な傾斜を示して底部に至る。底部は平坦に近い。遺構の平面形は円形に近い形である。遺構の埋土は順次下層から層序を示して堆積している。遺構の埋土は黒色粘土、黒色炭化物層、焼土層などである。堆積層の中には植物を捨てたような層が認められる。土坑はトレンチの他の土坑の堆積層と違った土層を示している。

土坑1073（挿図16, 30、図版5－b）

土坑はトレンチ北東側に位置している。遺構の平面形状はややいびつな隅丸三角形である。遺構は隣接して風倒木痕1077がある。遺構の埋土は上層が黒褐色粘質土、下層が灰オリーブ色粘質土である。遺構は大きさに比較して浅い。土坑は検出時に風倒木痕と理解していた。土坑は調査すると灰オリーブ色の堆積層の下層はV層で、灰オリーブ色の下層に黒色粘質土が堆積していない。遺構は風倒木痕特有の堆積状況を示さない。従って遺構は土坑として取り扱った。この遺構の標高は5.32mから5.40mを測る。土坑は西側から低くなる斜面上にある。

土坑1077（挿図16, 31、図版5－b、10－e）

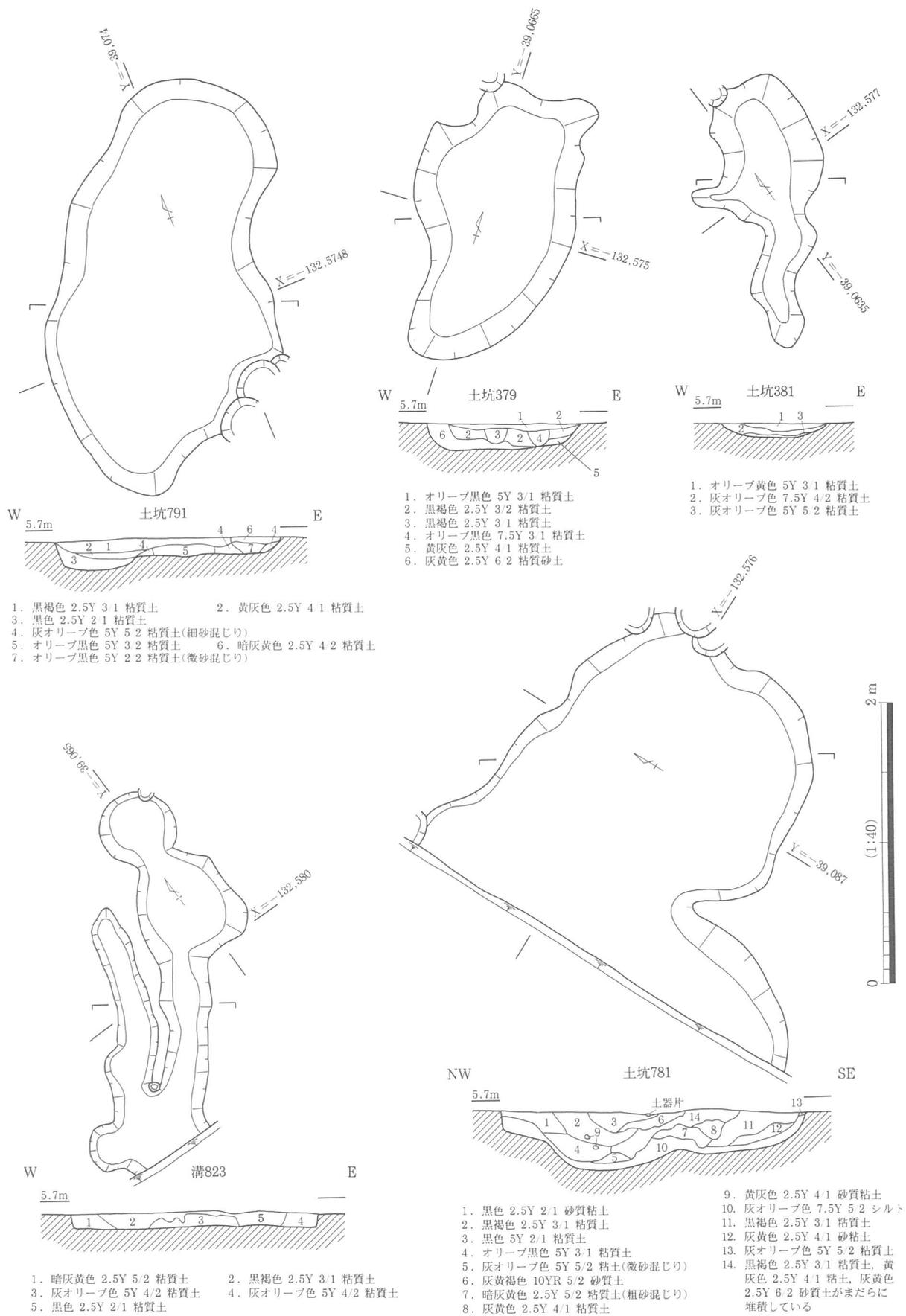
土坑はトレンチ北東側に検出した。遺構の中央上層は黒色粘質土が堆積する。遺構堆積層は下辺に薄い色調の埋土が見られる。風倒木痕は通常埋土の下層に黒色粘質土が堆積している。そして埋土上辺に薄い色調を示す堆積層が見られる。この遺構の埋土は平面的にドーナツ状の周囲に黒色粘土などの濃い色調が堆積している。ドーナツの中央部は薄い色調の埋土が堆積している。中央部の薄い色調の下層はV層が検出された。この薄い色調の堆積層下層に黒色粘土層が堆積していなかった。この遺構は発掘調査を行うと通常の風倒木痕と違った堆積状況を示した。従ってこの遺構は風倒木痕ではなくて土坑として取り扱った。遺構は南東側に建物7、建物8と重複している。遺構のある標高は5.45m前後を測る。

土坑1127（挿図16, 32、図版5－b）

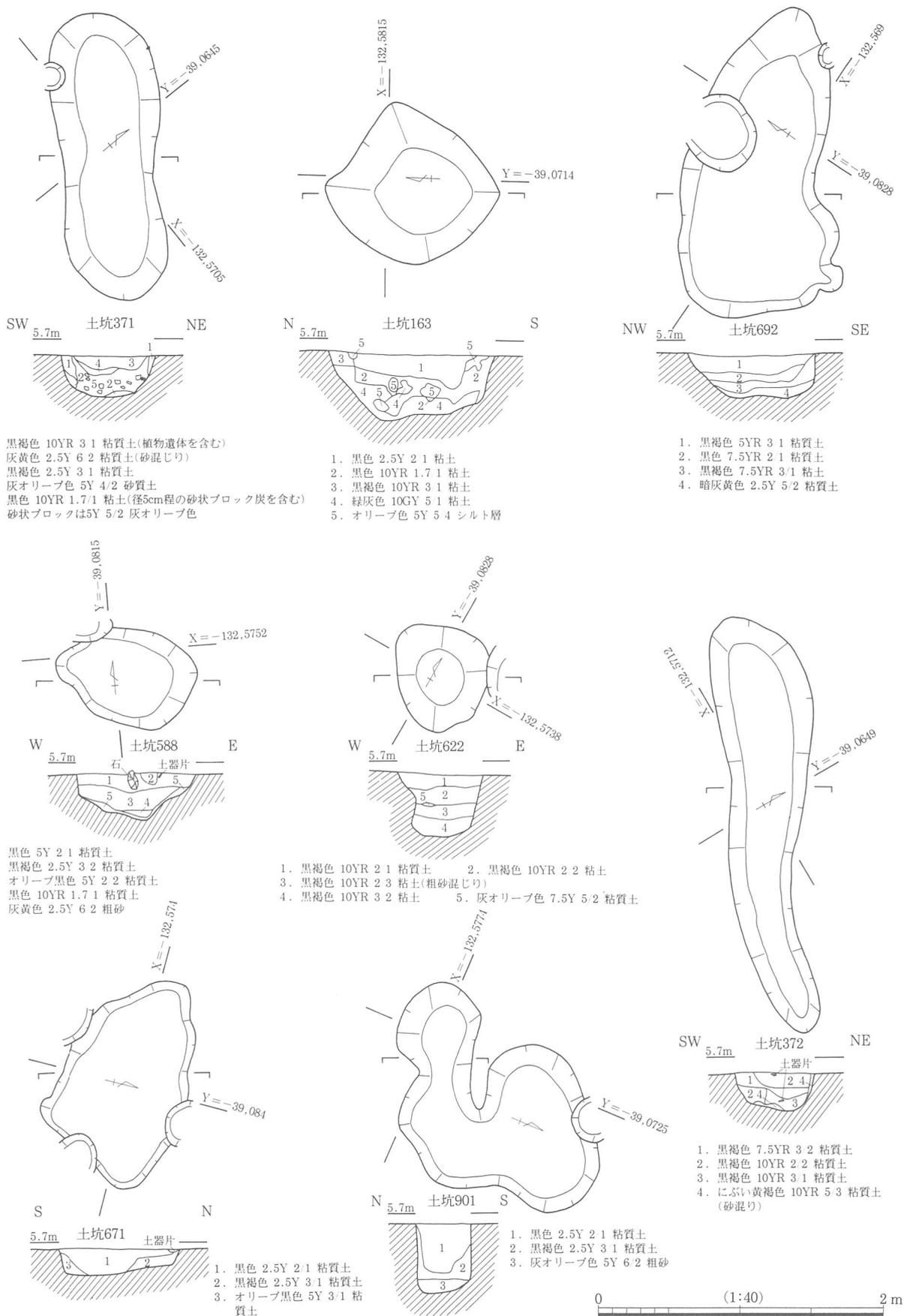
土坑はトレンチ中央南寄りに位置している。遺構の西側に建物12、建物14、建物16がある。遺構は埋没した上面に無数の柱痕が掘られている。遺構の西側には無数の柱掘り方が検出されている。遺構の埋土は上層に黒色粘質土、黒褐色粘質土、下層に黄灰色粘質土がある。遺構のある標高は5.51mから5.45mである。

土坑1171（挿図16、図版5－b）

土坑はトレンチ東端北寄りで検出した。遺構は東側が矢板に切られて半円形を示している。土坑は他の遺構と比較して深い遺構である。埋土は黒色粘土が大半を占める。土坑の西側に建物8、建物7がある。遺構のある標高は5.10mから5.21mを示す。土坑は今回調査した遺構の中で最も大量の土器を出土



挿図28 2Aトレンチ V、IV層上面 弥生I・II 土坑 溝 平面・断面図



挿図29 2Aトレンチ V、IV層上面 弥生I・II 土坑 平面・断面図

した。また木器や木器の未製品も出土した。

IV層上面 弥生IIの土坑

土坑163 (挿図17、29、図版7-a b、10-f)

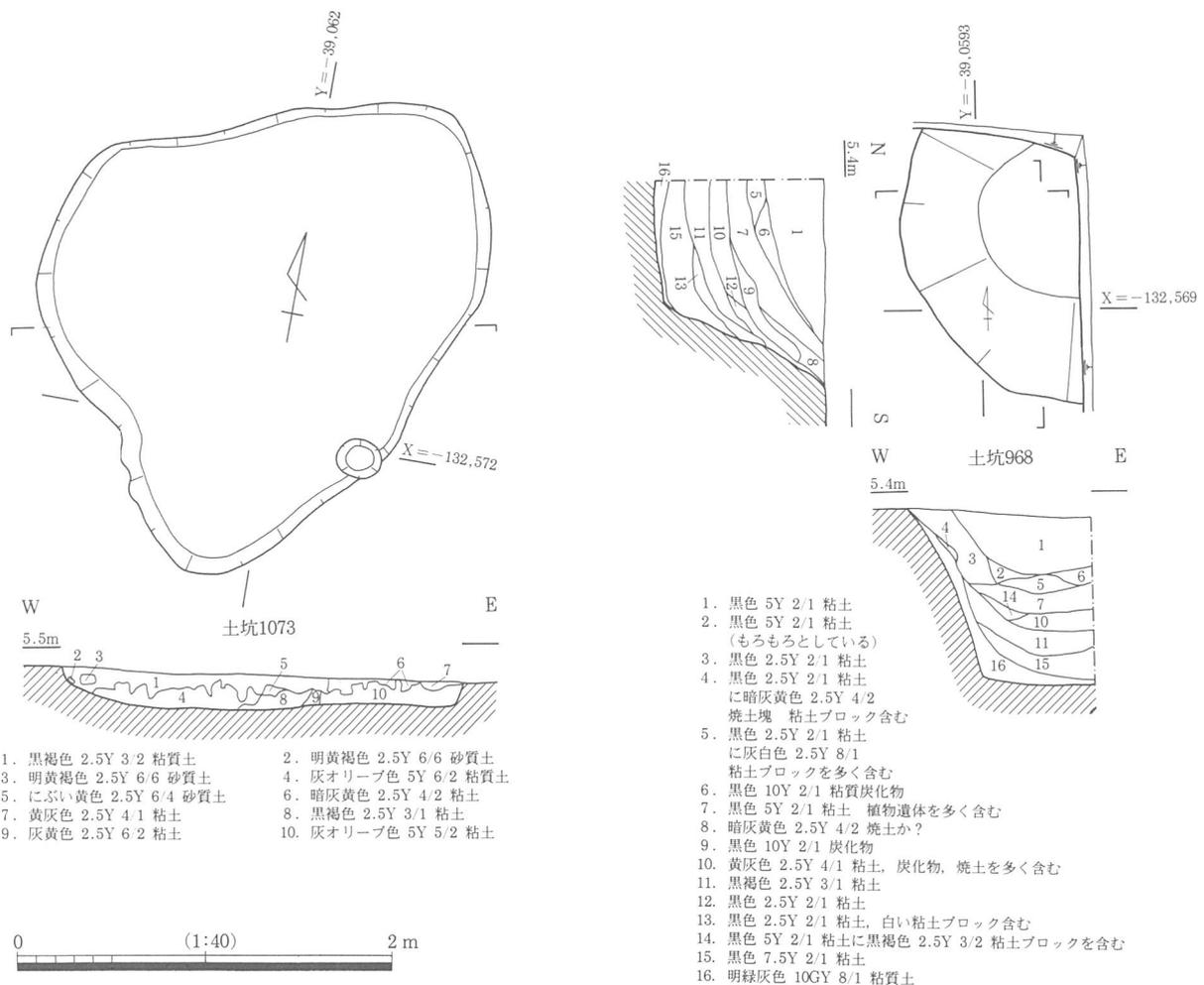
土坑はトレンチ南側中央に位置している。遺構は南側が矢板に切られている。遺構は調査範囲内に円形の深い部分がある。遺構の円形部分は壁面が急な傾斜を示して底部に至る。遺構埋土は黒色粘土、黒褐色粘土である。遺構の埋土中にオリーブ色シルトがブロック状に入っている。土坑の北側から北西側にかけて建物20、建物22がある。

土坑371 (挿図17、29、図版7-a b、10-b)

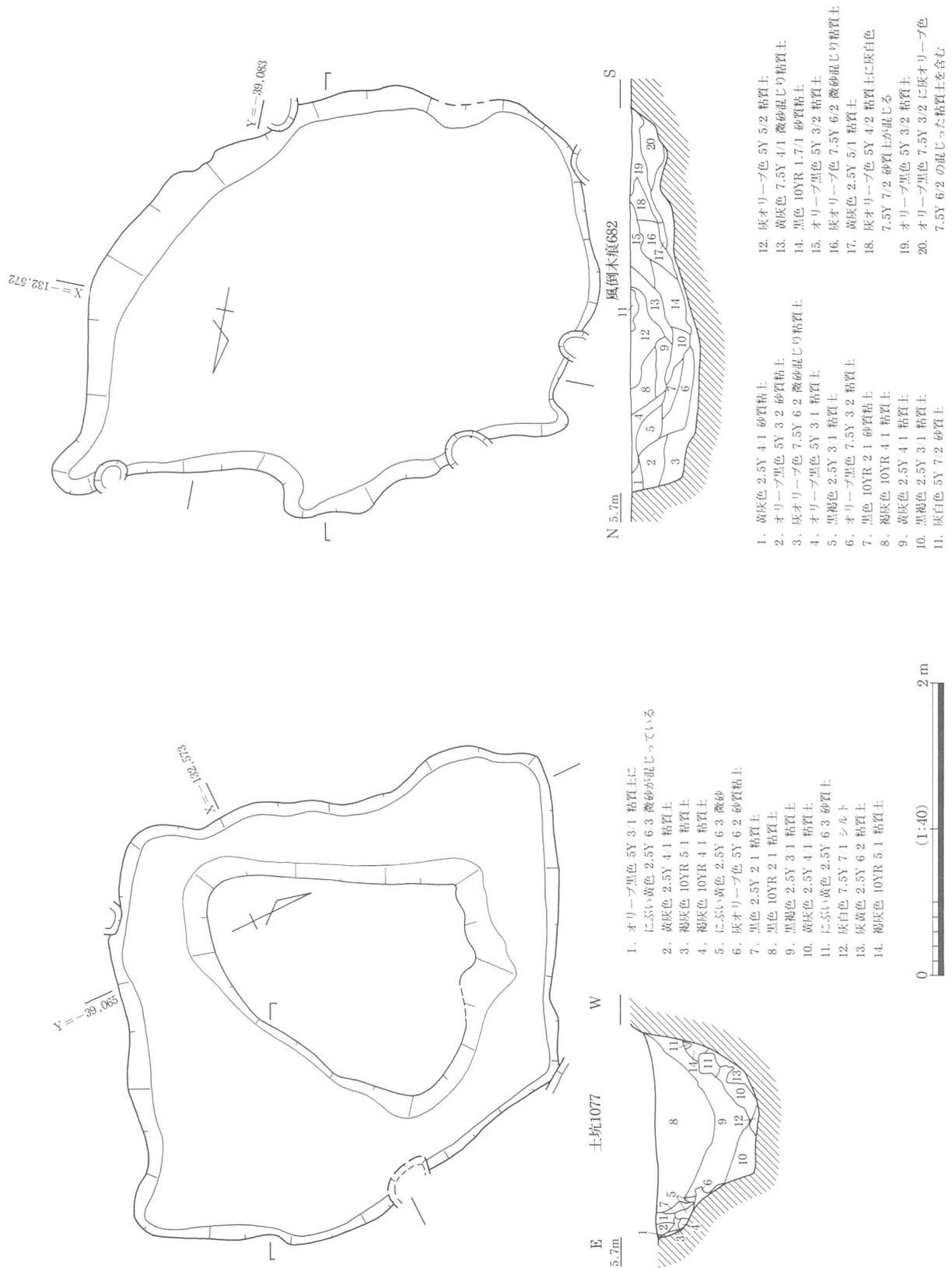
土坑はトレンチ北東側に位置している。遺構の南西側によく似た長い土坑372がある。土坑の形状は細長く両端が丸くなっている。遺構の埋土は黒褐色粘質土、黒色粘土である。埋土中に幾つかのブロック層が入り混じっている。土坑の埋土は色調が薄い層が堆積して人為的に埋め立てられたと考えられる。遺構がある標高は5.56mから5.58mを測る。土坑371の長軸方位と建物12の主軸方位がほぼ直交している。土坑は建物19の内側に大部分が入る。

土坑372 (挿図7、29、図版7-a b、10-d)

土坑はトレンチ北東側で検出した。遺構の形状は細長く少し屈曲している。土坑は土坑371に隣接している。土坑は建物19と重複している。土坑の長辺の方向と建物の主軸方位はほぼ直交している。遺構



挿図30 2 A トレンチ V、IV層上面 弥生 I・II 土坑 平面・断面図

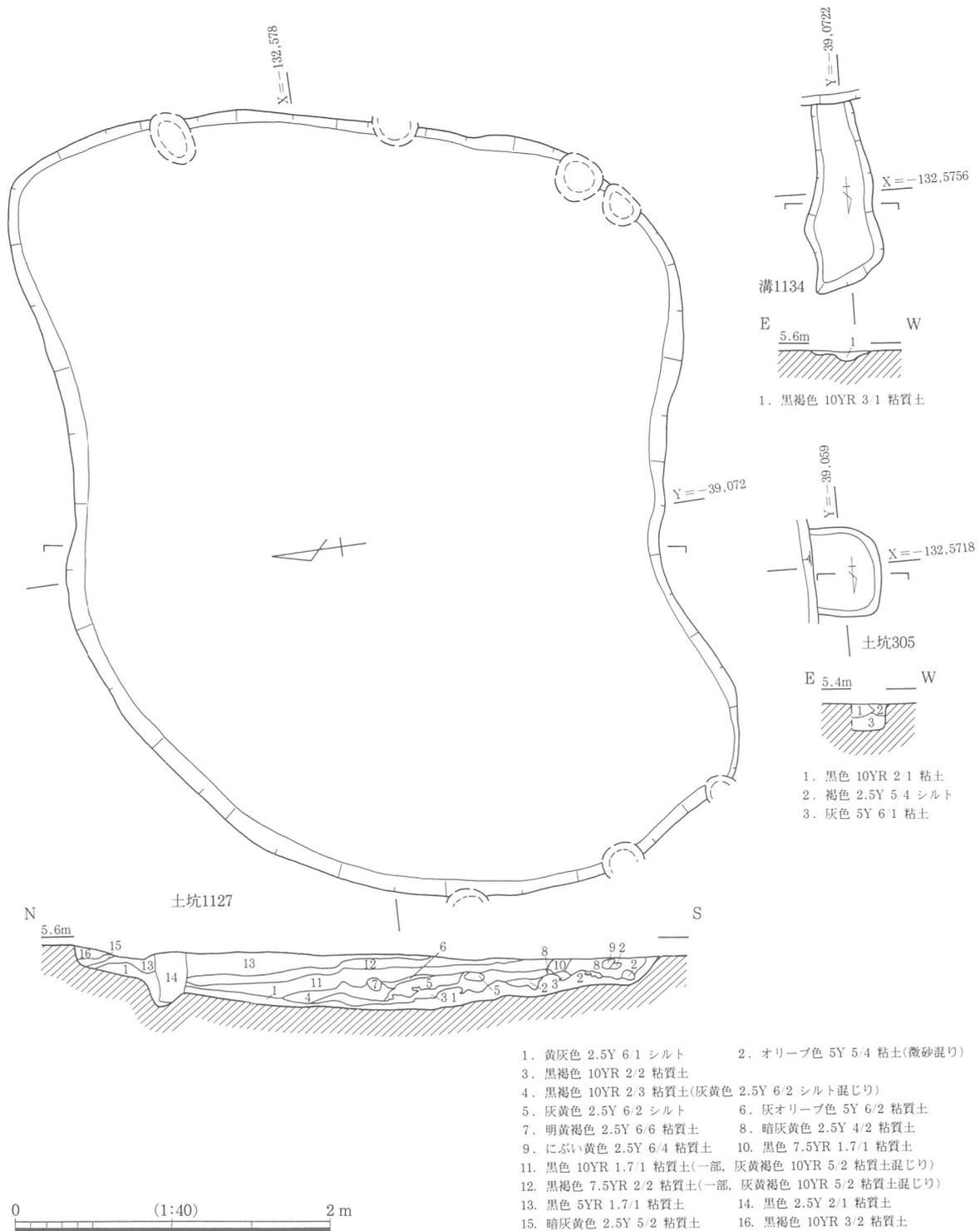


挿図31 2Aトレンチ V層上面 弥生I 土坑 風倒木痕 平面・断面図

の埋土は黒褐色粘質土である。遺構は壁面が急な斜面を作り、底部に曲線を描いて至る。遺構の底部は丸い。遺構の標高は約5.58mを測る。

土坑379 (挿図17, 28、図版7-a b、11-b)

土坑はトレンチ東側中央付近に位置している。遺構の形状は南側が長円形を示すが北側は不定形である。遺構の深さは最も深い箇所まで20cm前後を測る。遺構の北東側に溝824がある。遺構の南西側に建物



挿図32 2 A トレンチ V層上面 弥生 I・II 土坑 溝 平面・断面図

19がある。遺構の埋土上層にオリブ黒色、中層に黒褐色粘質土が堆積する。

土坑381（挿図17、28、図版7－a b）

土坑はトレンチ中央やや南よりに位置している。遺構の深さは約10cmである。遺構の南西側に溝823がある。遺構の北側を溝824が南東から北西方向に横切っている。遺構の形状は不定形である。

土坑791（挿図10、28、図版7－a b）

土坑はトレンチ中央付近にある。遺構の深さは約20cmである。土坑の南東側に建物21がある。土坑は下層からピットが7個検出された。土坑は一部分の深い箇所がある。深い部分の埋土は上層が黒褐色粘質土、中層が黄灰色粘質土、下層が黒色粘土である。

土坑900 901（挿図17、29、図版7－a b）

土坑はトレンチ南側中央付近にある。遺構の形状は不定形である。遺構は二つの土坑に分かれているが、埋土上層で2つの遺構として区別ができなかったので、2つの遺構が繋がった形で調査した。遺構の埋土は土坑901が黒色粘質土、黒褐色粘質土である。遺構の壁面は急な傾斜で底部に至る。土坑は深い。遺構の標高は5.60mから5.62mを測る。土坑は建物17の内側に入って、中央北側に位置している。また土坑は建物22の西側に接している。

8) 溝

このトレンチは溝を数条検出した。V層上面弥生Iで検出した溝の数は少ない。弥生Iは溝が1条検出された。弥生IIでは多くの溝を検出した。溝は南東から北西方向かあるいは直交した方向を示すのが特徴である。

V層上面 弥生Iの溝

溝573（挿図16、図版5－a）

遺構はトレンチやや南西寄りに位置している。溝はL字状を示す。溝は南北方向に延びる長い部分と東側に延びる短い部分からなる。溝が埋没した上面にピットが幾つか掘られている。溝の西側に建物12、建物14があり重複している。溝の長軸方向と建物14の主軸方向は直交している。溝の標高は5.60mから5.45mを測る。溝は南に向かって傾斜した斜面に掘られている。

IV層上面 弥生IIの溝

溝377（挿図17、図版7－a b）

溝はトレンチ中央西側に位置している。溝は溝824の西側の延長上に方向を同じくして掘られている。溝の幅は狭い。溝の長軸方向は建物20の主軸方位とほぼ同じである。溝の標高5.59mから5.61mを測る。溝は平らな所に掘られている。

溝378（挿図17、図版7－a b）

溝はトレンチ南東隅にあって、北東から南西方向にほぼ直線状に掘られている。この溝は北端で溝824につながっている。幅が狭い溝である。この溝の方向と建物18の主軸方向は似ている。溝の標高は5.55mから5.61mを測る。

溝823（挿図17、28、図版7－a b）

溝はトレンチ南西側に位置している。溝は南西側から北東方向に延びて、途中から2本に枝分かれしている。溝は北を上に見て右側に枝分かれした溝の中央部付近が大きく窪んでいる。溝の埋土は黒褐色粘質土か黒色粘質土を示している。溝の深さは大きく窪んだ深い部分以外は約10cmを測る。溝の東側の建物18、西側の建物20、建物22が主軸方位か直交した方位が溝の方向と同じくしている。溝の標高は

5.57mから5.60mを測る。溝823、土坑381、溝374が一続きの溝であった可能性がある。3つの遺構が集落を南西方向から北東方向に区分していた可能性がある。

溝824（挿図17、図版7－a b）

溝はトレンチ東側の中央に近い位置にある。溝は南東方向から北西方向を示す。溝は土坑379付近で一旦途切れる。溝は土坑379より西側に続いているが西端は分からなかった。溝はトレンチ南東隅付近で溝378と繋がっているのか切り合いを持つのか確認できなかった。溝の方向は溝823の方向と直交している。溝は南東から北西方向に集落を区切っていた可能性がある。溝の標高は5.53mから5.61mを測る。溝は東側に傾斜した斜面に掘られている。

9) 風倒木痕

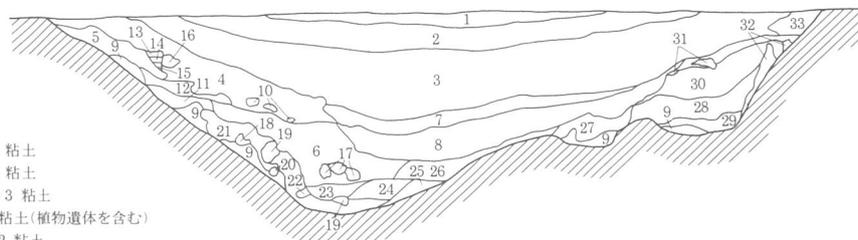
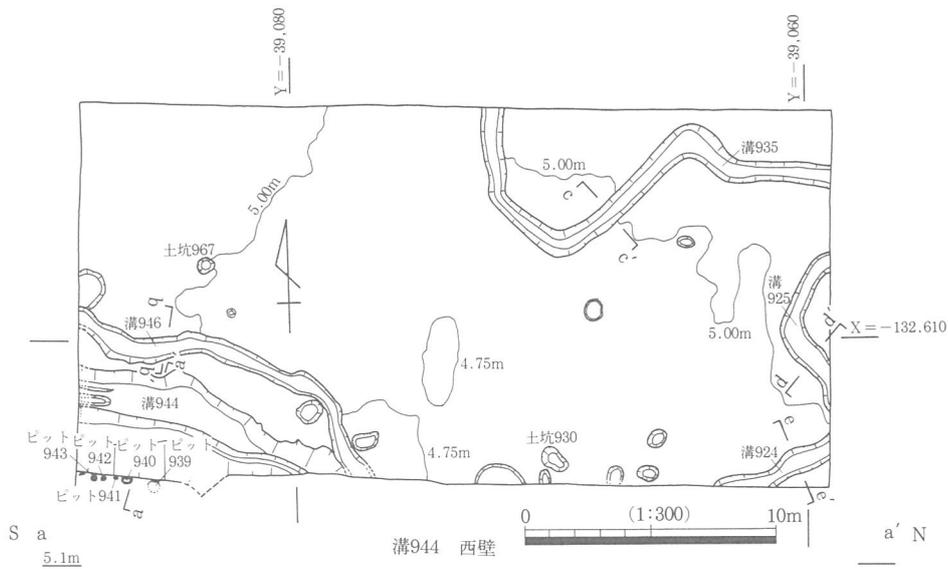
風倒木痕はこの2 A トレンチでそれらしきものが幾つか検出されている。風倒木痕は断面観察から確実に断定できる資料は限られる。風倒木痕は大木が倒れた当初木の根にV層の土砂が付着して抱き上げている。大木が倒れた跡に大きな穴が開いている。大木の根に付着して抱き上げられたV層と基盤のV層が倒れた方向で接している。抱き上げられていたV層は倒れた大木が腐食すると再び穴の中に落下する。抱き上げられていたV層が再び落下するまでの間に周辺の腐食土層が穴の中に堆積する。抱き上げられていたV層は倒れた大木の根に付着していた状態で落下するので地表面と堆積層は90度方向が違った堆積層となる。大木が倒れた穴は腐植土層が堆積しているの、落下したV層は元の地表面より盛り上がった状態で残る。風倒木痕は平面的に黒色の堆積層が長円形のドーナツ状に検出される。ドーナツの中央は抱き上げられたV層が堆積している。ドーナツの中央は有機物を含まない土層が多い。そして黒色のドーナツ状堆積層は一方が幅広くて、反対側は幅が狭い。大木は幅が狭い方向に倒れている。風倒木痕の断面は中央のV層は浮いた状態で堆積して、下層に黒色の堆積層が堆積していることが多い。しかし現実はこのような典型的な形で検出されない場合も多い。風倒木痕か土坑の区別ができないので、風倒木痕と断定できなかったものは土坑か落込に含めている。風倒木痕の中には、大木が倒れて抱き抱えられたV層が持ち上げられた時に、大きくひび割れて隙間だらけの状況を作り出している例がある。風倒木痕のひび割れたV層の隙間に腐食土層が堆積している。

風倒木痕682（挿図16、31、図版5－b）

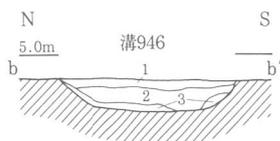
風倒木痕はトレンチ北東隅近くに位置する。風倒木痕はV層上面弥生Iで検出した。風倒木痕は大きな窪みを作る。風倒木痕の南側に建物10、建物11がある。風倒木痕の埋土は下層が黒色粘質土から黒褐色粘質土である。上層の中央部の埋土は灰オリーブ色の薄い色調である。断面は上層中央を下層と周囲を包むように黒色粘質土が堆積している。

(4) 3 A トレンチ（挿図33、図版12－a b c d）

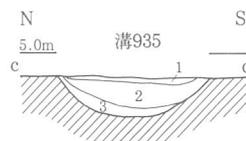
3 A トレンチは2 A トレンチの約20m南側位置している。3 A トレンチは検出した遺構の数が非常に少ない。遺構はV層上面、弥生Iで検出された。検出された遺構は溝が5条、土坑が数基である。IV層の厚さは0～4 cmを測る。IV層は堆積していない箇所もある。IV層上面は遺構が検出できなかった。V層上面の標高の最も高い箇所は5.00mを測り、低い箇所は4.70mを測る。2 A トレンチの高い地点から3 A トレンチの最も高い地点での高さの差は約60cm、3 A トレンチの最も低い中央部付近と比較すると約90cmも低くなる。3 A トレンチは全体的に低い。トレンチは大半が埋没谷の中に位置している。埋没谷は挿図7に示すように北西方向から3 A トレンチ内に入って南東方向に出ている。溝幅は約20mを測



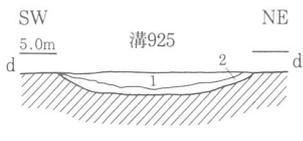
- | | | |
|------------------------------|-----------------------------------|------------------------------|
| 1. 黒褐色 7.5YR 3 1 粘土 | 16. 浅黄色 5Y 7 3 砂質土 | 26. 黒褐色 10YR 2 1 粘土(植物遺体を含む) |
| 2. 黒褐色 7.5YR 2 2 粘土 | 17. 浅黄色 5Y 8 3 粘土 | 27. 緑黒色 10G 2 1 砂質土(粘土混じり) |
| 3. 極暗褐色 7.5YR 2 3 粘土 | 18. 明緑灰色 10G 7 1 粘土 | 28. 褐灰色 10YR 5 1 細砂 |
| 4. 褐灰色 10YR 4 1 粘土(植物遺体を含む) | 19. 灰オリーブ色 5Y 6 2 粘質土(細砂混じりブロック土) | 29. 褐灰色 10YR 4 1 砂質土 |
| 5. 灰黄褐色 10YR 5 2 粘土 | 20. 暗オリーブ色 5Y 4 3 粘土(ブロック土) | 30. 黄灰色 2.5Y 4 1 砂質土(粘土混じり) |
| 6. 暗灰黄色 2.5Y 4 2 粘土(植物遺体を含む) | 21. 灰オリーブ色 7.5Y 5 2 粘質土(炭混じり) | 31. 黒褐色 2.5Y 3 1 粘土 |
| 7. 暗オリーブ褐色 2.5Y 3 2 粘土 | 22. 灰色 10Y 6 1 粘土 | 32. 灰白色 2.5Y 8 1 粘質土 |
| 8. 黒色 2.5Y 2 1 粘土(植物遺体を含む) | 23. オリーブ黒色 5Y 3 1 粘土(植物遺体を含む) | 33. 黒色 7.5Y 2 1 砂質土 |
| 9. 明緑灰色 5G 7 1 粘土 | 24. オリーブ黒色 5Y 3 2 粘土(植物遺体を含む) | |
| 10. 灰褐色 5YR 4 2 粘土 | 25. 黒褐色 2.5Y 3 1 粘土(細砂を含む) | |
| 11. 灰白色 10Y 7 1 粘質土(細砂混じり) | | |
| 12. オリーブ褐色 2.5Y 4 3 粘土(炭混じり) | | |
| 13. にぶい黄色 2.5Y 6 3 粘質土 | | |
| 14. 暗灰黄色 2.5Y 5 2 砂質土(微砂混じり) | | |
| 15. 浅黄色 2.5Y 7 4 砂質土 | | |



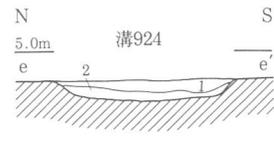
1. 黒色 2.5Y 2 1 粘質土
2. 黒褐色 10YR 3 1 粘土
3. 灰色 5Y 5 1 砂質粘土



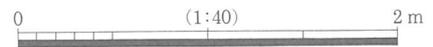
1. 黄灰色 2.5Y 5 1 砂質土
2. 黄灰色 2.5Y 4 1 砂質土(粘土混)
3. 黒褐色 2.5Y 3 1 粘質土



1. オリーブ黒色 7.5Y 2 2 粘土
2. オリーブ黒色 10Y 3 1 粘土



1. オリーブ黒色 10Y 3 1 粘土
2. 暗オリーブ灰色 2.5GY 3 1 粘土



挿図33 3 A トレンチ V層上面 弥生 I 溝 平面・断面図

り、深さは約1.3mである。谷が埋没した上面に蛇行した溝924、溝925、溝935が掘られている。これらの溝は一続きの溝と推定される。大きな溝944はトレンチ南西隅から検出した。2 A トレンチと3 A トレンチの遺構密度の違いは遺物出土量にも反映している。2 A トレンチの遺物出土量はコンテナ13杯分であるが、3 A トレンチの遺物出土量はコンテナ4杯分である。また実測した遺物量も大きな違いがある。集落でない区域は集落域と遺物出土量を比較しても大きな違いがある。

1) 溝

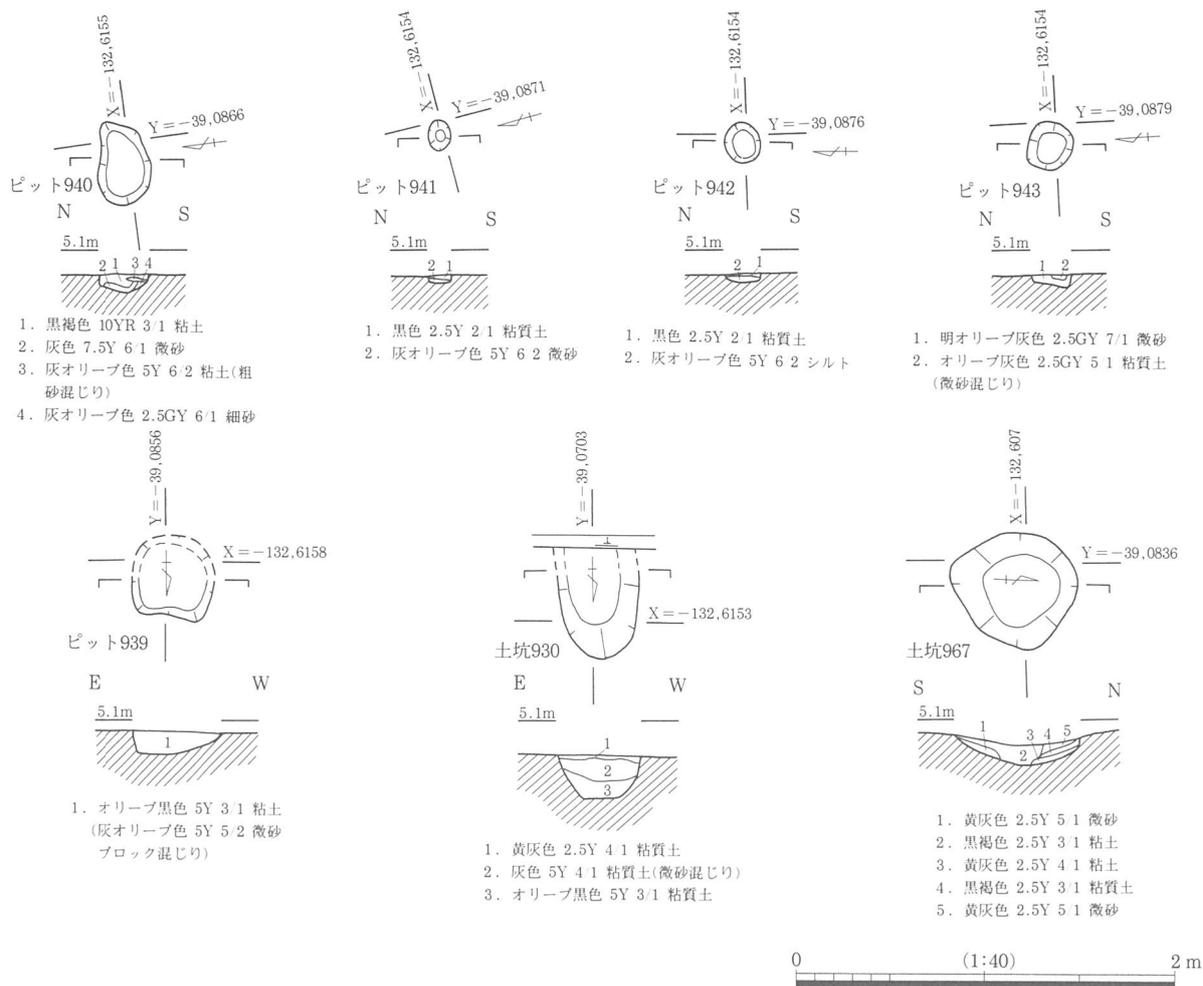
このトレンチには溝が多く検出されている。他のトレンチには見られない状況である。特に幅広い溝944や屈曲した溝935などがある。

溝944（挿図33、図版12－c d）

溝はトレンチ南西隅に検出した。遺構はV層上面で検出した。溝は4 A トレンチで検出した溝1653の次に大きい。溝は北西から南東方向に少し南側へ屈曲している。溝はトレンチ南西隅のV層が小高くなって埋没谷に沿った位置に掘られている。溝944の北東側に隣接して溝946が平行に掘られている。溝946は溝944が埋没した後に掘られている。溝の南側は北岸より高い。これは溝の自然地形が南西側から北東に向いて埋没谷に傾斜して落ち込んでいる緩やかな傾斜面に溝944は掘られているからである。溝の北岸の標高は5.00mから4.80mを測り、南岸は4.98mから4.96mを測る。溝底の標高は西端が3.92mを測り南端では3.87mを測る。水は南東方向に流れていたようだ。

溝944の埋土は上層、下層、最下層の3層に分けられる（図版13－c）。上層堆積層の上部に黒褐色粘土が堆積し、下部に暗褐色粘土が堆積する。上層堆積層は植物遺体を多く含んでいる。上層堆積層は溝が湿地状に堆積したことを示している。下層堆積層の上部は褐灰色粘土、暗灰黄色粘土、灰オリーブ粘土などが堆積している。これらの堆積層は有機物を多量に含んでいる。溝の底に近い下層堆積層は褐灰色粘土や明緑灰色粘土、浅黄色粘土などの小さなブロックを相当数含んでいる。溝西側端の北部側には2列の小さな窪みが溝と平行に掘られている。小さな窪みがある部分は最下層の堆積層である。最下層は黄灰色砂質土、褐灰色細砂、緑黄色砂質土などが堆積している。溝の上層、下層の堆積層と違って砂層が多く堆積している（図版13－c）。溝断面では最下層の堆積層が下層の堆積層に切られている。溝西端の北部側にある2つの窪みは最初に掘削された溝の底部と推測される。溝は幅も広くなく、深さも70cm前後を測る規模であったようだ。溝944と比較すると一回り小さな溝である。溝944は掘り直し作業が行われて深さ約1.1m溝幅約4.1mを測る大きな溝に生まれ変わったと推測される。溝の断面形状は溝の西端と南端で違っている。溝の西端は過去に掘られた古い溝が溝の底部北側に部分的に残存している。溝南端は新しい溝が古い溝を掘り尽くして古い姿を残していない（図版13－b）。溝西端の断面形状は北岸から急な傾斜を示して溝の底部の2つの窪みで凹凸を示す。ここから南側の底へ急な角度で落ち込んでいる。溝は底部幅が狭い。溝は南壁面が急な傾斜を示している。溝は基本的にV字形である。新旧の2つのV字溝が重複しているので一見違った形に見える。最初に掘られた溝は砂層を多く含んだ流水堆積層が認められる。最初の溝は水が流れていた。掘り直された溝は最下層に砂層が僅かに堆積している以外は有機物を多く含んだ粘土層が堆積している。新しい溝は滞水していた状況を示している。溝は滞水状態で最終的に埋没していった。溝の埋土の花粉・珪藻分析は深さがあって流れの少ない淀んだ滞水状況にあったことを報告している（付章参照）。

溝の南岸にピットが幾つか並んでいた。溝は南側の埋土中の底部付近の堆積層が黄褐色のブロックを幾つか含んでいた。これらの状況から調査当初この溝944は環濠で南側の環濠の内側にそれに伴う柵列が立てられて、柵の内側に土塁が盛り上げられていたと推測した。溝の南岸のピットが柵列の跡と考え、溝の埋土中のブロック層は土塁が崩壊した土砂が南側から崩れ落ちて堆積したと推測した。しかし後に4 A トレンチを調査し、1997年度にB地区を調査すると、溝944の続きと思われる溝が2つのトレンチでそれぞれ検出された。溝の続きは3 A トレンチで円弧を描いていた延長上に環状に続くのではなくて、蛇行して東へ流れることが判明した。溝の南岸に沿って並んでいた柱穴は3 A トレンチしか検出できなかった。4 A トレンチで溝944の続きと思われる溝1652の南岸を検出したにも関わらず、溝の南側は土塁の高まりやその痕跡が存在しなかった。通常環濠の内側は厚い包含層が幾重にも堆積し、包含層の各層を切り込むピット群が数多く検出される。また環濠内側の包含層は莫大な量の土器を出土す



挿図34 3 A トレンチ V層上面 弥生I ピット 土坑 平面・断面図

る。しかし溝944とその続きと思われる溝の周辺の環境は全く違っている。溝の周囲は先に述べた柵列、土塁、厚い包含層、多量の土器などを検出しなかった。溝944はその周辺の様相から判断して環濠ではなく、蛇行した幅が広い溝である。

溝946 (挿図33、図版12-c d)

溝はトレンチ南西側に検出される。溝944の北東側に沿ってほぼ平行して掘られている。溝946はトレンチ南端で溝944が埋没した後に掘られている。2つの溝は機能した時期に差がある。溝は少し蛇行しつつ西側から南側へ屈曲しながら流れている。溝は埋没谷が窪んで北東側に傾斜した斜面に平行して掘られている。溝の堆積層は上層が黒色粘土、中層が黒褐色粘質土である。溝の両岸の標高は5.02mから4.63mを測る。

溝924、溝925、溝935 (挿図33、図版12-a b)

3条の溝はトレンチ東側にある。3条の溝は奇妙な屈曲を示している。溝の屈曲角度は約120度の鈍角を示す。溝935はトレンチの北側に位置する。溝925はトレンチ東側に部分的に見えている。溝924はトレンチ南東側に位置している。溝935は北から入り東側へ屈曲しながら出る。溝925は東側から調査区内に入り屈曲して東側に出ている。溝924は東側から調査区内に入ってトレンチ南側から出ている。3条の溝は埋土が非常に似ている事と、約120度の鈍角の屈曲が共通している。3条の溝は遺構番号は違っているが1条の連続した溝と考えられる。溝は溝935、溝925、溝924の順に流れていたようだ。溝の埋

土はオリブ黒色粘土や黒褐色粘質土、黄灰色砂質土などである。溝の壁面は比較的急な傾斜を示して底部へ曲線を描いて至る。溝の標高は溝935の大半が5.05mを測る。低い部分は4.95mを測る。溝925の標高は約5.05mを測る。溝924は標高約4.95mである。

2) ピット (挿図34、図版12-a、c)

このトレンチで検出したピットは1種類である。埋土が黒色を示すものである。埋土が黒色を示すピットにピット939、ピット940、ピット941、ピット942、ピット943がある。これらのピットは溝944の南岸に沿って検出している (図版12-c)。

3 A トレンチで検出したピットは組み合わせても建物に復元できなかった。

3) 土坑 (挿図34、図版12-a)

このトレンチで検出した土坑は数少なく小型のものが多い。トレンチで検出した土坑は3種類に分類できた。Aタイプの土坑は埋土も黒色粘土か黒褐色粘土を示している。Bタイプの土坑はオリブ黒色を示している。Cタイプの土坑は暗灰色粘質土を示している。土坑は遺物がほとんど出土しない。

Aタイプには土坑927、土坑928、土坑934、土坑967がある。

Bタイプには土坑932、土坑947がある。

Cタイプには土坑929、土坑930、土坑931、土坑933、土坑938、土坑948がある。

(5) 4 A トレンチ (挿図35、図版14-a c)

トレンチはA地区の中で最も南側に位置している。V層上面の標高は5.30mから4.95mを測る。V層上面弥生Iは遺構が検出された。IV層は厚さが非常に薄い。IV層は全く堆積しない箇所がある。また堆積したIV層の厚さは数cm以内である。IV層上面は遺構が全く認められなかった。検出した遺構は溝が2条と土坑やピット、風倒木痕である。溝は大きな溝で幅数mに達する。溝から出土した遺物は非常に少ない。トレンチから出土した遺物量はコンテナ1.5箱分である。遺物出土量は3 A トレンチと比較しても減少している。集落域から離れるに従って土器の出土量は減少している。

1) 溝

溝1652 (挿図35、図版14-a b、15-c)

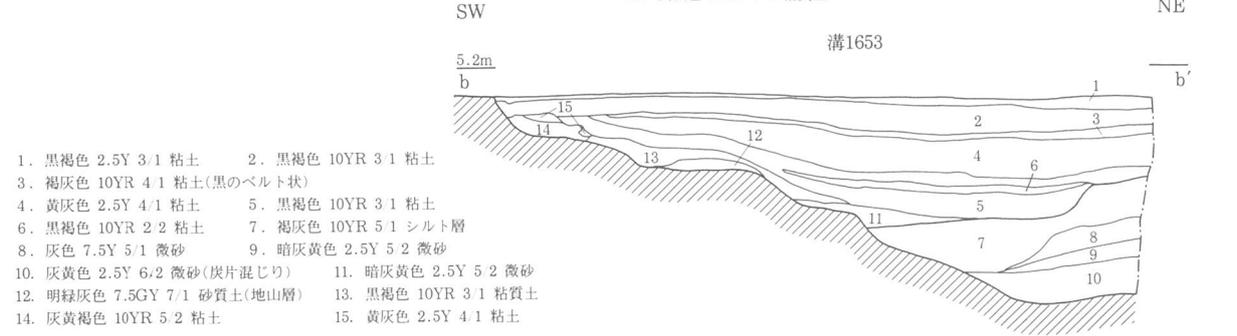
溝はトレンチ北東隅で検出した。溝はトレンチ北東端に溝幅約1.5m分検出できた。溝の埋土は黒色粘土である。溝は南側埋土の中に黄灰色粘土ブロックを幾つか検出した。溝は3 A トレンチの溝944に埋土、色調、土質が似ている。溝1652は溝944と連続した溝と考えられる。溝944は3 A トレンチから南向きに流れ出た後、一旦東に向きを変えて4 A トレンチ中央付近で溝1652として調査区域内に入る。溝2041は2 B トレンチ北西隅に検出している。溝2041の埋土は黒色粘土を示す。溝1652は溝2041に続くと考えられる。溝1652は溝1653を切っている。溝1652は溝1653が埋没した後に掘られている。溝1652は南側の岸に柱穴がなかった。

溝1653 (挿図35、図版14-a c、15-a)

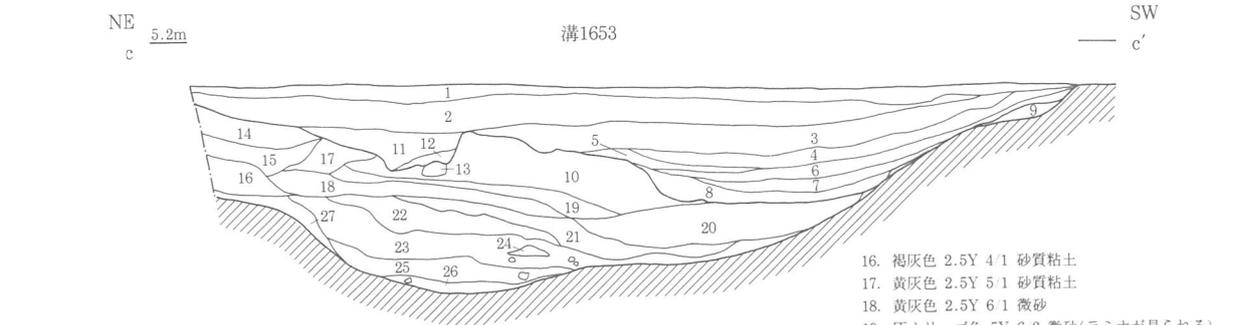
溝はトレンチ北東隅で検出した。トレンチ北西方向から入って南東方向に流れ出る。溝は南西側の岸が検出できたが、北東側の岸は検出できなかった。調査した範囲内で最大の溝幅は約6.4mを測る。溝幅は7m以上と推定される。溝の壁面は急な傾斜で落ち込み、底部は平らである。断面形状は逆台形を示す。溝の埋土は上層が黒褐色粘質土であり、下層が灰色微砂などの砂層である。溝の下層は流水堆積層が認められるが、上層は滞水状態の堆積層となる。溝1653と溝1652は大きな溝であるが、2つの溝の



- | | | |
|----------------------------------|---|---|
| 1. 黒色 2.5Y 2/1 粘土 | 2. 黒色 10YR 2/1 粘土 | 9. 黒色 2.5Y 2/1 粘質土(炭化物, 植物遺体を含む) |
| 3. 黒褐色 10YR 3/1 粘土 | 4. 黒褐色 2.5Y 3/2 粘土 | 10. 黒色 10YR 1.7/1 粘質土(炭化物3mm程度の礫混じり, 砂質が強くなる) |
| 5. 黒褐色 10YR 3/1 粘質土 | 6. 黄灰色 2.5Y 5/1 粘土 | 11. 黒褐色 7.5YR 3/1 粘土 |
| 7. 黒色 10YR 2/1 粘質土(炭化物, 植物遺体を含む) | 8. 明黄褐色 2.5Y 6/6 粘質土(最終面に多く含まれるブロック状の塊) | 12. 褐灰色 10YR 4/1 粘土 |
| | | 13. 黄灰色 2.5Y 4/1 粘土 |
| | | 14. 褐灰色 10YR 4/1 粘質土 |
| | | 15. 褐灰色 10YR 5/1 シルト~微砂(下層に行く程, 砂質が強くなる) |
| | | 16. 黄灰色 2.5Y 4/1 粘質土 |



- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1. 黒褐色 2.5Y 3/1 粘土 | 2. 黒褐色 10YR 3/1 粘土 |
| 3. 褐灰色 10YR 4/1 粘土(黒のベルト状) | 4. 黄灰色 2.5Y 4/1 粘土 |
| 5. 黒褐色 10YR 3/1 粘土 | 6. 黒褐色 10YR 2/2 粘土 |
| 7. 褐灰色 10YR 5/1 シルト層 | 8. 灰色 7.5Y 5/1 微砂 |
| 9. 暗灰黄色 2.5Y 5/2 微砂 | 10. 灰黄色 2.5Y 6/2 微砂(炭片混じり) |
| 11. 暗灰黄色 2.5Y 5/2 微砂 | 12. 明緑灰色 7.5GY 7/1 砂質土(地山層) |
| 13. 黒褐色 10YR 3/1 粘質土 | 14. 灰黄褐色 10YR 5/2 粘土 |
| 15. 黄灰色 2.5Y 4/1 粘土 | |



- | | | |
|---|--|---------------------------------|
| 1. 黒褐色 10YR 3/1 粘土 | 2. 褐灰色 10YR 4/1 粘土 | 3. 黄灰色 2.5Y 5/1 粘土 |
| 4. 黒褐色 7.5YR 3/1 粘土 | 5. 黄灰色 2.5Y 4/1 細砂混じり粘土 | 6. 黒褐色 7.5YR 3/1 粘土(明黄褐色の微砂混じり) |
| 7. 灰色 5Y 6/1 細砂混じり粘質土 | 8. 黄灰色 2.5Y 4/1 細砂混じり粘質土 | 9. 暗灰黄色 2.5Y 5/2 粘土 |
| 10. 黄灰色 2.5Y 6/1 砂質粘土(ラミナが見られる) | 11. 黒褐色 2.5Y 3/1 粘質土(砂混じり) | 12. 灰白色 2.5Y 7/1 粘質土(微砂混じり) |
| 13. 灰白色 10YR 8/1 細砂 | 14. 褐灰色 10YR 4/1 粘質土 | 15. 褐灰色 10YR 4/1 粘質土(砂混じり) |
| 16. 褐灰色 2.5Y 4/1 砂質粘土 | 17. 黄灰色 2.5Y 5/1 砂質粘土 | 18. 黄灰色 2.5Y 6/1 微砂 |
| 19. 灰オリーブ色 5Y 6/2 微砂(ラミナが見られる) | 20. 灰白色 10YR 7/1 砂質土(ラミナが見られる) | 21. 灰色 5Y 5/1 粘質土(炭混じり) |
| 22. 黄灰色 2.5Y 5/1 微砂(ラミナが見られる) | 23. 灰色 5Y 4/1 粘質土(砂混じり, 炭化物, 有機物を含む, ラミナが見られる) | 24. 灰黄色 2.5Y 6/2 砂質土 |
| 25. 暗灰黄色 2.5Y 5/2 粗砂(礫混じり) (5mm以上の礫を含む) | 26. 黄灰色 2.5Y 4/1 細砂(炭化物を含む) | 27. 暗オリーブ灰色 2.5GY 4/1 粘土 |

挿図35 4 A トレンチ V層上面 弥生I 溝 平面・断面図

埋土や土質、断面形状が異なっている。2つの溝の性格は違っていた可能性がある。溝1653は大量の水を流す灌漑用の性格を持つと考えられる。

2) 土坑 (挿図36、図版14-c d)

このトレンチの土坑は2種類の埋土が認められる。Aタイプの土坑は埋土が黒褐色を示し、土坑1605、土坑1608、土坑1623、土坑1625、土坑1626、土坑1659がある。Bタイプの土坑はオリーブ黒の埋土を示して、土坑1521、土坑1588、土坑1643がある。

土坑1634 (挿図38、図版14-a b c)

土坑はトレンチ中央付近にある。遺構の南東側に風倒木痕1649がある。土坑の周囲には遺構が少ない。土坑の埋土は上層が黒褐色粘土層を示し、下層が褐灰色粘質土である。大型の遺構で、黒褐色粘土層の上層に薄い色調V層が堆積するようなので風倒木痕の可能性を考えた。断面観察の結果は遺構埋土上層から黒褐色粘土層が堆積していた。このことから土坑と理解した。

3) ピット (挿図37、図版14-c d)

このトレンチのピットは柱掘り方の直径に比較して浅いものが無い。ピットの深さは約10cmから15cmである。ピットの埋土が黒色を示すものは数少ない。ピットの色調や埋土が集落域と違っている。このトレンチで検出したピットを組み合わせて建物を復元する事はできなかった。

ピットの掘り方埋土の色調によってAタイプからEタイプまで分類した。

Aタイプは埋土の上層が黒色、下層が黒褐色を示すもので、ピット1526、ピット1593、ピット1633が該当する。

Bタイプは最上層が黒褐色か黒色を示して、下層がオリーブ灰色か灰色を示すもので、ピット1570、ピット1583、ピット1629がある。

Cタイプは最上層が黒褐色を示して、下層が褐灰色を示すもので、ピット1535、ピット1609、ピット1612、ピット1631、ピット1660がある。

Dタイプは最上層が黒褐色で次の層が黄褐色を示すもので、ピット1552、ピット1592、ピット1610、ピット1611、ピット1632、ピット1650、ピット1651がある。

Eタイプは埋土がオリーブ灰色か灰色を示すもので、ピット1549が該当する。

4) 風倒木痕

風倒木痕はトレンチ東側に位置している。直径は大きく深い窪みを形作っている。周辺には遺構は全く見られない。

風倒木痕1649 (挿図38、図版14-a b c、15-b)

トレンチ南東側に位置する。風倒木痕は大きな溝の近くに位置して、他には遺構が存在しない。遺構の埋土は上層に黒褐色粘質土が片側で堆積し、反対側は灰白色粘質土が堆積している。遺構の下層は灰白色粘質土の下層には灰色粘質土の埋土が入り込んでいる。上層の灰白色粘質土が下層の灰色粘質土に乗った状態で検出された。

(6) 5 A トレンチ (挿図39、図版15-d)

トレンチのV層上面は大きな遺構は検出されなかった。V層上面の遺物出土量は少なかった。ピットは幾つか検出したが、建物は復元できなかった。IV層の厚さは薄い。IV層上面は遺構が検出されなかった。

1) 土坑 (挿図39、40、図版15-d)